

特別史跡熊本城跡総括報告書

調査研究編

第2分冊

2020

熊本市



## 特別史跡熊本城跡総括報告書 調査研究編

### 目 次

第1章 調査の概要.....	1
第1節 特別史跡熊本城跡の概要.....	1
第2節 総括報告書作成の経緯.....	1
第2章 熊本城の位置と環境 .....	2
第1節 地理的環境.....	4
第1項 概要.....	4
第2項 金峰山塊の岩質 .....	4
第3項 熊本城跡の地形 .....	6
第2節 歴史的環境.....	7
第1項 周辺遺跡の概要 .....	7
第2項 熊本城と城下の変遷 .....	11
第3章 熊本城研究史.....	15
第4章 発掘調査の概要.....	43
第1節 発掘調査史.....	43
第2節 発掘調査の内容 .....	43
第1項 本章の目的.....	43
第2項 対象範囲.....	43
第3節 各地区的概要と調査成果 .....	48
第1項 本丸地区.....	48
【本丸上段】.....	49
【平左衛門丸】.....	142
【敷寄屋丸】.....	149
【西竹の丸(飯田丸)】.....	154
【東竹の丸】.....	199
【竹の丸】.....	206
【西出丸】.....	224
【奉行丸】.....	230
【權方丸】.....	255

第1分冊

第4章 発掘調査の概要	1
第3節 各地区の概要と調査成果	1
第2項 二の丸地区	1
第3項 三の丸地区	34
第4項 古城地区	51
第5項 千葉城地区	89
第6項 城下(参考)	98
第5章 総括	130
第1節 地質・層序	130
第2節 遺構	149
第3節 遺物	162
第4節 石垣	185
第5節 西南戦争との関連	197
第6章 熊本城の調査研究と課題	205
第7章 付編	210
第1節 熊本城の石垣変遷	210
第2節 熊本城の出土瓦編年試案	229

第2分冊(本報告書)

## 第4章 発掘調査の概要

### 第3節 各地区的概要と調査成果

#### 第2項 二の丸地区

##### (1)概要

本報告書でいう熊本城二の丸地区は、西出丸を囲む北・西側の空堀から北西部の平部で、東から監物台樹木園・催し広場・二の丸広場・熊本県立美術館本館・野鳥園及び清夷園を含む地区であるが(4-3-2-4 図参照)、歴史的に「二の丸」と称する地域には変遷がある。

慶長 17 年(1612)の「肥後筑後城図」(山口県文書館蔵)では現在の二の丸広場から監物台樹木園にかけて「三之丸大めうやかた」とあり<sup>1</sup>、古くは「三之丸」と呼称していたとみられる。寛永 11 年(1634)の「肥後国熊本城普請仕度所絵図」(熊本県立図書館蔵)には平左衛門丸・敷寄屋丸・飯田丸・東竹の丸に「二丸」の表記があり、二の丸広場一帯には地区的名称を示すものは記されない<sup>2</sup>。正保期(1709)とされる「平山城肥後国熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)には「三之丸侍屋舗」と記される<sup>3</sup>。宝永 6 年に江戸幕府に城郭修繕のため提出した控である「肥後国熊本城絵図」(永青文庫蔵)には「二之丸」と表記され、現在の古京町一帯には「三之曲輪」とある<sup>4</sup>。

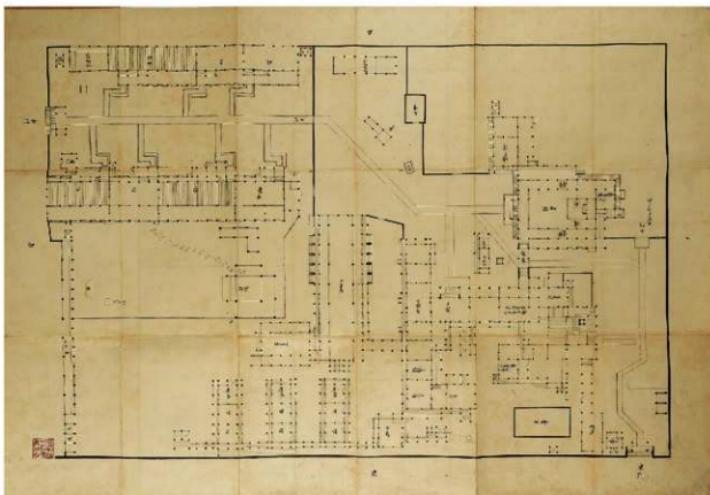
一方、熊本県立図書館や公益財団法人永青文庫には「二ノ丸之絵図」という名称の絵図が合わせて 20 点近く存在するが、これらが描く範囲は二の丸広場と監物台樹木園一帯に限らず、北は古京町、西は段山、南は古城、東は千葉坂に及んでいる。「二ノ丸之絵図」の名称で最も古いのは明暦 3 年(1657)以降に描かれたとされるものである(4-3-2-1 図)。絵図で描かれるすべての範囲を「二ノ丸」と呼ぶのか、屋敷割を示す目的から周辺地域も絵図に含めて描いたのかは今後検討が必要だが、少なくとも加藤期から細川入国直後までは「三之丸」と呼ばれていた現二の丸広場一帯が 17 世紀後半から 18 世紀初頭にかけて「二ノ丸」「二之丸」と呼ばれるようになつたと推定できる。

現在の二の丸広場及び催し広場一帯は江戸時代を通じて上級家の屋敷地で、細川家入国にあたっては、屋敷地に「上」「上々」といった等級を付けて屋敷割を行なった。例えば二の丸御門の東の一画は、加藤時代は相田内匠の屋敷地であったが、「上々」と付けられ米田監物の屋敷に割り当てられた。また、住江門東側の一画は加藤右馬丞の屋敷地であったが、「上々々」と付けられ筆頭家老の松井佐渡の屋敷に割り当てられている。米田家や松井家のように明治維新まで屋敷地の変化がないものもあるが、多くの屋敷地は所有者の変遷がある。この一帯への出入口として、北は二の丸御門と埋門、西は住江門、南は二の丸冠木門と慶宅坂上冠木門、東は椿庵坂上冠木門の 5 つの門が設けられた。このうち二の丸御門は 4 間 × 14 間の櫓門で、細川家入国後は家老の米田家が預かった。また、埋門は細川家一門で家老の長岡図書(細川刑部)家が預かつたもので、古写真から三階櫓であることが分かっている。埋門から二の丸御門までは「百間石垣」と呼ばれる石垣となっている。この石垣の構築は「縞考帳録」によると加藤清正の臣家原田茂兵衛(のち庄右衛門)で、この人物は清正の勘気を受けて浪人となり、慶長 19 年(1614)に細川家に召し抱えられたとされる<sup>5</sup>。慶長 17 年(1612)の「肥後筑後城図」にも二の丸御門から東に向かって石垣の表現があり、「石かきの高さ八間ほど 此間百三十間ほど」と記されているので、百間石垣の成立は清正時代とする「縞考帳録」の記述を裏付けている。

二の丸地区のうち監物台樹木園北側には国指定重要文化財の監物櫓(新堀櫓)があるが、これは江戸時代には「長岡図書預櫓」と呼ばれていた<sup>6</sup>。また、現存しないが椿庵坂北には長岡図書預櫓、住江門南東には松井(長岡)山城預櫓があった。松井山城預櫓は寛永 11 年の「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」に新規建築する櫓として描かれており、寛永 21 年(1644)までに完成したとみられる<sup>7</sup>。また、住江門の西には加藤時代には空堀があり、鉤状に折れて北へ伸びていた。「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」も同様の描写で、この空堀の幅を西に 5 間拡張すること、さらに空堀に面する県立美術館西側石垣は加藤期に構築途中のままであるので、高さ 3 間半、幅 3 間半の石垣普請が実施された。これ以降の絵図では、住江門から西へ石垣上に 33 間半の堀が描かれ、空堀



4-3-2-1 図 二ノ丸之絵図(熊本県立図書館蔵) 明治前後



4-3-2-2 図 時習館井東樹・西樹絵図(永青文庫蔵)

は鉤状に折れずに西面の石垣の南端までとなっている。

明暦 3 年(1657)以降とされる「二ノ丸之絵図」(熊本県立図書館蔵) (4-3-2-1 図)には、現在の二の丸広場北東にあたる一画は平野茂左衛門と河喜多九大夫の屋敷地である。その後居住者の変遷がみられるが、この場所には宝暦 4 年(1707)12 月に藩校時習館が設立され、翌 5 年に開校した。宝暦年間の「二ノ丸之絵図」には「学校」と記される<sup>7</sup>。「時習館及東榭・西榭絵図」(4-3-2-2 図)によると、時習館は南北 63 間、東西 43 間の敷地の南西に南門、東北に東門があり、敷地北側には宝暦 11 年(1761)に新しく建てられた講堂「尊明閣」のほか、居寮や文庫などの建物があった。また、敷地の南西には藩の武芸所(東榭・西榭)が置かれた。

明治 4 年(1871)正月、時習館は廃止され、一帯を操練場とした。これ以降、時習館や屋敷の解体が進み、明治 7 年(1874)8 月には歩兵營一大隊分の兵舎が落成した。翌 8 年 4 月に兵舎全体の建築が終わり、歩兵第十三連隊が駐屯した。明治 9 年(1876)10 月の神風連の変で歩兵第十三連隊本部・同第二大隊・第一・第二・第三中隊兵舎、同右半大隊廻井廻所が焼失し、再建された。

明治 10 年(1877)の西南戦争では法華坂に地雷が埋設され、堡籠で道をふさいで通行できないようにし、法華坂を望む現国立病院付近には政府軍の砲台が築かれた<sup>8</sup>。明治 11 年(1878)に現在の清美園に四役記念碑が建立された。この記念碑は佐賀・台湾・神風連・西南戦争による戦没者を慰靈したもので、翌年に明治天皇より 300 円が下賜され庭園が整備された。明治 18 年(1885)には旧花畠屋敷の庭石を払い下げを受け、庭園を整備して翌年完成了。



4-3-2-3図 昭和22年(1947)航空写真(国土地理院ウェブサイト)

明治 22 年(1889)熊本地震では、百間石垣・二の丸御門一帯・松井山城預櫓台・熊本県立美術館南側と西側石垣が崩落・膨らみの被害が生じ<sup>7</sup>、復旧されている。また、地震では歩兵第十三連隊兵舎でも被害が生じたが、改築等が行われながらも存続し、大正 14 年(1925)に歩兵第十三連隊が渡鹿の新兵舎に移ると、跡地は陸軍教導学校となり、戦後は熊本大学医学部や熊本第二高等学校の校舎として利用された。戦後の航空写真には、現在の二の丸広場に旧兵舎の配置を見ることができる(4-3-2-3 図)。

また、監物台の歩兵第二十三連隊は明治 27 年(1894)に山崎に移転すると、明治 30 年(1897)に跡地は陸軍幼年学校となった。昭和 26 年(1951)の白川大水害では、市中の土砂が西出丸と二の丸間にある空堀に廃棄された。

昭和 8 年(1933)に石垣・堀が史蹟に指定され、昭和 27 年(1952)に現在の二の丸広場、催し広場、二の丸駐車場、県立美術館、野鳥園・清夷園一帯が史跡に、昭和 30 年(1955)に特別史跡に指定された。その後、二の丸地区一帯は昭和 42 年(1967)に熊本城公園計画に基づいて都市公園として整備に着手し、昭和 43 年に熊本県立第二高等学校が移転し建物が撤去され、現在の芝生広場が形成された。また、昭和 51 年(1976)に二の丸の北西部に熊本県立美術館が開館した。

<sup>1</sup> 『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編 絵図・地図・写真』熊本市 2019 4 頁

<sup>2</sup> 計 1 報告書 11~16 頁

<sup>3</sup> 計 1 報告書 33~38 頁

<sup>4</sup> 計 1 報告書 23 頁

<sup>5</sup> 『鶴岡頼経 第二巻 忠興公(上)』汲古閣院 1988

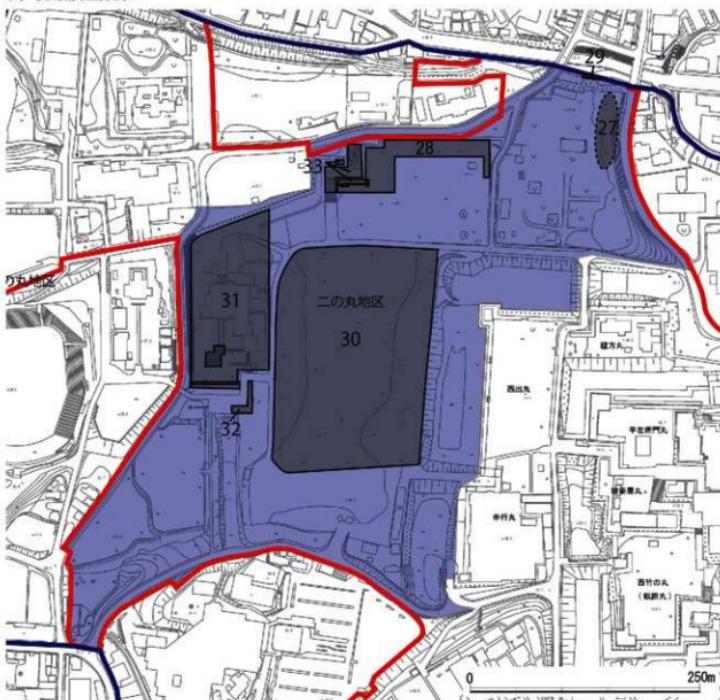
<sup>6</sup> 『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編 史料・解説』熊本市 2019

<sup>7</sup> 計 1 報告書 99 頁

<sup>8</sup> 計 1 報告書 154~155 頁

<sup>9</sup> 計 1 報告書 158~159 頁

## (2) 発掘調査成果



27. 節根橋際横穴群 28. 米田部跡(二の丸催し広場) 29. 葛物櫓(新堀櫓) 30. 待屋敷(二の丸芝生広場)  
31. 田中・住江部跡(熊本県立美術館) 32. 松井山城預櫓跡 33. 二の丸御門跡

4-3-2-4 図 二の丸地区発掘調査地位置図

### < 27 節根橋際横穴群 >

報告書：熊本市教育委員会『熊本市北部地区文化財調査報告』1971

調査期間：昭和44年(1969)8月24日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

市内に残る文化財の全面的な調査として、昭和42年の西山地区に続いて昭和44年度に北部地区的調査を行なった。7月12日の調査団結成より昭和45年3月に至るまで24回に亘って北部地区内の調査が行なわれた。その間9回の連絡報告会を開いて討議し、4月以降も補充調査が行なわれた。

#### ・調査の方法

熊本市北部地区(井芹川以東白川以西のうち、熊本城南端、坪井川、壺川小学校前、坪井立町、国道57号線、子飼橋の線より以北、北部町西合志町、菊陽町境まで)を坪井川以西、坪井川以東、白川右岸の3地区に分けた。調査員は分担を定めず全員が全地区的調査に参加し、カード作製に当たって種目別に分担した。

#### ・調査の概要

旧国道3号線、現県道四方寄熊本線の磐根橋南端、監物台樹木園の東側崖面下部に4基の横穴古墳がある。橋に近い2基は戦時中防空壕に転用され、戦後も永く入居者がいたため内部も著しく改造されており、さらに樹木園が外柵を設置した44年までには不燃屑の投棄所となっていたため、ガラス器具、金属屑、陶器片等埋まっている。残りの2基は前の2基よりやや高い所にあって出入りに不便であったため割り損は少ない。4基とも早くからその存在が知られ、昭和6年の熊本市史にも記載されているが、内部は未調査である。

今回の調査は目視による現地踏査のみで、図面などの記録はない。

#### < 28 米田跡(二の丸催し広場)>

報告書：熊本城調査委員会『特別史跡熊本城跡二の丸調査報告書』1976

調査期間：昭和47年(1972)9月30日～10月31日

調査面積：不明

調査主体：熊本城調査委員会

#### ・調査に至る経緯

熊本市公園課が二の丸の催広場の整備工事の一環として、排水路を新設する計画をたて、それに関して現状変更の申請を行なうこととなつたため、旧城跡の遺構の存在を確認する必要があった。調査は公園課の計画地域内において、排水路新設予定路線が遺構と抵触しないかどうかを調査することを主要な目的とした。

#### ・調査の方法

発掘調査は、文献調査と並行して百間石垣の南側にトレチを設定し旧遺構の検出が行なわれた。トレチを1～10まで設定した。公園課の新排水溝計画は百間石垣の南側廓内に大体百間石垣の屈曲に沿つて構築する予定であったので石垣に対してT字形になるようにトレチを入れて検出した遺構を追跡した。

#### ・調査の概要

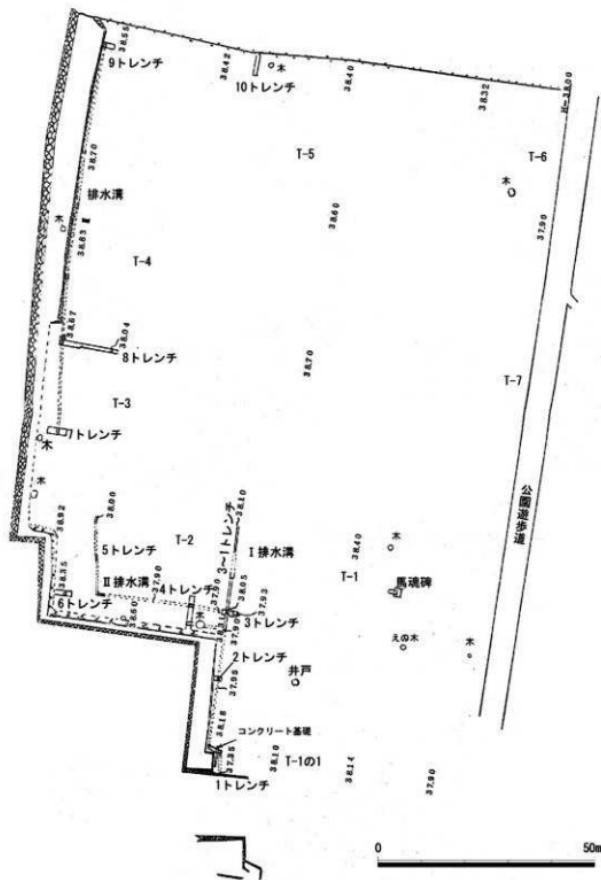
1トレチは、二の丸御門南側で幅1m50cm、長さ5m掘削を行なった。石垣にそって東西に走る排水溝が認められた。この排水溝は幅30cmで凝灰岩を用い蓋石は認められない。又その排水溝の南側にセメントでできた基礎があり、南側へ曲がった排水溝の上を横切っている。南側へまがった排水溝は、セメント基礎の下を南へ曲がり、西へ曲がり、二の丸御門の虎口の下部に開口部を設け、排水している。2・3トレチで検出された排水溝の東側を掘削し、東へ続いていることを確認した。東の先端は破壊されていたため、確認できなかつた。

4トレチは、南北に走る石垣にT字形に幅1m、深さ50cm、長さ25mの掘削を行なった。トレチ内部は搅乱されていて瓦の破片や凝灰岩の破片が埋め込まれた雑物が相当数出土した。検出された石垣の下部において二段ほど積石が抜かれており、セメントで側溝が造られていた。また、トレチの深さ90cmの部分に矢板の痕跡のある積石列が認められその積石列を東外壁として凝灰岩で作った幅30cmの南北に走る排水溝が認められた。検出された排水溝は、南端で第1～3トレチで検出された排水溝の下をくぐつて約2m先で消滅している。この排水溝の北の端は北側石垣より10mぐらいの所で東へ直角に曲がつてこれも屈曲部より東18mくらいの点で消滅している。

百間石垣法面から南へ6～7mのところに東西に続く排水溝が認められた。安山岩で構築され、幅は35cmで底をセメントで固めている。長さは90m以上にわたることが7・8・9トレンチによって確認された。排水溝の深さは、7トレンチでは25cm、9トレンチでは53cmである。

10トレンチでは、瓦の破片・凝灰岩の破片が出土したが、排水溝は確認できなかった。但しその南側土手の線に沿って昭和42年(1967)のガス管理設工事の際排水遺構が存在したことが確認された。

発掘に伴って出土した遺物には軒丸・軒平瓦や陶器の破片などがあった。軒丸・陶器破片には米田監物(長岡監物)の家紋である釘抜紋が認められた。



4-3-2-5 図 二の丸百間石垣南側実測図

## < 29 監物櫓 >

報告書：熊本市『重要文化財 熊本城監物櫓・長櫓修理工事(屋根葺替、部分修理)報告書』1974

調査期間：不明

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

### ・調査に至る経緯

昭和 28 年(1953)以降、国の直轄事業として櫓の解体修理工事が実施された。監物櫓は昭和 53 年度に修理が実施された。監物櫓創建の手掛りを得ることを目的とした。

### ・調査の方法

保存修理工事の実施に伴い、創建の手掛りを得るために、西・北面の石垣下二カ所を発掘した。

### ・調査の概要

西側は道路造成のために掘り返されており、資料は得られなかった。北側トレンチの基本層序は、

a. 表土層

b. 瓦混じりの層

c. 漆喰層

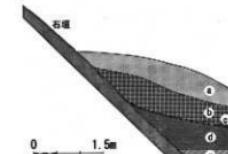
d. 瓦・漆喰・安山岩の小片混じりの層

e. 地山の土の埋め戻し層

土中の漆喰は、昭和 29 年(1954)の解体修理の前に幾度も修理が行なわれていることを示しているが、c 層が安政 7 年(1960)の大改修を示しているのかどうかは判断できなかった。d 層からは、元禄

五年銘の瓦が発見され、この層は元禄以後のものであることがわかった。d 層から出土した瓦は、瓦質の白いものが目立ち、丸瓦の裏には、ずれ止め用と見られる縄目が入っていた。土中の漆喰はよく残っており、やや赤みを帯び、粗いものが多くあった。

軒丸瓦は、九曜紋が大部分で、重弁紋様のものが一枚あり、軒平瓦は、九曜紋と桔梗紋と他一種があった。その他瓦釘、和釘、刀の鞘口、西南戦争に使用されたと思われるアームストロング砲の砲弾の一部、陶器、磁器の破片があった。



4-3-2-6 図 北側石垣下地層断面図  
(第 14 図)



監物櫓石垣下出土(瓦)  
43 軒平瓦および丸瓦表面目拓本



44 監物櫓石垣下出土瓦(瓦) 刻印拓本

4-3-2-7 図 出土瓦 拓本・瓦刻印

## < 30 侍屋敷(二の丸芝生広場) >

報告書：熊本城調査委員会『熊本城二の丸・三の丸遺跡調査報告』1979

調査期間：昭和 50 年(1975) 1 月 17 日～ 3 月 5 日

調査面積：不明

調査主体：熊本城調査委員会

### ・調査に至る経緯

昭和 47 年熊本城二の丸の北西部、もと田中左兵衛・住江甚兵衛の屋敷跡に熊本県立美術館の建設が予定され、建物の排水に関して論議が行なわれた。美術館建設に伴い、雨水が完全流下水となり、法華坂下の民家に被害を及ぼすことが予想された。公園施設の埋管では集水に対する収容能力がないため、新たに大口径の排水管を埋設する必要があった。県立美術館新設の現状変更に際し、管理団体である熊本市は、熊本県と協議を行ない、配水管についての意見書が添えられた。そして、昭和 49 年(1974) 5 月 17 日付けで許可が下りた。発掘調査は配水管の埋設路設定のために調査が必要となったことで実施された。

### ・調査の方法

調査の実施にあたり、以下の目的と制約事項が求められた。

1. 美術館管理敷地内より、鞍状通路に至る地域の遺構の有無を調査し、排水管を最短距離で埋設できる遺構のない通路を探査してほしい。2. 但し、現在園路として整備しているところおよび駐車場内は観光バスおよび観光客に障害を与えるので、排水管は通さない前提で調査してほしい。3. なお美術館からの要望および制約として、現在工事進行中なので美術館管理区域についての調査は今回控えてほしい。また工事現場南端に変圧器を設置しているので、この付近は危険につき調査の対象外としてほしい。

発掘調査は、文献調査に基づいて、現地における旧藩時代の屋敷地割の確認と、道路遺構の遺存状態およびその他の遺構の保存状態の確認を確認の目的とした。発掘は全て手掘りで行なわれた。

調査目的の達成のため、屋敷地と道路敷との境界確認が必要であり、4-3-2-8 図のようにトレントを設定した。屋敷割の基本となる道路線は二の丸西側中央の虎口から、直線で東に向かう通路であることが図面から明らかであったため、通路の確認から開始した。調査区を A・B・C 区に分け、A 区トレントに a 1 ~ a 15 まで、B 区に b 1 ~ b 16 の記号を付した。

### ・調査の概要

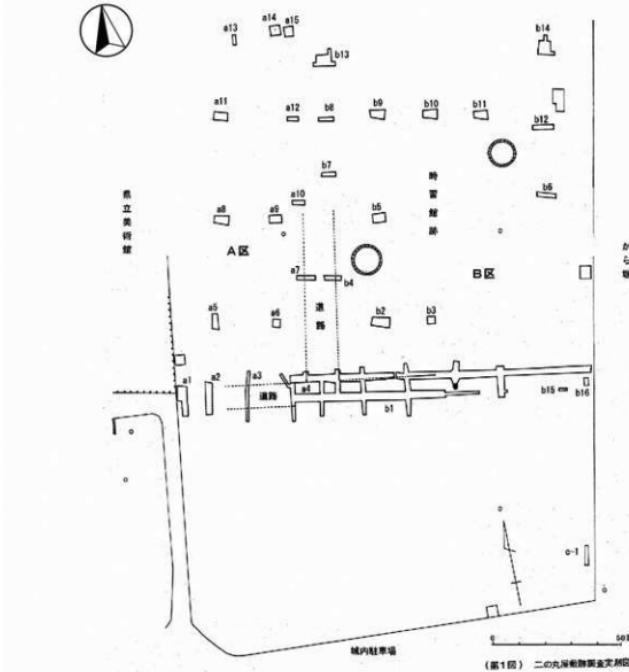
A 区の a 4 トレントでは屋敷割の南東角の角が検出された。南側の部分においては石組みの側溝が検出された。石材は凝灰岩と安山岩が使用されている。江戸期の道路面より若干、石の上端が出来る程度の深さに位置している。a 7 トレントでも側溝の石組みが検出された。a 3 トレントでは南側の屋敷と道路の境界、北側の屋敷と道路の境界が検出された。南側と北側の境界が検出されたため、道路の幅が確認された。a 6 トレントでは塵芥捨て場が検出され、多量の遺物が出土した。遺物を包含するのは地表面より 60 cm 下位のところである。出土した土器すべて江戸末期の頃であり、米田家紋の瓦・磁器が出土した。陶磁器は主に有田焼である。その中に釘抜紋入りの皿・碗も多くみられた。他に象眼を器面に施した松尾焼の碗・子岱焼、唐津焼、青磁には鍋島のものが出土地した。それらとともに瀬戸物といわれるような土器がかなり出土した。陶磁器は小型のものが殆どである。大型の甕、桶鉢、火鉢も出土している。他にも多量の貝類、獸骨片、魚骨片、鉄片が出土した。a 1 トレントでは、排水溝が検出された。底部と側面の石材は凝灰岩であり、蓋石には安山岩が用いられている。底部と側面の間はコンクリートで目張りされている。

トレント南側の溜枡へ結合しているが、若干左に振れています。遺物は、菱井柄紋の軒丸瓦、布目瓦 2 点が出土した。a 7 トレントより北側では搅乱のため、遺構は検出されなかった。

B 区の b 1 トレントでは A 南西部角と南側一帯の境界、側溝が検出された。側溝の内側には漆喰層がみられた。南西部角から東 50 m までは旧状を残しているが、その先は搅乱のため遺構は検出されなかった。

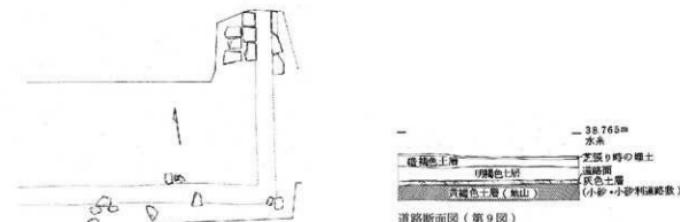
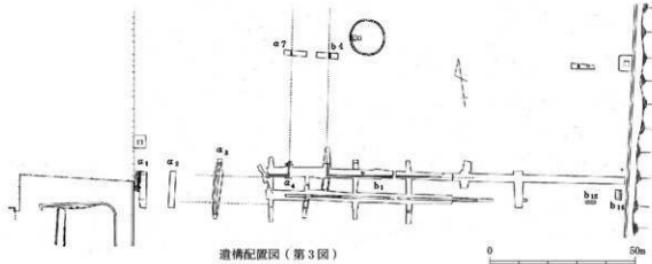


(第2図) 二の丸屋敷跡略図

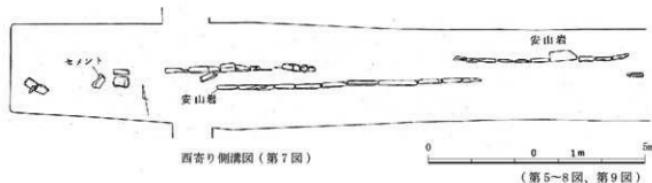
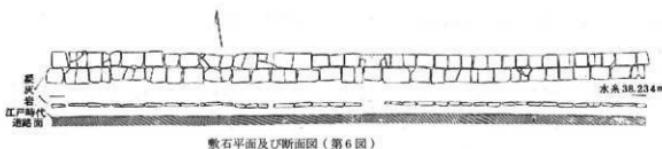


(第1図) 二の丸屋敷跡調査実測図

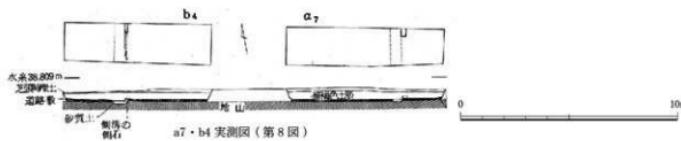
4-3-2-8図 二の丸屋敷跡調査実測図(第1図)



a4側捲 (第5図)



(第5~8図、第9図)



4-3-2-9図 二の丸屋敷跡-調査実測図(第3・5~9図)

側溝は南西部において石が抜かれている部分もあるが、土層の変化から、抜かれた石の存在が確認された。主に凝灰岩が用いられているが、一部安山岩も使用されている。石材の規格は、高さ 20 cm 前後、厚さ 10 cm 前後である。側溝の幅は、35 ~ 40 cm、深さ 16 cm 程度である。道路面は一面に砂と砂利が敷き詰められていた。道路敷では、東西方向に約 6.5 m 幅の敷石状遺構が検出された。残存部は約 63 m あり、東西の端は搅乱によって破壊されていた。幅約 30 cm、厚さ 7 ~ 9 cm 程度の板状の凝灰岩を 2 列並行して敷いている。旧道路面より 20 cm くらい上に位置し、堆積土の中には瓦片、陶磁器片などが含まれていた。九曜紋の軒丸瓦・軒片瓦・鬼瓦、トレンチ南側より輪進紋の軒瓦、巴文の軒瓦、垂瓦片が出土している。b 4 トレンチでは境界を確認し、側溝が検出された。B 区におけるそれ以外のトレンチは搅乱を受けていたため、遺構は検出されなかった。

#### < 31 田中 住江跡(熊本県立美術館) >

(昭和 47 年(1972))

報告書：熊本県美術館建設準備室『熊本城二の丸跡史蹟調査報告書 - 県立美術館建設予定地 -』1972

調査期間：昭和 47 年(1972) 6 月 10 日～7 月 20 日

調査面積：14200 m<sup>2</sup>

調査主体：熊本県総務部美術館建設準備室

##### ・調査に至る経緯

熊本県立美術館が熊本城内二の丸跡に建設されることになった。美術館建設予定地一帯には土塁、橋形などが残っているため、これらの構造物の歴史的な価値を見極め、その利用と現状変更の可能性および限度を見極めることが必要であった。そのため、文献史料および発掘による調査が行なわれた。

##### ・調査の方法

敷地の現況観察からトレンチの設定場所を決定している。予定地東側の土塁にあたっては土塁上の樹木を損傷しないように、第 1 ～ 第 4 のトレンチが設定された。予定地西側の土塁には、第 5 ～ 第 7 のトレンチが設定された。西の橋形付近に旧觀を復元する資料となる遺構を確認することを目的として第 8 ～ 第 12 トレンチが設定された。

##### ・調査の概要

第 1 トレンチは土塁南端より 54 m の地点に設定した。土塁の幅は、基底部で約 4 m、頂上部で 2.5 m ある。土塁頂上より 0.2 m の深さで地山のローム層(黄褐色土層)に達する。ローム層は土塁の西側で土塁頂上より 1.5 m の深さまで切り取られており、土塁西側基部から 2.4 m のところで再び切り取られ栗石を裏込めとする石垣となっている。石垣の東側の土層は、ガラス片、ビニール製品などが混在している。東側排水溝から 1.3 m 西に寄ったところに多量の瓦片が埋められていた。近世近代のものが混ざっていた。

第 2 トレンチは、支溝が一部露出する部分に設定した。土塁南端より 43 m の地点である。支溝は土塁頂上の中央から始まり、東側排水溝に至っている。側石は一部失われているが、溝底には凝灰岩製の切石が敷き詰められていた。土塁上の支溝のはじまるところには、U 字状のくりこみをもつ石材を側石に直角にはめ込んである。排水溝に接している幅 25 cm、厚さ 23 cm、長さ 2 m の石材が敷かれていたが、一部折れており、本来の長さは不明である。門の出入路の幅を確認するため、出入路の南側を 3 m、幅 40 cm、深さ 1 m 挖削したが搅乱されており、遺構は検出されなかった。土塁中央より 3.5 m の間を深さ 1.2 m 挖削したが、地山に達せず、搅乱されていた。トレンチの底部からは陶磁器片、ガラス片が出土した。

第 3 トレンチは土塁南端より 28 m の地点に設定した。地山のローム層は土塁頂上より 50 cm の深さにあり、東側は石垣築造のため切り取られている。ローム層の残存状態は第 1 トレンチと類似している。

第 4 トレンチは土塁南端より 5.5 m の地点に設定した。中央に凝灰岩の角材を南北に 1.98 m の長さに

据え、西側に凝灰岩の板石を敷き詰めている。中央角材にはセメントが付着し、鉄棒をネジで取り付けた石材の破片もある。土壌は擾乱されており、底部にローム層が確認された。

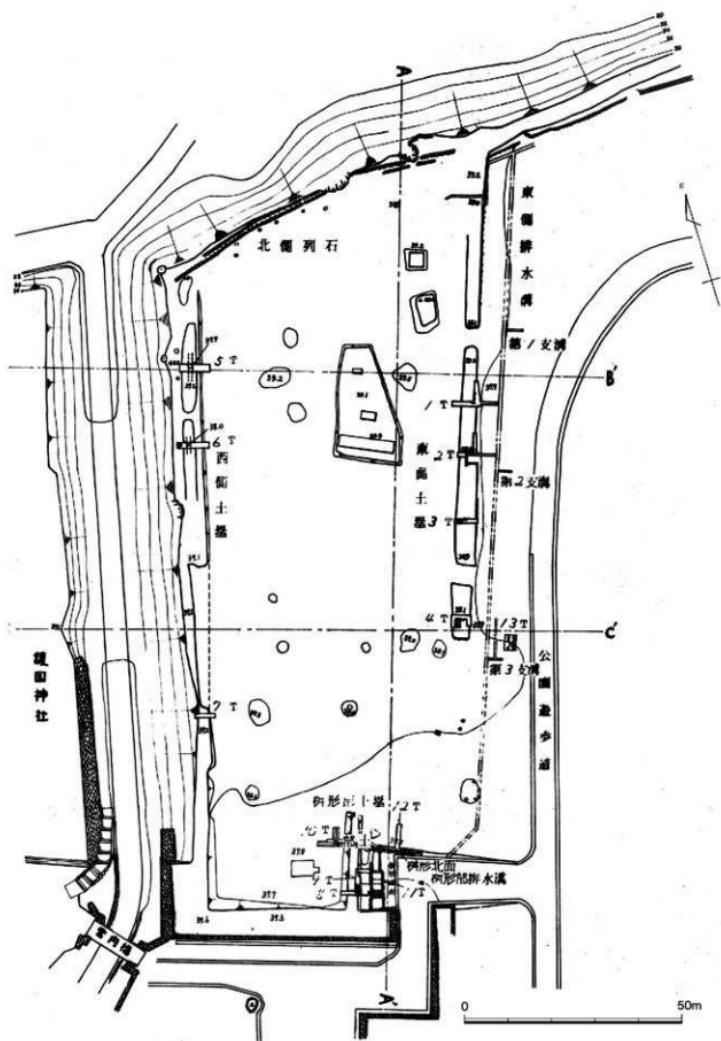
第6トレンチでは現地表下約50cmに旧地表面と思われる木炭を含んだ層があり、トレンチ西端に凝灰岩と安山岩の切石が発見された。石の上には、数種の粘質土が盛り上げられ土壌となっている。旧地表面直上からは、瓦や壁土が出土した。溝は盛土と旧地表面を切って、U字状に地山のローム層まで掘り下げられている。第5トレンチ掘削時、構内からは木葉猿などが出土した。溝の底は、第5トレンチが第6トレンチより30cmほど深い。

第7トレンチでは、土壌の下から明治期以後の磁器やガラスなどが出土した。

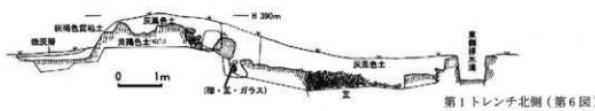
第8トレンチでは、凝灰岩製の石段が11段検出された。石段を登ったところに列石がみられたため、検出をしたところ、枠形の石垣の際から北に11.1mのびてその先は失われていた。また、石段から4.7m離れた地点に、石段とほぼ平行に凝灰岩製の板石が並べられているのが検出された。土層は、地山のローム層の上部に礫が被っており、その上に盛土がのっている。盛土が55cm堆積しており、盛土の上に暗褐色土層が10~20cm介在し、その部分に漆喰がはさまっている。この層より下層はよく縮まっており、包含層もほとんどない。

枠形北面の上縁部に設定したトレンチからは遺構が検出されなかった。枠形北面の傾斜面を掘削したところ、ビニール、陶磁器、瓦などを含んだ土の下層より石垣、土留めの基部列石、排水溝が検出された。石垣は20~30cmの自然石を一段積んで、上部に凝灰岩の角石を大小混ぜて積んだものである。基部列石は、枠形部土壌の基部列石に続くものである。石組が粗雑である。基部列石に沿うようにして深さ30cm、幅40cmの排水溝が東西方向に走っている。西は枠形土壌を突き抜けており、東は基部列石に沿いながら、次第に列石から離れ、枠形道路の路面下に至っている。西側の枠形土壌を突き抜けた先には70cm×70cmの「ため」があり、「ため」の上縁部にはビニールやガラス片が混在して検出されており、東側排水溝に繋がっているものと思われる。

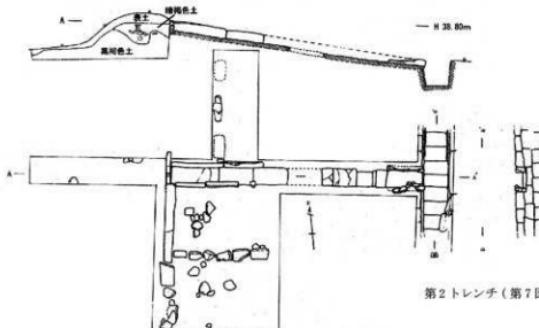
遺物は、東側排水路や枠形付近から多く出土した。最も量が多かったのは陶磁器片で、鉢・皿・碗・台付碗・徳利・酒杯など有田系の染付が多く、江戸中期以降のものである。幕末から明治にかけての陶磁器も出土している。染付以外では、唐津焼と思われる鉢・皿、二川焼と思われる甕の破片が出土した。瓦は主に枠形付近と第2トレンチで出土した。波瓦・板目瓦・軒瓦が出土しており、軒瓦の紋様には、尾長三巴文・勾玉状三巴文・九曜紋・蛇の目紋がみられた。刻印には「諸藤製」・「永」などがある。他の遺物としては、南宋から明代の初頭と思われる青磁片や鎌倉から室町時代の瓦器片、板碑の破片、布目瓦、土師器・須恵器片が出土した。板碑は、縦52cm、幅82cm、厚さ38cmに割られており、「妙春」・「妙清」・「淨心」などの法名が刻まれているが、表面が摩滅し、解読できない。



#### 4-3-2-10図 美術館建設予定地発掘調査図(第5図)



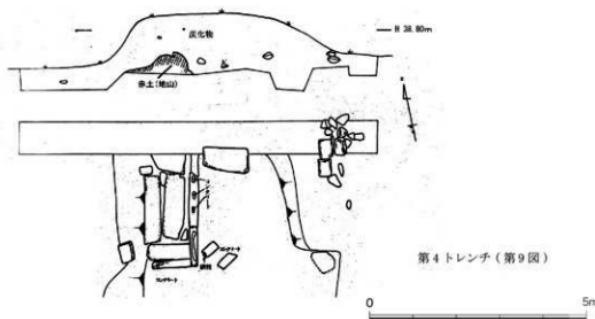
第1トレンチ北側（第6図）



第2トレンチ（第7図）



第3トレンチ南側（第8図）



第4トレンチ（第9図）

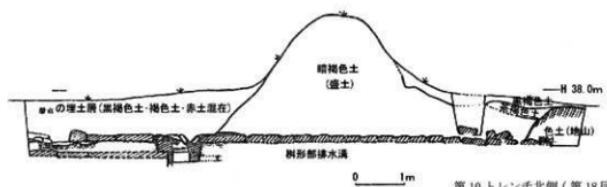
4-3-2-11図 第1~4トレンチ実測図(第6~8図)



第5 トレンチ北側 (第12図)



第6 トレンチ南側 (第13図)



第10 トレンチ北側 (第18図)



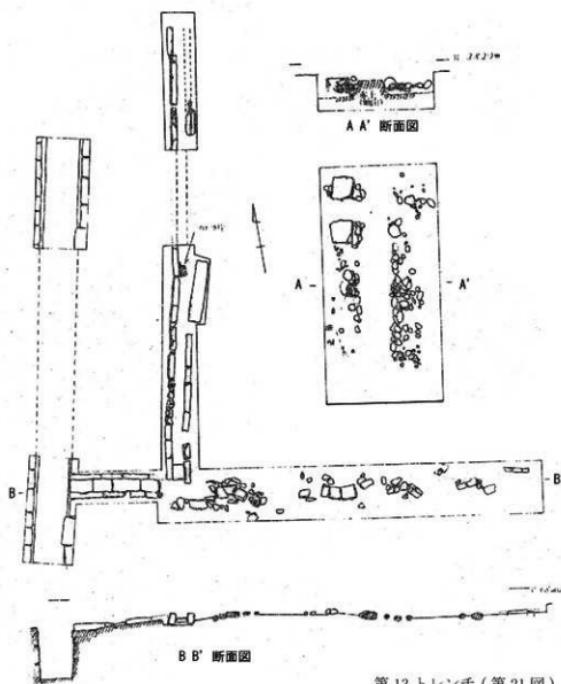
第10 トレンチ南側 (第19図)

0 5m

4-3-2-12図 第5・6・10トレンチ実測図 (第12・13・18・19図)

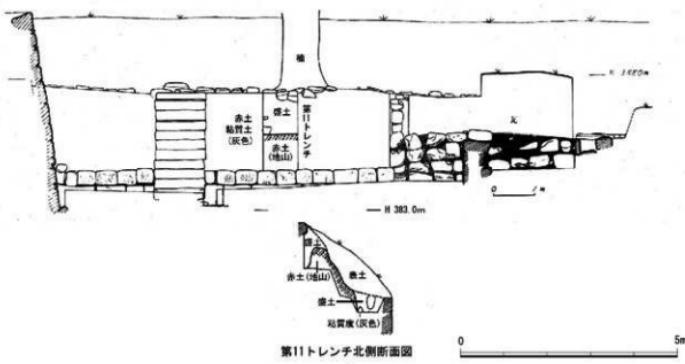
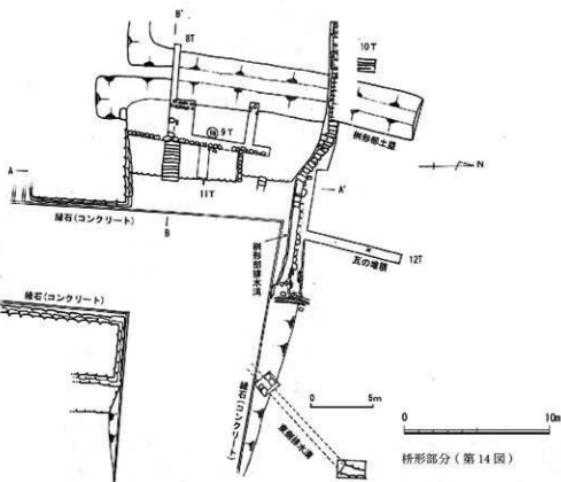


第12 トレンチ西側（第20図）



第13 トレンチ（第21図）

4-3-2-13図 第12・13トレンチ実測図(第20・21図)



4-3-2-14図 桥形部分実測図(第14・15図)

(昭和 52 年(1977))

報告書：熊本城研究会『熊本城三の丸・二の丸遺跡調査報告書』1980

調査期間：昭和 52 年(1977) 1 月 28 日～2 月 3 日

調査面積：不明

調査主体：県立美術館建設準備室

・調査に至る経緯

昭和 52 年 1 月、美術館の付属施設として多目的室建設が行なわれている際に新たに遺構が発見された。美術館では熊本県教育庁文化課および熊本市教育委員会と協議を行ない、県文化課に依頼して緊急に発掘調査を実施することになった。

・調査の方法

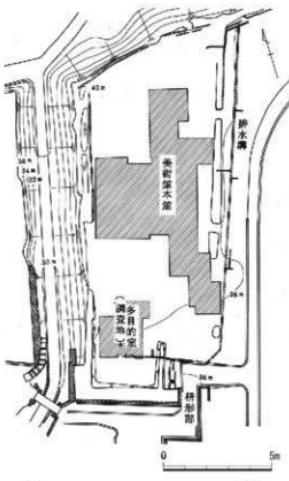
調査は熊本県文化財専門委員と熊本市教育委員会の指導を受けて、熊本県文化課が担当した。

・調査の概要

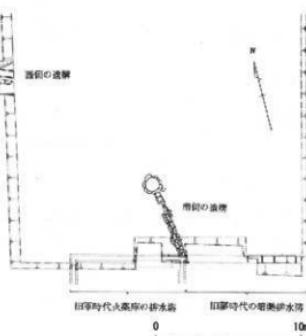
美術館多目的室建設地内の南寄りの所から、集水樹とみられる遺構が検出され、それに連なって、南へのびる切り石で造られた V 字状溝が検出され、その端部は東へのびる暗渠排水溝と、南及び西へのびる開渠排水溝に接続されていた。また建設地の西側の土層に袋状ピットと U 字状溝、V 字状溝が重複した所が検出されたので、ここを少し拡張して調査した。

集水樹状遺構は上部は凝灰岩切石による石組み、下部は素掘りからなる深さ 3.52 m の円筒状の遺構である。石組みは上端から切石で 9 段組まれており、直径は 0.9 ~ 0.95 m。内面は円になるよう各石は曲面をなして抉られている。この石組みに裏込め石はみられない。素掘りの部分は深さ 1.26 m。上部は黄褐色粘質土層(ローム)であるが下方にいくに従って吸湿性の強い凝灰岩質(火碎流)となる。内部は木炭片と灰で埋め尽くされていた。上部の石組みは熊本城内に残る井戸に類似しているが、吸水性の強い凝灰岩層まで掘られている。

V 字状排水溝は集水樹状遺構と東・南・西へのびる排水溝とを結ぶためにつくられた排水溝で長さ 50 m である。集水樹状遺構の方へ傾斜している。排水溝の幅は 20 ~ 30 cm、深さ 20 cm 程度であるが、切石は厚さ、長さ、幅ともに一定でない。部分的に蓋石が残っているが、割れた石材などが使われ、1 個は五輪塔の地輪を転用している。集水樹状遺構に



4-3-2-15図 美術館敷地測量図(第1図)



4-3-2-16図 調査地遺構位置図(第2図)

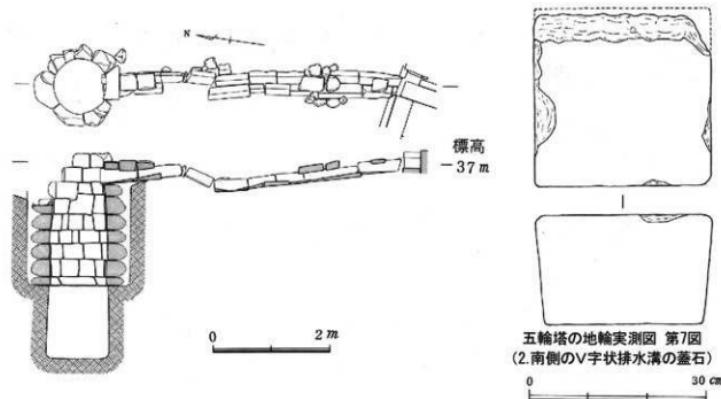
比べV字状溝は後ではめこんだという感じで隙間は開いたままである。一部セメントも使われている。ある時点で他への排水が困難となり集水桟状造構を利用したのだろう。東へのびる暗渠は昭和47年(1982)の発掘調査で確認された二の丸入口の橋形部排水溝の延長で橋形部へと傾斜している。溝の幅0.26m、深さ0.28mを計り、蓋石は厚さ0.1m、幅0.5m、長さ0.6~1.0mの切石を用いている。この排水溝は美術館の東側にある南北にのびる排水溝と類似しており江戸時代のものとみられる。

南・西へのびる開渠状排水溝は東の暗渠排水溝へ流れ込むようになっている。西へのびる溝は幅0.3m、深さ0.3m、長さ7.25mである。開渠排水溝からはガラスが出土している。

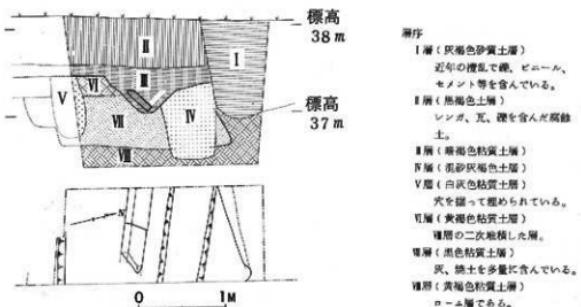
袋状ピットは黄褐色粘質土層(ローム層)に掘りこまれた造構で、底面は長さ2.2mあり、幅は1.1m以上である。南側には底面より約0.2m高くなった所があり、約0.3m幅の面をなしている。現在黄褐色粘質土の削平面から底面まで0.6mである。この造構の中は灰や焼土を多く含んだ黒色粘質土で埋まっており、土師質皿の破片と白磁の破片、砥石などが出土している。また五輪塔の地輪も一個落ち込んでいた。土師質皿は糸切底である。口径は7.7cmと10.0cm、いずれも口縁部は尖りぎみである。13世紀前半に位置づけられる。白磁は楕円高台はヘラで削り出しており、内面には一条の沈線を施している。太宰府分類IV類である。

U字状溝は、再堆積層である黄褐色粘質土層の上から掘られた溝である。東北東へのびる素掘りの溝で、上部の幅約0.7m、底面の幅約0.5m、深さ0.9m。砂を含んだ灰褐色土で埋まっていた。排水溝とみられる。

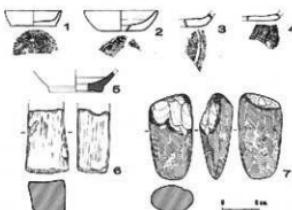
V字状溝はU字状溝埋没後に掘られた溝である。凝灰岩の切石をV字状に組んで造られた排水溝であるが、一方の切石は抜き取られている。復元すると溝の幅0.3m、深さ0.15mであったとみられる。



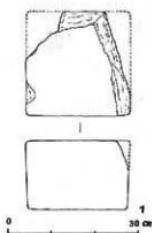
4-3-2-17図 集水桟状造構とV字溝・五輪塔実測図(第3・7図)



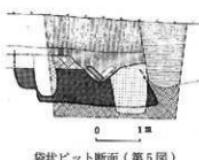
調査区西側造構断面及び平面(第4図)



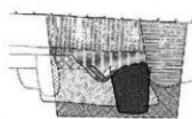
袋状ピット出土遺物(1~6 第6図)



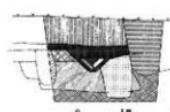
五輪塔の地輪実測図(1は袋状ピット内出土 第7図)



袋状ピット断面(第5図)



西側のU字状溝断面(第8図)



西側のV字状溝断面(第9図)

図 調査区西側造構・遺物実測図(第4~9図)

(昭和 60 年(1985)～昭和 62 年(1987))

報告書：熊本市教育委員会『特別史跡 熊本城跡 美術館南側石垣保存修理工事報告書』1987

調査期間：昭和 60 年(1985)～昭和 62 年(1987)

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

美術館南側石垣に膨らみがみられるようになったため、昭和 60・61 年度の両年度にわたり国の補助を得て修复工事を実施したものである。当初、昭和 60 年度の単年度事業として予定していたが、文化庁の「單にはらみ部分だけでなく、石垣全体を修復する必要がある」旨の指導があったため、修復の面積を広げ 2 カ年の継続事業となったものである。

・調査の方法

「美術館南側石垣」について記載のある文献の中から代表的なものを選んで底本とし、熊本城築城以来のこの石垣部について状況把握につとめた。結果、美術館南側石積は周辺には手が加えられたにしても、石積本体そのものの構造あるいは規模を変えるような大幅な工事は行なわれなかつたと推定し、修复工事を行なった。

・調査の概要

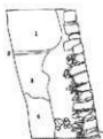
解体の結果、石垣の西側から 10 m 前後の石垣は天端から 4 石目が極端に前方へ張り出しており、全体的に大きく膨らんだ状態になっていた。

石垣を取りはずした状態でこの石垣の裏込め石の幅が異常に少ない事が判明した。城内の裏込めの幅は通常約 2 m は入っているが、この石垣の場合約 1 m と少ない。また天端から 4 石目より上段にかけてはさらに少なく 40 ~ 50 cm の幅である。また所によっては栗石が 1 ~ 2 石の所も見られた。石垣全体を取り外した石垣背面の土層断面では石垣天端高から約 3 m までは埋土で、その下の層が地山である。

遺物の大半は瓦で、他に陶器・五輪塔も見られる。瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。陶器はほとんどが破片で、唐津焼・有田焼・小代焼が多く、僅かであるが松尾焼も含まれている。ほか時代の古い須恵器の壺蓋の破片が認められた。五輪は空風輪・火輪・水輪が主である。他に安山岩の挽臼が認められた。以上に他 13 カ所の石垣に刻印が認められた。主なものは矢印と四角に対角線を描いた印である。



石垣断面実測部位面図(第3図)



石垣断面図(第4図)

- 1 : コンクリート埋乱
- 2 : 乳白色土
- 3 : 埋乱
- 4 : 地山



石垣最下部平面(第5図)

0 1 2 m



60 年度分 石垣背部土層断面図(第6図)



61 年度分 石垣背部土層断面図(第7図)

1 : 茶褐色土

2 : 黒色土

3 : 乳白色土

4 : 黄色土……(4)黄色土混入(5)炭化物混入

5 : 実褐色土

6 : 灰白色土

0

m

9

m

10

4-3-2-19図 美術館南側石垣実測図(第3~9図)

## <32 松井山城預櫓跡>

報告書：熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書3－石垣修理工事と工事に伴う調査－第2分冊』2016

調査期間：平成17年(2005)10月13日～平成18年(2006)3月31日

調査面積：約170 m<sup>2</sup>

調査主体：熊本市教育委員会

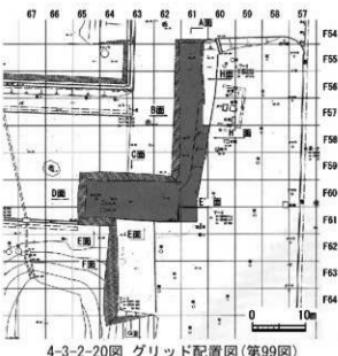
### ・調査に至る経緯

経年による築石の緩みなどによる膨らみや、間詰石の落下が顕著であることから、石垣保存修理事業の一環として、櫓台一帯の地形測量及び石垣立面図の作成、櫓台上面などの遺構確認調査及び膨らみが顕著な箇所を中心とした石垣の解体修理を実施した。

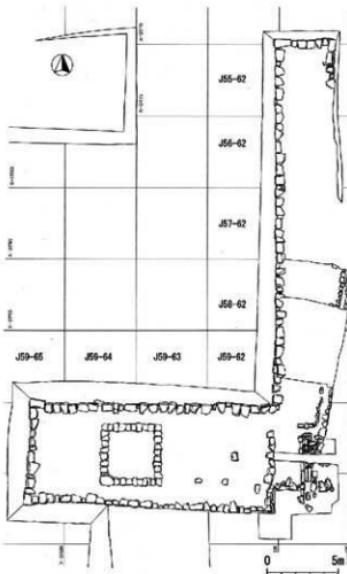
### ・調査の方法

櫓台上面の遺構を検出し、現状で斜面となっている東面に調査トレンチを設定した。トレンチによる調査の結果、櫓台東側の斜面は後世の客土と推測されたため、重機で客土の上位を除去しながら遺物を探集した。櫓台上面の表土・遺物包含層の掘り下げと、調査区内の遺構検出は人力で行った。遺構・遺物の出土状況などの記録図は、手実測に測量器械を併用しながら主に縮尺20分の1と10分の1で作成した。排土は調査区周辺に仮置きした後、城外に搬出・廃棄した。

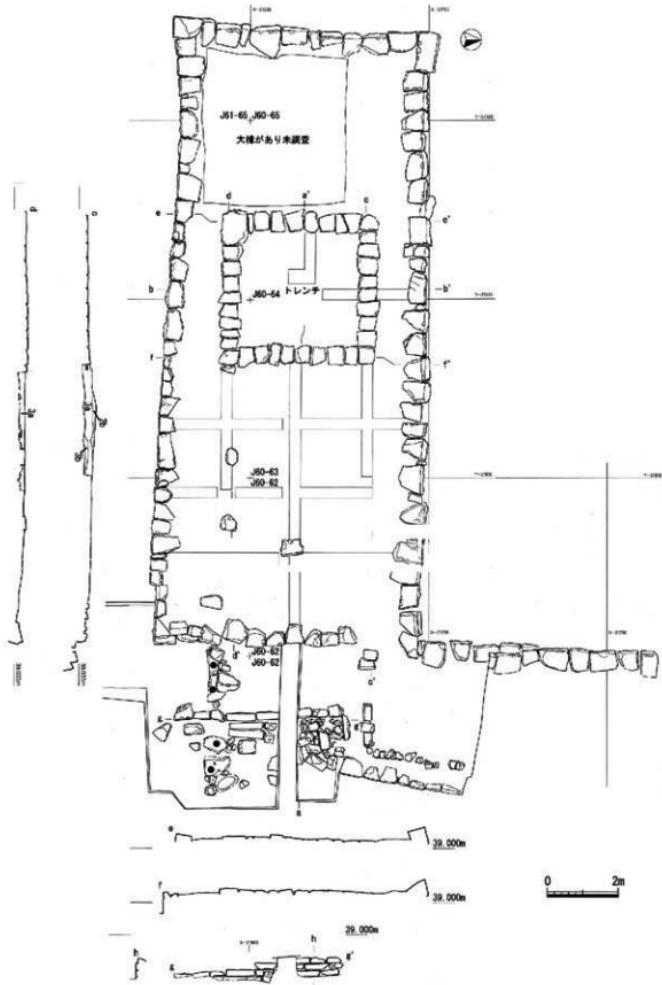
調査グリッドは、縮尺2500分の1の地図上において日本測地系座標を基に設定した。まず、熊本城城全体を覆うように500m×500mの大グリッドを設けてA～Mのアルファベットを冠し、それぞれの大グリッド中に5m×5mの小グリッドを設定して北から南、東から西へ1～100の番号をつけ、アルファベットの大グリッド名と小グリッドの数字2つを組み合わせてグリッド名とした。(例：A 100～100 グリッド)



4-3-2-20図 グリッド配置図(第99図)



4-3-2-21図 遺構配置図(第100図)



4-3-2-22図 遺構実測図(第101-102-104図)

#### ・調査の概要

櫓跡の石垣天端の長さは北面・南面が17m、西面が7mである。櫓跡の北東入り口から北へ石垣が伸びており、調査区は逆L字形状を呈する。櫓跡の基本層序は、以下のとおりである。

1層：黒褐色土(10YR3/1)表土。粒度の細かい砂を多く含む。

2層：灰白色土(2.5Y8/2)・暗褐色土(10YR3/3) 1層の砂・炭化物・焼土粒を含む。

3層：暗褐色土(10YR3/4)・灰黄褐色土(10YR4/2)強くしまる。漆喰片が多く混じり、瓦片・炭化物を含む。

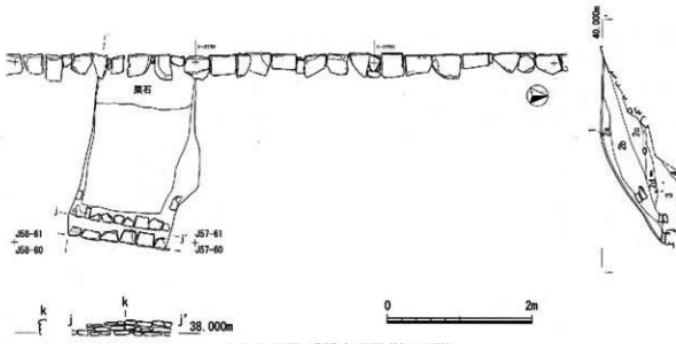
4層：暗褐色土(10YR3/4)強くしまる。火碎泥堆積物が多く混じり、炭化物を含む。近世の版築層か。

櫓跡の中程で大量の礫が含まれる部分があり、その下位で安山岩を一辺約4mの椿形に並べた石列が検出された。この石列は「熊本城郭及市街之図」(国立国会図書館蔵)で櫓跡にみられる建物の基礎遺構と推測している。櫓跡に近世の遺構面は残存しておらず、石列に使用された安山岩は櫓の礎石を転用したものと思われる。櫓跡東面の石垣は天端が大きく乱れており、石垣を覆っていた客土の下では延舌状の安山岩、石垣の築石や栗石用の石、板状に加工した凝灰岩などからなる石列が検出された。石列の裏込めも客土で、石材が階段状に置かれた部分もあるため、後世に櫓台への上り段を設けたものと思われる。石列の周囲では、近世の旧地表面に相当すると思われる褐色土(10YR4/4)を検出し、この褐色土上面から計測した櫓跡南東出隅の石垣の高さは1.8mであった。

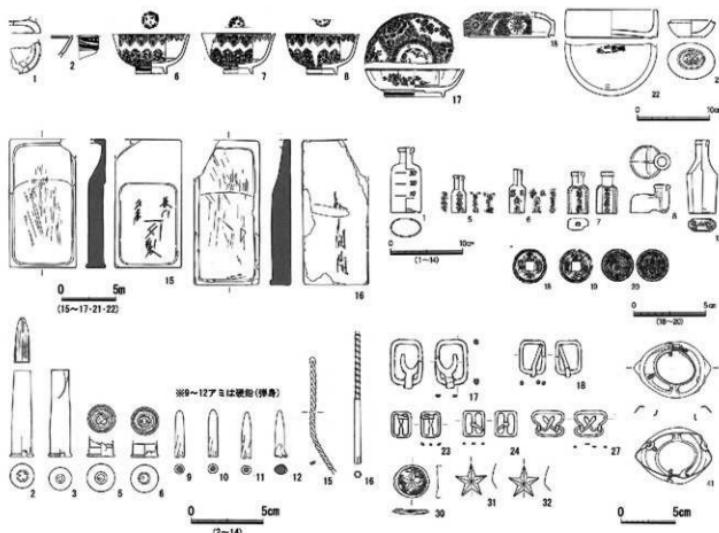
櫓跡の北東入り口から北へ伸びた石垣は25m続いて東へ折れ、天端の長さ4.3mの北面石垣を形成している。西面石垣の裏側の斜面に設定したトレーナーでは、東面に石垣の痕跡は認められなかった。絵図資料から、東面の石垣は存在しなかったと考えているが、櫓跡の東側では南端を描いた安山岩の石列が検出された。

遺物は陶磁器類、ガラス製品、赤色頁岩製の石硯鏡、貝製品、金属製品が出土した。陶磁器類は、化学コバルトを用いた型紙模り施文の磁器が比較的多く、大半は19世紀～20世紀前半であるが、2点熊本城築城期以前の資料が含まれる(1・2)。ガラス製品は19世紀末以降の資料である。

金属製品は、村田統葉莢やスナイドル統葉莢、明治8年制の帽章など軍に関連するものが多い。



4-3-2-23図 遺構実測図(第103図)



4-3-2-24図 遺物実測図

### < 33 二の丸御門跡 >

(昭和 50 年(1975))

報 告 書 : 熊本城調査委員会『特別史跡熊本城跡 二の丸調査報告書』1976

熊本市教育委員会『熊本城跡二の丸御門虎口環境整備工事報告書』1977

調査期間 : 昭和 50 年(1975)8 月 11 日～同年 10 月末日

調査面積 : 不明

調査主体 : 熊本市教育委員会

#### ・調査に至る経緯

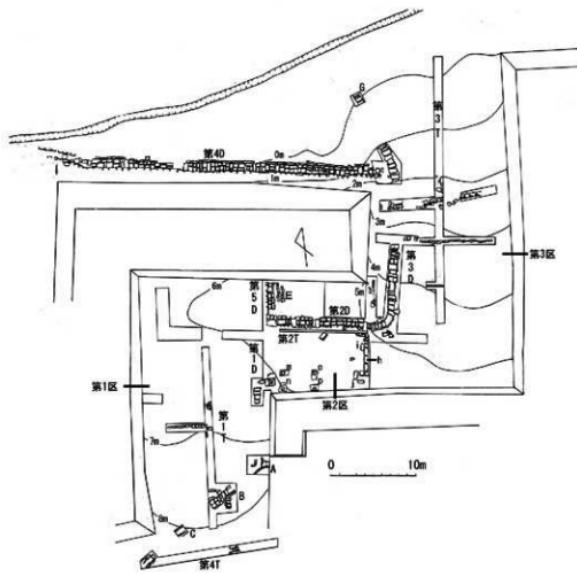
熊本県立美術館、熊本市立熊本博物館の建設によって、閉鎖状態にあった二の丸御門跡虎口を歩行者専用路として整備する計画が立てられた。整備の参考資料として、昭和 50 年度に二の丸御門跡の歴史的遺構の調査が行なわれた。

#### ・調査の方法

昭和 50 年度の調査は、調査区を第 1 区～第 3 区に分け、遺構の状態が不明のため、通路のほぼ中央に 3 本のトレンチと虎口下り口全体の遺構を知るために虎口を横切るトレンチを 1 本入れた。掘削深度は、旧路面に到達するまでとした。

#### ・調査の概要

第1区は全面的に埋め立てられていた。埋土には石炭がら、顕微鏡用カバーガラス、靴底など雑多なものが混ざっている。埋土の深さは虎口下り口に近いところで約150cm、第1区北端は200cmまで掘削したが、地山に到達しなかった。旧路面に石段が残っていた。第1区南側では、井戸が検出されている。第2区は旧路面までの深さは約45cmあり、地山は白黄色の堅い粘土である。南側より2組の礎石が検出され、



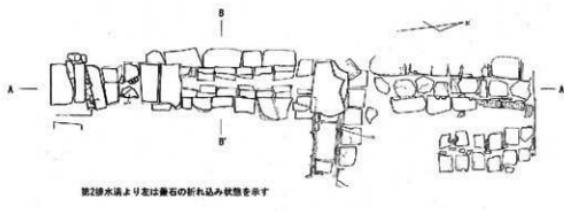
第1T、第2T・...Tはトレンチの略  
第1D、第2D・...Dは排水溝の路

550.8月～9月 片岡英治測量図

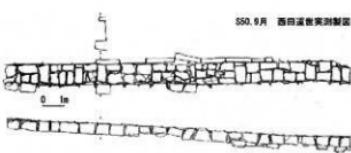
4-3-2-25図 二の丸御門跡遺構全体図（第1図）

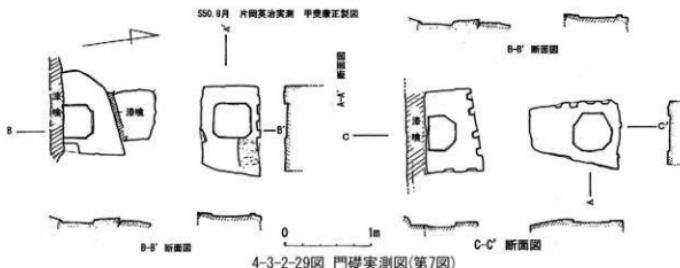
周囲は漆喰で固められている。各礎石面の高低は不揃いである。北側の礎石は撤去されているが、石垣に漆喰が塗りこんである。第2区北側には敷石が床面に張られたように検出された。第3区の埋土の深さは約45cmである。旧路面には石段があつたらしく、2ヶ所が乱れた状態で残存している。

第1区から第3区で5ヶ所排水溝が検出された。第1D～第3Dは、明治以後に改変を受けている。第1Dと第2Dは溝底を40cmほど掘り下げていた。掘り下げ時には、側石も積み直されており、第1Dの側石には「貞享二二丁卯年 奉寄進 六月吉祥日」と彫られた石材が確認された。第3Dの側石は方錐状の石材が使用されている。第4Dの末端は、道路のとりつけによって失われている。第5Dは北が高く南が低く、水は第2Dに流れようになっている。しかし、第5Dから第2Dに屈折する部分を石垣で遮断されている。



虎口通路が二の丸から遠搬廃棄された土砂塵芥で埋められていた関係上、多量の陶器器の破片が地上に散乱していた。磁器片が最も多く、深鉢・平皿・徳利・碗などの伊万里系の染付が大部分である。江戸中期から幕末にかけてのものもあるが明治・大正のものが多い。陶器片は少ない。いずれも近代のものである。瓦も表面採取又は埋土中から数片採取したが軒平ばかりで近世のものである。





4-3-2-29図 門礎実測図(第7図)

#### (平成8年(1996))

報告書：熊本市教育委員会『特別史跡 熊本城跡 石垣保存修理工事・発掘調査報告書』1999

調査期間：平成8年(1996)

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

#### ・調査に至る経緯

二の丸御門跡の石垣保存修理及び前年度の発掘調査結果に基づき、檐台部分や石垣上の土砂を撤去し、石垣の解体に先立ち発掘調査が行なわれた。

#### ・調査の方法

石垣の膨らみなどが著しい箇所を中心に修理範囲を設定し、膨らみの原因について調査が行なわれた。石垣の解体に先立ち、遺構の残存状態及び石垣根石の深さなどについて調査が行なわれた。

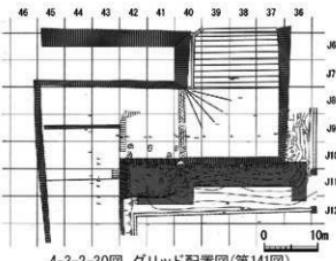
#### ・調査の概要

檐台部分は、檐門の2階部分の礎石(東石)6基を検出、1階部分の礎石と対応していることが確認された。また檐台と平部を区する石列が検出された。石垣天端及び檐基礎土台上に(化粧仕上か)砂漆喰(5cm～10cmの大玉石を押し込んである)で整形したもの(檐門と直接関係したものか不明)が検出された。

石垣根石部分は、入り側部を中心に平部2カ所と併せて3カ所で実施した結果、御門跡は二の丸台地からの突き出した部分であり石垣の根石も北に向かって急激に落ち込んでおり、入り側部及び平部の調査において深さ約5mの掘削を試みたが本来の根石は確認されていない。

檐門(橋形)内は、昭和50年(1975)の調査で確認されている檐門の基礎石などのほかに、解体時において石垣の込め石部に漆喰を塗り籠めた箇所を門の規模(梁間2間)の範囲で確認した。檐門内南面石垣下部においては砂漆喰が厚さ約10cmで壁状に塗り籠めたものを高さ約1.0m、長さ9.4mにわたり検出している。

遺物は、軒平瓦(九曜紋のみ)17点、丸瓦21点、軒平瓦あるいは軒目板(棟)瓦の破片1点、板瓦2点、鬼瓦1点が出土した。



4-3-2-30図 グリッド配置図(第141図)

(平成 19 年(2007)～平成 20 年(2008))

報告書：熊本城調査研究センター

『熊本城跡発掘調査報告書 3－石垣修理工事と工事に伴う調査－第 2 分冊』2016

調査期間：平成 19 年(2007)10 月 23 日～平成 20 年(2008)3 月 31 日

調査面積：約 180 m<sup>2</sup>

調査主体：熊本市教育委員会

#### ・調査至る経緯

二の丸御門南側石垣の門部内の天端には樹木(エノキ)が成長し、石垣に影響を及ぼしており、また、経年による築石の緩みなどによる膨らみや間詰め石の落下なども顕著であった。二の丸御門の南側土台に相当する檜台上面と、東へ続く外面石垣裏側の斜面で調査を行なった。

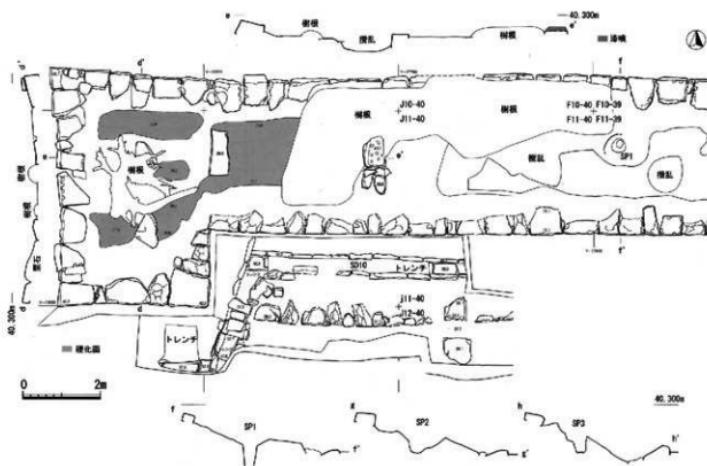
#### ・調査の方法

調査区内の数ヶ所にトレーナーを設定して土層の状況を確認し、一部は表土の除去に重機を使用した。遺構の検出とトレーナーの掘り下げは人力で行った。発生土は調査区内に仮置きし、遺物の採取を行なった後、城外に搬出・廃棄した。遺構・遺物の出土状況などの実測図は、手実測に測量器械を併用しながら、主に縮尺 20 分の 1 と 10 分の 1 で作成した。

調査グリッドは、縮尺 2500 分の 1 の地図上において日本測地系座標を基に設定した。まず、熊本城全体を覆うように 500 m × 500 m の大グリッドを設けて A～M のアルファベットを冠し、それぞれの大グリッド中に 5 m × 5 m の小グリッドを設定して北から南、東から西へ 1 ～ 100 の番号をつけ、アルファベットの大グリッド名と小グリッドの数字 2 つを組み合わせてグリッド名とした。(例: A 100 ～ 100 グリッド)

#### ・調査の概要

南側檜台は平面形が L 字形を呈し、天端の長さは北面で 23.9 m、西面で 6.1 m である。南面は西端から 3.8 m で北へ折れ、2 m 進んで再び東へ折れている。



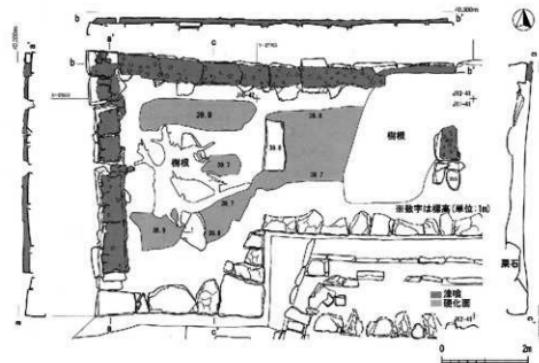
4-3-2-32 図 遺構実測図 2(第 144・145 図)

調査区西側の入り口部分に設定したトレンチ内で、檜台西端の南面石垣の延長線上に石列が検出された。檜台上面には礎石に相当する4石の安山岩が残存しており、周囲にはタタキ様の硬化面が検出された。檜の東壁部分に位置する礎石と檜台の北・西面石垣の天端上には厚さ5~10cm、幅40~50cmの帯状に成形された漆喰が残存しており、表面は均されて直径5~10cmの玉石が埋め込まれていた。北側檜台の石垣修理工事の際にも、檜跡を囲むように同様の漆喰が検出されていたが、城内では建物土台としての類例は認められない。

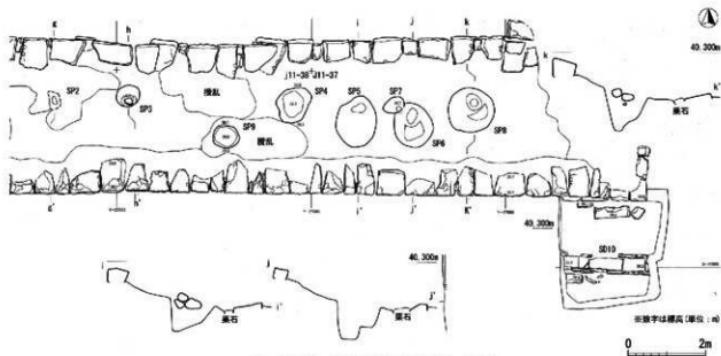
檜台の幅が狭い部分では、現状石垣と旧石垣の間に溝SD10が検出された。西側では檜台にぶつかる部分で南西方向へ折れて傾斜している。一連の溝は調査区東端のトレンチでも検出された。

北面石垣裏の斜面上では、複数の柱穴状遺構が検出されている。

遺物は土器・陶磁器類、金属製品、銭貨、ガラス製品、貝製品、瓦が出土している。陶磁器類は肥前系のほか、肥後網田焼がまとまって出土しているのが特徴である。磁器染付皿は、本丸御殿跡・飯田丸五階櫓跡で出土例がある19世紀第2・3四半期に位置づけられる宇土

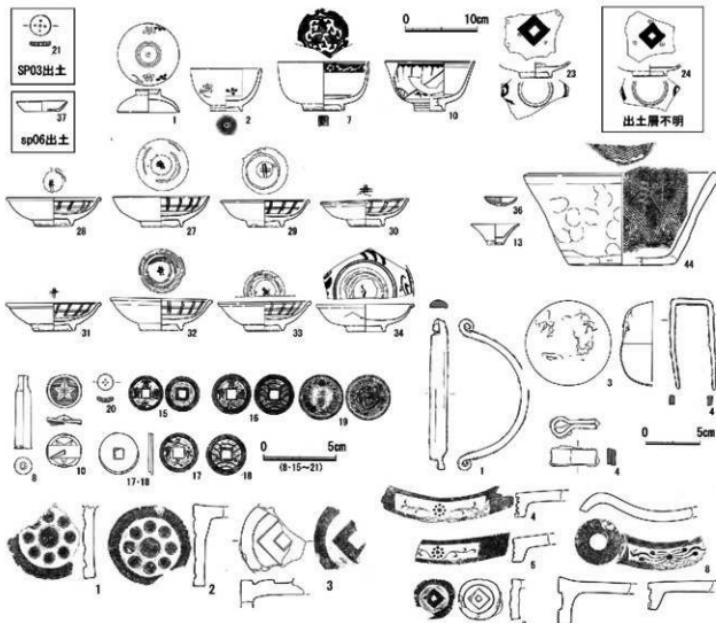


4-3-2-31図 遺構実測図1(第143図)



4-3-2-33図 遺構実測図3(第144・146図)

市網田焼窯跡資料と同形態の資料が注目される。瓦は家老米田家の家紋である釘抜き文の軒丸瓦が出土している。



4-3-2-34 図 I 層出土遺物 1 (SP03-6 層、出土層不明含む)



4-3-2-35図 I層出土遺物2(SP03-6層、出土層不明含む)

### 第3項 三の丸地区

#### (1) 概要

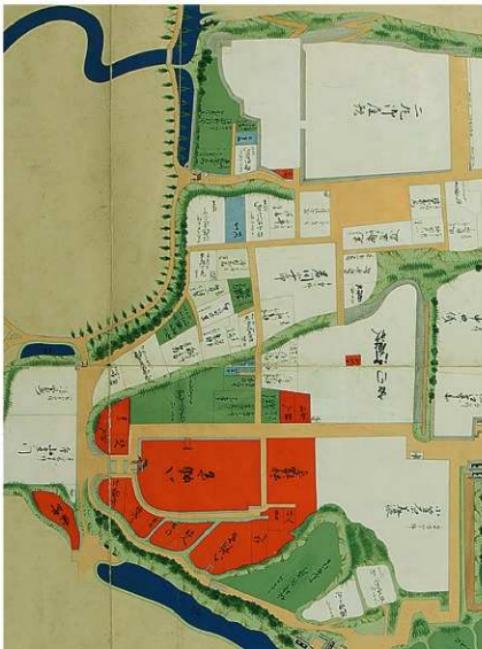
本報告書でいう熊本城三の丸地区は、東は新堀橋、北は本妙寺田畠に面する崖線、西は段山田畠に面する崖線、南は藤崎台台地南端から現市道に沿って、二の丸御門から百間石垣の崖線によって区分された一帯である(4-3-2-2 図参照)。地区内には旧細川刑部邸・熊本市立熊本博物館・熊本県護国神社・藤崎台県営野球場・養護施設藤崎台童園・熊本市子ども文化会館・YMC A学院などの施設がある。

藤崎台には承平5年(935)に藤崎八幡宮が造営され、永和3年(1377)には北朝方の城として臨時に構築されたと考えられる「藤崎城」が史料上に見える<sup>1</sup>。この後の藤崎城の動静は明らかでないが、天正8年(1580)に島津氏の軍勢が隈本城の「宮中」(宮内)に駐屯し、ここを拠点に矢崎城や竹迫城を攻撃している記述が見える<sup>2</sup>。

その後、加藤清正による熊本城築城に伴い三の丸地区一帯は侍屋敷・町屋となった。慶長17年(1612)の「肥後筑後城図」(山口県文書館蔵)によると、現在の古町町にあたる百間石垣の北側一帯は「やかた」「やかた町」と記される<sup>3</sup>。これらの町屋はのちに京町の南側街道沿いに移され、「古京町」の地名だけ残った。

寛永7年(1630)前後の「熊本屋舗割下絵図」(熊本県立図書館蔵)では、百間石垣の北は飯田覚兵衛の屋敷地で、現在の三の丸第二駐車場付近は貴田玄蕃、現在の旧細川刑部邸付近は三宅角左衛門、北西隅は森本義太夫の屋敷地であった<sup>4</sup>。森本義太夫の屋敷地には三階櫓があり、通称「森本櫓」と呼ばれている。江戸時代には「沢村衛三三階櫓」と呼ぼうとしたが、明和7年(1770)に火災で焼失し、以降再建されなかった。

細川忠利は入国後、「熊本しまり不申ニ付面、三之丸しめ之事」を江戸幕府に申請し、寛永11年(1634)の「肥後國熊本城煙普請仕度所絵図」(熊本県立図書館蔵)<sup>5</sup>では三の丸地区的外郭を囲む崖線上に8棟の櫓と、1棟の櫓門、3カ所の門の建設が計画されたが、これらは櫓門である新一丁目門を除いて実現しなかった。正保期とされる「平山城肥後國熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)<sup>6</sup>では三の丸地区一帯の多くが「侍屋敷」で、藤崎台には「八幡宮」「六所大明神」と社家の屋敷地が広がっている。また、本図では新一丁目門前の勢溜にある札ノ辻から薬師坂・楨島坂・砂薬師坂を経て百間石垣前を通り、埋門から二の丸



4-3-3-1 図 二丸之絵図（永青文庫蔵） 「二丸御屋形」・藤崎台部分

に至るルートが太い朱線で示される。

元禄 15 年（1702）から享保 7 年（1722）までの城郭修補願絵図<sup>7</sup>では古京都一帯に「三之曲輪」の記述があるが、明暦から幕末までの「二ノ丸之絵図」には三の丸地区全体も描写範囲に含んでいる（4-3-2-1 図）。また、文政 7 年（1824）に藩主齊茲の住居として現在の旧細川刑部邸の位置に建てられた屋敷も「二丸御屋形」・「二丸御屋舗」・「二丸御住居」と呼称されている。

「二丸御屋形」は天保 14 年には長岡義之助（護久）・良之助（護美）の住居とするため増築が行なわれた。さらに文久元年（1861）に頤光院（斎護室）、鳳臺院（慶前室）、詔部妹喜久姫の帰國に伴って屋敷の増改築が行なわれ、屋敷の西側には庭園が造られた。また、同じく文久元年には澄之助・良之助の住居として現在の護国神社付近に宮内御住居が造られた。文久元年（1861）以降に作成されたとみられる「二丸之絵図」（永青文庫蔵）には石垣で区画された「二丸御屋形」敷地が見え、敷地の北西隅には焼失した森本櫓の橹台が描かれる（4-3-3-1 図）。「二丸御屋形」敷地南に御傳役屋敷・定府屋敷があり、周辺は上級臣家の下屋敷や中級臣家の屋敷地が広がっている。

明治 7 年（1874）に熊本城一帯が陸軍用地に編入され、「二丸御屋形」一帯は野砲營地となった。明治 9 年（1876）の神風連の変後には警備上の問題もあるため、二の丸や三の丸に残っていた私有地の買い上げと道路の開い込みが行なわれた。

明治 10 年（1877）の西南戦争では京町方面の防備隊が埋門と野砲營に、藤崎台方面の守備隊が漆畠・片山邸・藤崎台・法華坂・古城の一丁亭に置かれた。また、段山一帯では 3 月 12 日から 13 日にかけて熊本城に籠城する政府軍と薩軍との激戦が展開した。西南戦争で焼失した藤崎八幡宮は翌年に現在の井川潟町に移転した。跡地は囚獄となり、片山邸跡は漆畠射的場となつた。

明治 11 年（1878）には現熊本県立美術館西の空堀を延長する形で札ノ辻から古京都へ抜ける堀切道の新坂・新道が整備され、二の丸から藤崎台に向かって新坂上には宮内橋が架けられた。その後、明治 19 年（1886）に野砲營は輜重兵第六大隊の營地となり、明治 42 年～大正元年（1909～1912）の間に現在の熊本博物館敷地も含む形で拡張し、建物が建築された。大正 4 年（1915）に招魂社が宮内に移り、昭和 32 年（1957）には現在の護国神社となっている。

大正 13 年（1924）に 7 本のクスが「藤崎台クスノキ群」として国の天然記念物に指定された。昭和 8 年（1933）に石垣や新一丁目門一帯の堀跡、段山などが史蹟となり、昭和 30 年（1955）には特別史蹟となつた。藤崎台には熊本大学付属病院藤崎台分院の建物群があったが、昭和 35 年（1960）に解体され、跡地には藤崎台県営野球場が建築された。昭和 37 年（1962）に地形が著しく変化し、城跡としての特徴を失っているとして段山及び新町の一部が指定解除となつた。

古京都には昭和 21 年（1946）に化学及血清療法研究所が設置され、旧輜重兵舎を一部利用した。昭和 51 年（1976）に一部移転し、昭和 53 年（1978）には熊本博物館が開館するなど、三の丸地区の情勢が大きく変化したことから昭和 54 年（1979）「熊本城整備に関する報告書（三の丸地域の整備）」の答申に沿つて「三の丸史料公園」として整備に着手し、平成 5 年（1993）に旧細川刑部邸を移築復原した。旧細川刑部邸は、初代熊本藩主の細川忠利の弟である刑部少輔興孝が興した細川刑部家が下屋敷として中央区子飼で使っていた屋敷である。また、旧細川刑部邸の庭園は「二丸御屋形」の庭園をイメージし再現整備している。平成 17 年（2005）には熊本博物館や旧細川刑部邸一帯が特別史跡熊本城跡に追加指定された。

<sup>1</sup>『特別史跡熊本城跡総括報告書「歴史資料編 史料・解説』熊本市 2019 4・5 文書

<sup>2</sup> 註 1 報告書 18～20 号文書

<sup>3</sup>『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編 絵図・地図・写真』熊本市 2019 4 頁

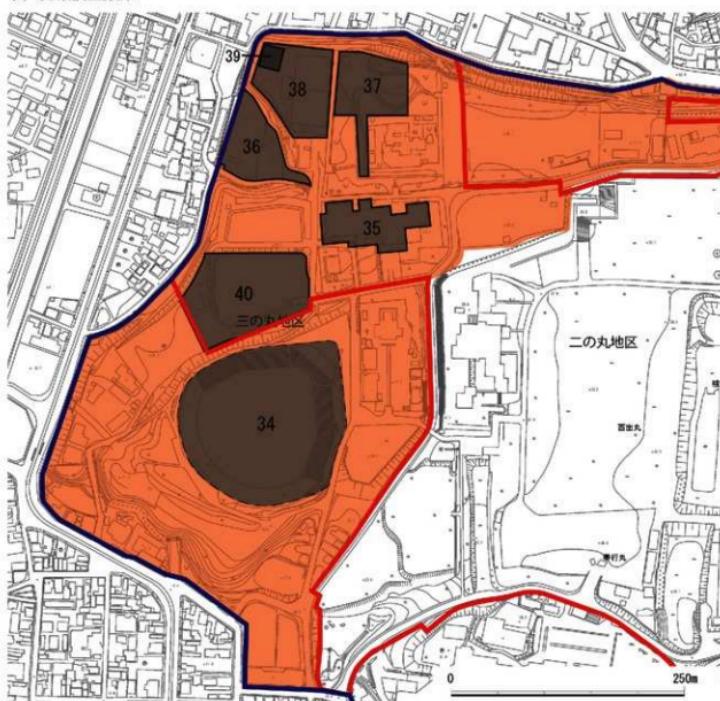
<sup>4</sup> 註 3 報告書 5～10 頁

<sup>5</sup> 註 3 報告書 11～16 頁

<sup>6</sup> 註 3 報告書 33～38 頁

<sup>7</sup> 註 1 報告書 22～24 頁

(2) 発掘調査成果



34. (藤崎台) 35. 二の丸御屋形（熊本市立熊本博物館） 36. (砂薬師坂付近) 37. 二の丸御屋形 38. 御腰掛跡  
39. 森本櫓 40. (藤崎台北側)

4-3-3-2図 三の丸地区範囲と発掘調査地点位置図

## < 34 (藤崎台) >

報告書：熊本県教育委員会『藤崎台』1961

調査期間：昭和34年(1934)から昭和35年頃

調査面積：不明

調査主体：熊本県教育委員会

### ・調査に至る経緯

昭和35年(1935) 国民体育大会を熊本県内で開催されるに際し、県営野球場建設地に藤崎台が選定された。工事によって南東隅の石星が埋没してしまうので、施工に先立ち調査を行ない、記録を公刊することとなった。出土遺物は藤崎宮で整理作業を実施した。昭和35年10月15日竣工し、藤崎台県営野球場として現在に至る。

### ・調査の方法

石星のうち埋没部分は国体開会前に調査が行なわれた。他の調査は、熊本城絵図や藤崎八幡宮所蔵の藤崎台絵図と調査当時の藤崎台地形実測図とを照合して調査トレレンチが設定された。調査計画を実施するためには多くの日数を必要としたため、調査が遅れる可能性があった。そのため、重機作業に従って調査は進められた。

### ・調査の概要

藤崎宮本殿址では、礎石を検出した。しかし、重機によって移動しており、本来の状態は失われている。安山岩の自然石で1.5 m × 1.0 mの楕円形で厚さ約0.5 m、上面は平らである。本殿址南側からは井戸を検出した。赤土層を掘り、上二段内側を弧状に加工した灰石でまいた井戸である。直径が97 cm、上縁に漆喰巻の井戸枠をはめたものである。

遺物は、瓦や玉砂利が多く、鉄釘、土師壺、陶磁器などがある。磁器には藍染付の童首酒器、八弁の皿、六角高台の皿、



4-3-3-3 図 本殿址出土の礎石（第1図）

赤藍染付の湯呑、丸窓透かしの花縁の鉢、二重底の中皿・大皿などがある。陶器は、黒釉の神酒瓶、片口の深鉢、乳釉の深鉢、播磨などがある。瓦は、被熱を受けている丸瓦や平瓦が出土した。

本丸北側のピット群から、直径6 mのピットが検出された。遺物は、玉砂利、瓦片、土師質土器、陶磁器、加工鉄片、加工石材、木炭などが出土した。ピットを掘り進めると中央より井戸が検出された。灰石でまかれた丸い井戸は内径が1.2 m～1.3 mあったが、底は調べられていない。井戸は上2 mが失われており、廐材や廐品、半焼けの木片や木炭などが多量に埋められていた。周辺よりピットが約12基検出され、多量の土師器片、青磁の小鉢、神酒瓶、燈明皿、「太明年製」の銘のある白磁碗、唐津焼・二川焼の壺、ハマグリ貝殻、巴文軒丸瓦・九曜紋軒丸瓦、巴文に蕨手唐草文をあしらった軒平瓦が出土している。本殿址北側の井戸の東北部からもピットが4基出土した。1・2号ピットは東西に並んでおり、北に8m離れて3・4号ピットが東西に並んでいる。1・2・4号ピットは隅丸方形のピットであり、3号ピットは、円形である。出土遺物は、青白磁の碗・蓋、白磁の大皿、陶器の甕、ヒビ釉に赤染付の碗、小型の壺、神酒瓶、燈明皿などである。江戸後期のものが多い。

藤崎台中央に東西にわたる側溝の中央の南側、一石一字の経石出土地との間に東西7.5 m、南北7.0 m、ゆがんだ四角形を呈する大きな黒土の落ち込みが検出された。床は東から西に向けて約1.0 mに達する。多量の瓦が埋まっており、九曜紋軒丸瓦や軒平瓦、「元禄五申ノ土山〇〇」の刻印がみられる。

藤崎台のほぼ中央に東西にわたる側溝を掘削したところ、瓦片と陶器片が出土した。褐色釉の上に乱釉をかけた小代焼で明治に障るものではない。

藤崎台の中央部からやや西に寄ったあたりからは、地表下約40cm赤土内より容器に入った一字一石経が出土している。表土は阿蘇火山の噴出による火山灰が深さ約30cm覆っていた。更にその下は黄褐色を呈する。厳密にみると、表土に近い部分は割合に乾燥し、赤味を帯びた土であるに対し、深くなるにしたがって淡黄色に近く、粘着性を増す傾向があった。一字一石経をおさめた甕は、黄褐色を呈した地山を掘りこみ、ほぼ水平に埋められていた。甕は瓦器であり、ネズミ色を呈した陶質の土器である。釉を塗った痕跡は認められていない。

全体の約4分の1を失っているため、旧態を知ることはできない。

現存直径86cm、現存高さ69cm、底部の直径41cmを有し、厚みは平均1.4cmである。内部の底面には、厚さ約10cmの黄白色を呈した粘土がつめられていた。胴部から底部にかけては、放物線上の亀裂面があり、その上に幅13cm、厚さ2.3cmの黄白色粘土帶が貼り付けられていた。甕の中に収められていた経石は直径およそ5cmくらいであり、砂岩・安山岩・粘板岩など多かった。

石垣を2ヵ所調査しており、東の石垣は藤崎台南東端の石垣で、高さ7.4m、傾斜上78度、下60度、反りは強くない。根石は基盤となる凝灰岩盤に据えてあり、外側に副石を置き粘土で突き固めている。天端の石は長方形の角石を並べて、水平を保っている。石垣の隅角を起点として北側に12.5m、西側に15mを測る。北側に伸びる石垣墨線は、隅角から北に2.5m地点で東に40度カーブする形となっている。この石垣は野球場の左翼側土盛りスタンド下に完全な形で埋め戻され、その直上に位置と深さを標示した花崗岩製石碑が建立された。西の構形石垣は藤崎台南西隅に築かれ、藤崎八幡宮参道はこの石垣の間を上って本殿境内に移動する。この部分の石垣は野球場外域となるので、現状が保たれている。藤崎台南半の地域を重機で約30cmの深さに排土したあとに、礎が固められた礎石列が東西にみられた。発掘調査は、北列と中列の礎石について行なわれた。礎石の周囲は、礎や栗石がつめられていた。九曜紋軒丸瓦や磁器の破片がつめられている例もみられる。

藤崎台西側斜面には、4層の土層がみら

れた。上層は現代層で土管、煉瓦、コンクリート片などを含む。第2層は、石塔籠笠石や中台、玉垣石の破片が埋まっている。軒丸瓦と軒平瓦がつながっている瓦が出土している。陶磁器片は、江戸期のもので李朝高麗鉢の口縁が混ざっていた。石垣は直径40cm程の切石で積まれている。第3層は、東より7.5m



4-3-3-4 図埋納経石をおさめた甕

(第14図)



南側石積み状態

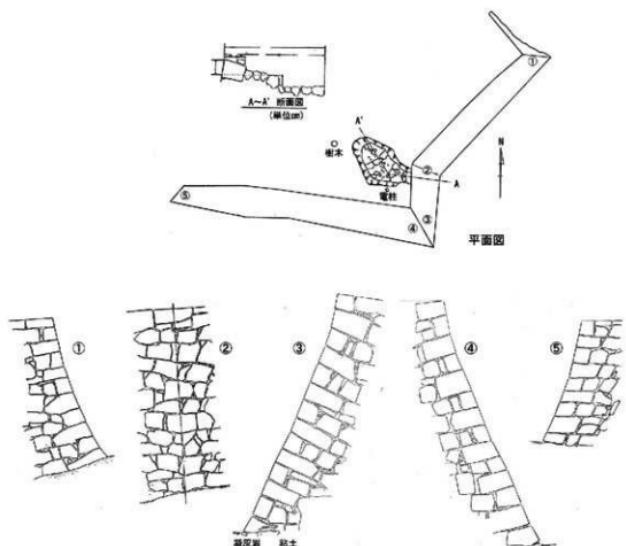


後角と東側石積み状態

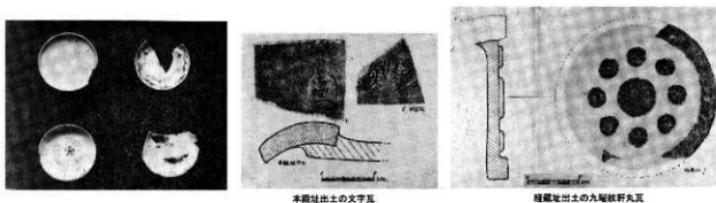
4-3-3-5 図 藤崎台東南隅の石壁（図版6-7）

にはじまり、1.5 mの厚さであるが、西に向けて19.4 mの堀壁からなくなる。赤土の混土層で土師器片や瓦片が出土する。第4層は、崖根の中断に灰石を並べた排水溝がある。32.5 mにはじまり、37.4 mに終わる。溝の西端部は、南北にのびる下の石垣線に交わっている。石垣の外側掘にあたる部位に包含層がある。暗褐色の固い層で瓦、陶磁器片、木炭が堆積している。

全体を通して遺物は、系切底の土師器坏瓦、陶磁器類、貝類が出土している。



4-3-3-6 図 石垣実測図（第18・19図）



4-3-3-7 図 出土遺物（第33・40・41図）

### < 35 二の丸御屋形跡(熊本博物館) >

(昭和 48 年(1973))

報告書：熊本博物館建設準備室「熊本市古町二の丸跡調査報告書—熊本博物館建設予定地—」 1974

調査期間：昭和 48 年(1973)8 月 1 日～8 月 31 日

調査面積：不明

調査主体：熊本博物館古町二の丸跡文化財調査団、肥後考古学会

#### ・調査に至る経緯

博物館建設予定地に博物館を建設できるかを判定するために調査が行なわれた。

#### ・調査の方法

調査は、通路、排水施設などに支障がない、樹木に損傷のないよう調査区が設けられた。調査区は A 区～I 区で区分され、調査区の中トレントが設定されている。A 区は南側石垣一帯であり、石垣の確認のために西から東へ a1 ～ a3 トレントが設定された。a4 トレントは南側石段が推定される部分に設定された。B 区は敷地中央部一帯であり、南北方向に並行して b1 ～ b3 トレントが設定された。C 区は敷地西側である。敷地より西に抜ける通路南側石垣を e4 ～ e6 トレントが設定され、北側に e1 ～ e3 トレントが設定された。D 区は C 区に向かい合う部分である。通路南側の緩い斜面に西より d1 ～ d4 トレントが設定された。E 区は D 区の南側斜面部である。調査区内に露出した石垣を調査するために e1 ～ e3 トレントが屋敷境界と建物構造確認のために設定された。F 区は E 区南の一段高くなっている場所である。北から南に f1 ～ f6 トレントが屋敷境界と建物構造確認のために設定された。G 区は F 区の東側である。旧輪重聯隊本部の建物基礎に g1 トレント、通路を隔てて向かいに g2 トレントが設定された。旧看護学院側に g3 トレントが設定された。H 区は敷地南東部である。南北に h1 トレント、直交するように h2・h3 トレントが設定された。I 区は旧看護学院寄宿舎南側の小空地一帯である。東西に並行して i1・i2 トレントが設定された。

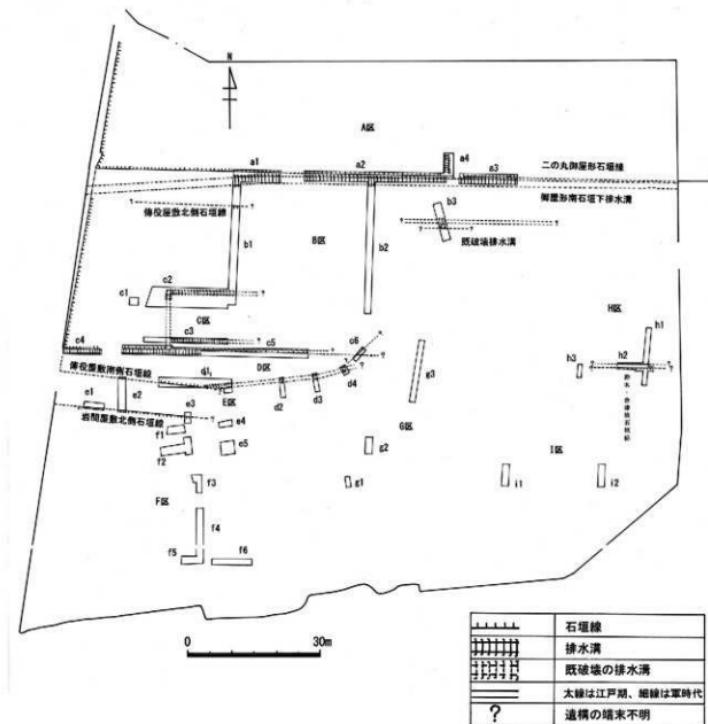
#### ・調査の概要

A 区：石垣線を追及するため a1 ～ a3 トレントを設定した。石垣線は合わせて 55 m、西端の石垣から 95 m あることが確認された。a1 トレントでは石積 6 段、高さ 2.9 m 程度であり、a2 トレントは a1 トレント東半分と同じく柱状の安山岩を主に用いて蓋としている。a3 トレントでは石積 4 段、高さ 1.6 m 程度である。石垣西端より 41 m と 75 m のところに石垣下の排水溝に注ぐ排水口がみられた。石垣下排水溝蓋石の高さは a3 トレント東側で 1.65 m、a1 トレントで 2.90 m である。溝幅は約 90 cm で凝灰岩製の切石が 4 段積み上げられており、高さは 80 cm 程度である。漆喰状のもので目張りされている。a4 トレントでは、兵舎の排水溝がみられたが、石段の痕跡はみられなかった。排水溝は凝灰岩製で、兵舎基礎から御屋形石垣下の排水溝に繋がっている。

B 区：b3 トレントでは、地表下 2.0 m より東西にびびる破壊されている排水溝が検出された。遺構は明黄褐色のローム層に切り込んで構築されている。



4-3-3-8 図 調査地の名称（第 1 図）

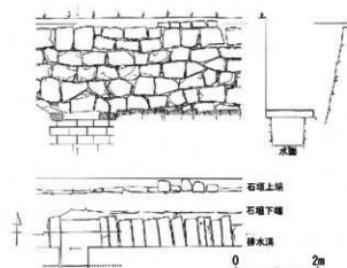


4-3-3-9 図 造構分布図 (第10図)

傳役屋敷推定地は調査区の南西、石垣下道路を隔てた南側にある。

C 区 : c4、c5 トレンチでは石垣線の確認が行なわれた。石垣線は東に長く続いており、石垣線は二重になっていた。c5 トレンチ西側から c4 トレンチにかけて排水溝が検出された。石垣西端より東へ 31 m のびる。西端より 24 m のところで c2・c3 の排水溝の排水口がある。

D 区 : 道路南側の d1、e2 トレンチで石垣線の確認がされた。両トレンチより地表下 90 cm、御屋形南石段東端上より 2.4m の深さで石垣根石が検出された。石垣線の裏には栗石がみられた。



4-3-3-10 図 二の丸御屋形石垣の一部 a2 トレンチ  
(第2図)

傳役屋敷北側石垣線はb1 トレンチで検出された。石垣は根石を一段残し、破壊されていた。石垣の裏には栗石がみられた。西側石垣は積み上げられているが、明確ではない。東側石垣線は、兵舎基礎の下になっている部分が多く、検出されていない。屋敷内の遺構は、c1～c3で確認が行なわれた。c1 トレンチでは若干の瓦の出土をみたが、擾乱が多く、遺構は検出されていない。c2・c3 トレンチでは排水溝が検出された。南北 12 m、東西 16 m以上であり、北西と南西隅には溜樹が造られている。南西溜樹から南石垣下排水溝に排水口が造られている。

岩間屋敷推定地は、博物館建設予定地の南西である。北側にみられる石垣線は、上部に凝灰岩・安山岩の横長のものを用い、下部は安山岩の割石が使われている。上部では、瓦・煉瓦などの築き込みがみられる。下部の根石の築き方は、傳役屋敷に類似している。e4 トレンチ・e5 トレンチ、f1 トレンチ～f6 トレンチでは遺構は検出されなかつた。しかし、各トレンチの現地表面下 40 cm～50 cm に黒褐色を呈する粘質の強い土がみられた。

定府屋敷推定地は、旧輜重聯隊本部周辺に道路を隔てて南北 2 カ所に存在した。g1 トレンチは地表下 1.1 m に黒褐色土層があり、非常に堅くしまっている。g2 トレンチは g1 トレンチの北であり、地表下約 2.0 m のところに黒褐色土層があるが、g1 トレンチ程固くない。g1 トレンチと g2 トレンチでは黒褐色土層に約 0.9 m の段差がある。

鈴木・金津屋敷は、博物館建設予定地の南東部である。h1 トレンチでは、トレンチほぼ中央に東西にのびる北面石垣が検出された。検出された石垣を h2 トレンチで確認したところ東西方向に 8 m のびる石垣が検出された。石垣は安山岩が用いられており、部分的に破壊されている。h2 トレンチの延長線上に h3 トレンチが設定されたが、石垣は検出されていない。

i1 トレンチでは、黒褐色土層がみられた。i2 トレンチでは、地表下に砂粒混黒褐色土層が深さ 1 m 以上もある。

出土遺物については、江戸期の陶磁器類が多く出土している。ほとんどが江戸期の所産であり、量的には古伊万里焼系のもので網田焼・高浜焼なども確認されている。次いで小代焼系のものが出土し、他には松尾焼、二川焼、唐津焼、伊万里焼なども量は多くないがみられる。瓦片について、第六師団関係の瓦が多かったが、江戸期と考えられるものは少ない。文様としては、巴文、九曜紋、蛇の目紋がある。その他、縄文時代晩期の土器や磨製石斧が出土している。特記遺物として、漁網用の重りの鋳型が出土している。粘板岩製で「元治元年」と刻まれていた。

#### (平成 26 年(2014)・平成 27 (2015))

報告書：熊本市熊本城調査研究センター

『熊本城跡発掘調査報告書 4 一熊本博物館増改築工事に伴う三の丸地区の発掘調査』2017

調査期間：平成 26 年(2014) 1 月 20 日～同年 3 月 20 日

平成 27 年(2015) 5 月 11 日～同年 6 月 18 日

調査面積：約 1000 m<sup>2</sup>

調査主体：熊本市熊本城調査研究センター

#### ・調査に至る経緯

昭和 53 年度に開館した熊本市博物館は、建築から 35 年が経過した平成 22 年(2010) 頃から建物や設備の老朽化も問題となってリニューアルに向けた検討が始まり、平成 23 年度以降、基本構想・基本計画、基本設計・実施設計に着手した。

これらの計画を受け、平成 25 年(2013)8 月 23 日付で熊本博物館本館の確認調査実施に伴う現状変更の許可申請を行なった。同年 11 月 15 日付で文化庁長官より確認調査実施に伴う現状変更の許可が下り、平

成25年12月16日～同月20日にボーリング調査を、平成26年(2014)1月20日～同年3月20日に確認調査を実施した。その調査成果を受けて、文化庁・熊本県文化課・熊本市文化財保護委員会・文化振興課・熊本城調査研究センター・熊本博物館で協議を行ない、明治10年(1877)(西南戦争)以前の土層・遺構を現状保存するとの方針が決定したため、工法変更などの追加設計を行なった。これらを踏まえて平成26年8月14日付で増改築工事(発掘調査含む)に伴う現状変更の許可申請を行ない、平成26年10月17日付で文化庁長官より増改築工事(発掘調査含む)に伴う現状変更の許可が下りた。その後、発掘調査(本調査)を実施し、同年10月から増改築工事に着手した。

#### ・調査の方法

平成25年度、確認調査に先立ち昭和50年度の博物館本館建設工事前の土層・遺構の存在状況を確認するためにボーリング調査を行なった。このボーリング調査結果と増改築工事の計画を踏まえて、手掘り作業を伴う調査区を設定した。必要に応じて調査区内にトレンチを設け、土層・遺構の堆積状況を確認している。遺構は原則、上面確認に留めている。

#### ・調査の概要

基本層序は以下のとおりである。I～VII層に大別される。

##### I 層：昭和50年度の博物館本館建設工事時

の建築材・造成土。3層に細分する。

##### I-1層：コンクリート製床材。

##### I-2層：山砂。

##### I-3層：造成土。近代の整地土であるII・III

層に近似するが、これらよりも繊りが弱く、間隙性が高い。また、大形

のコンクリート塊や明らかに現代の所産であるビニール・プラスチック片などを含む。

##### II 層：近代の造成土。

灰白色(10YR7/1)～明赤褐色

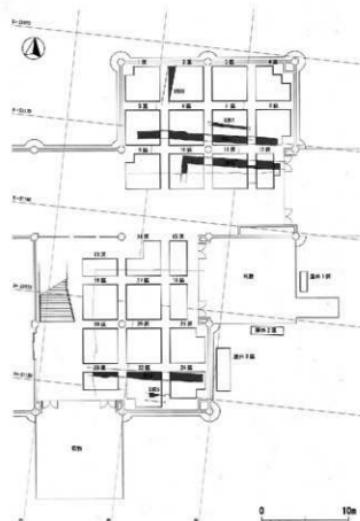
(5YR5/6)を呈する火砕流堆積土ブロック・ローム土ブロックを基質とする、あるいは暗褐色土(10YR3/3)を基質として火砕流堆積土・ローム土ブロックを極多量に含む土である。前者は調査地南側に、後者は調査地北側に偏在する傾向が認められる。

##### III 層：近代の造成土。

主に暗褐色(10YR3/3)を呈する。II層に比べて明らかに粒度が細かく、火砕流堆積土・ローム土ブロックなどの混

入物は少ない。薄く縞状に細分され、硬化する箇所も認められる。

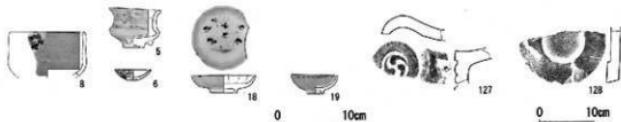
※II・III層はともに近代の造成土であり、その堆積成因を反映して箇所によって土質が異なる場合が多く、バリエーションは多様である。本項では共通する属性を記している。



4-3-3-11 図 確認調査・本調査区主要遺構配置図

(第14図)

- IV 層：暗褐色土(10YR3/3 ~ 10YR3/4)。以下は自然堆積土である。市域調査の成果から縄文時代後晩期の堆積層と判断される。
- V 層：黒褐色土(10YR2/2)。粒土が細かく、縮りは強い。
- VI 層：所謂ニガ土。  
黒褐色(10YR2/3) ~ 暗褐色(10YR3/3)を呈し、基質はブロック化する。姶良丹沢火山灰ガラスが認められる。
- VII 層：ローム土。黄褐色(10YR5/8) ~ 明黄褐色(10YR7/6)を呈する。粘性が強い。
- 主要遺構として建物布基礎、土管を伴う排水溝が挙げられる。出土遺物や検出層位から、いずれも近代の構造物と判断されている。他には1~4・7・11・14 ~ 16・18・21・22・24区において土坑状・柱穴状の掘り込みが検出されている。7 ~ 12区と13 ~ 15区の間は地下ダクト工事、13・16・19・22区の西側は地下工事(昭和50年度の博物館本館建設工事)により大きく搅乱されている。
- 出土品は江戸時代の瓦・陶磁器類がほとんどを占める。紅皿・紅猪口・内面に紅が付着した小壺や飯事玩具が認められ、これらは屋敷地において臣家人だけではなく、その家族(女性・子供)も居住していた可能性を示す資料といえる。また、陶磁器製・土製の人物・箱庭道具、餌入れの可能性がある小形擂鉢、茶器として使用された鉄绘碗など、生活に潤いを与える用具も認められ、これらは、本調査区にあった城内の屋敷が官舎としてではなく、実生活が営まれた場であった可能性を示している。
- 遺物の時期は、18世紀末～19世紀中頃を主体とするが、17世紀代の产品もみられ、18世紀代になると明らかに量化が認められる。こうした継続的な方方は、江戸時代を通じ、家臣の屋敷地として生活が営まれていたことを示すものといえる。
- 近代の遺物は、19世紀後半以降の土管や近郊産の煉瓦が出土した。



4-3-3-12 図 出土遺物実測図（第 43・44・53 図）

### < 36 (砂薬師坂周辺) >

報告書：熊本城調査委員会『熊本城三の丸砂薬師付近遺構調査報告書』1978

調査期間：昭和 53 年 (1978)8 月 1 日 ~ 9 月 5 日

調査面積：不明

調査主体：熊本城調査委員会

#### ・調査に至る経緯

昭和 51 年度二の丸御門跡虎口の環境整備工事の完了により、以後三の丸と称する古京町二の丸跡の整備が始まった。昭和 53 年度に砂薬師跡付近と御腰掛部分の整備が行なわれるようになったため、遺構の残存状況を確認し、できるだけ遺構を保存して整備しなければならないという点から調査が行なわれた。

#### ・調査の方法

調査は文献班と発掘班に分かれて行なわれた。文献班によって整備予定地を 6 区画に分類した。①旧二の丸御屋形の南西隅一部。②熊本博物館西側に位置する南北道路。③砂薬師坂。④砂薬師坂北側上段平坦地(旧砂薬師堂敷地付近)。⑤砂薬師坂北側中段平坦地。⑥砂薬師坂北側下段平坦地とした。そのうち④、⑤、

⑥地区を④地区をA地区、⑤地区をB地区、⑥地区をC地区とし、トレンチによる発掘調査が行なわれた。

A地区は、中央に南北方向のトレンチ1本設定した。これに直交するように東西方向に3本のトレンチを設定した。砂薬師坂降り口の角に薬師堂の遺構を確認するためにL字形のトレンチを設定した。B地区もA地区同様にトレンチを設定した。C地区は、仮設のゲートボール場があった場所に十字にトレンチを設定した。後述の漆喰の部分を除いて南北方向にトレンチを1本設定し、直交するように東西方向に2本トレンチを設定した。C地区南北トレンチ西側断面より長さ3.6mの漆喰線がみられたため、漆喰部分の全容を確認するために調査区を拡張している。南北トレンチの北側石垣から南の位置にトレンチを設定した。

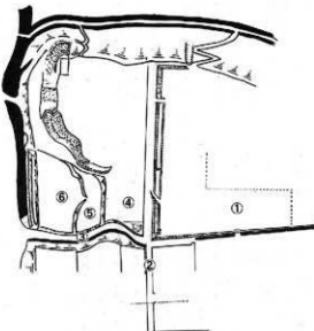
#### ・調査の概要

A地区中央から北側は、電車線路用の敷石が地山近くまで埋められており、深い所では1.8m近くに達している。中央部分では軍の建物と思われる煉瓦の建物基礎が、原形のまま残っていた。

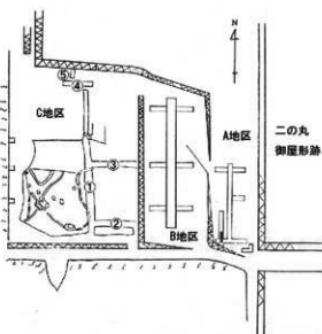
東西方向のトレンチのうち南側のものの西端部分から、底に平瓦を敷き安山岩で両側石が造られた開渠の排水構が確認された。排水溝は南北にはしっていたため、トレンチを拡張した。その結果、溝幅約35cm～40cm、長さ約5mが確認された。それより北側は、赤煉瓦基礎のため破壊されている。薬師堂の遺構確認のためのL字形のトレンチの調査では、不規則に石列が存在するだけで遺構は確認されなかった。

C地区的南北トレンチで確認された漆喰部分の検出作業が行なわれた結果、全面漆喰張りの池状の遺構が検出された。遺構の北側は、東西方向で断ち切られている。また、漆喰の細い堤を境とした南北両部分の合流点に、それぞれの水門をもつ水溜が設けられている。水溜も漆喰で造られており、幅約45cm、長さ2mの長方形で、深さは約50～60cmである。水門はふたつとも幅約32cm、高さ52cmで、内側にサブタがあり、上方から仕切り板を落とすような構造になっている。水溜の南側の水門の反対側には凝灰岩製の排水溝が幅約20cmで約8m続いている。この排水溝には北側から来た幅15cm、長さ6mの排水溝も合流している。両排水溝とも深さは約10cmである。調査区からは他にも、直径60cmのピットが3つ、直径1mのピットが1つ確認された。また、80cm×80cmの方形の掘り込みもみられた。

C地区北側に設定したトレンチでは、60～70cmの深さで地山の層があり、遺構は検出されなかった。石垣に設定したトレンチでは地山に対して約1.7m掘り込んで根石を置いていることが確認された。B地区では遺構は確認されなかった。

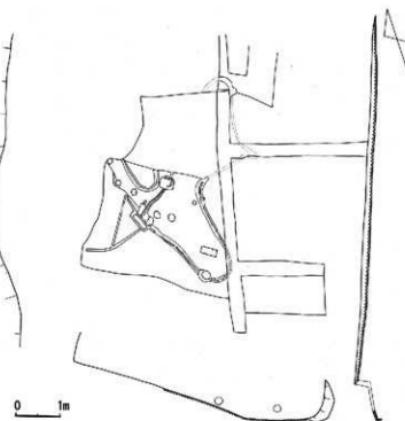


4-3-3-13図 調査区位置図(第1-1(1)図) 上が北



4-3-3-14図 A・B・C地区調査地点位置図  
(第1-1(1)図)

遺物は多くは陶磁器の破片や瓦である。瓦はいずれも軒丸瓦と軒平瓦であり、軒丸瓦の文様のほとんどは、三巴文であった。軒平瓦は唐草文で、中央に四花弁の花模様を入れたものがみられた。平瓦の中には「土山少太夫」「五」など刻印のあるものもみられる。陶磁器類は、すべて幕末から明治・大正のものであり、伊万里焼系が多く出土した。



4-3-3-15 図 C 地区遺構平面図（第 3 図）

### < 37 二の丸御屋形跡 >

報 告 書：熊本市教育委員会『熊本城三の丸森本櫓跡塗畠遺跡調査報告書』1979

熊本城研究会『熊本城三の丸・二の丸遺跡調査報告書』1980

調査期間：昭和 54 年（1979）3 月 15 日～6 月 30 日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

#### ・調査に至る経緯

昭和 50 年代より三の丸の史跡公園整備がはじまった。史跡公園整備のための旧地割り構造・遺跡を明らかにするために公園整備対象となる地区的調査が行なわれた。

以上、森本櫓・御腰掛跡・（藤崎台北側）

同上

#### ・調査の方法

二の丸御屋形の調査区は I 地区である。調査時には、I 地区内を南から北へ a～d 地点に細分された。b 地点では、コンクリート基礎跡が調査地点全体を覆っており、建物基礎部中央に東西 1 m × 南北 5.8 m のトレンチが設定された。c 地点は、南側の b 地点との境にある植え込みと北側の建物跡との



4-3-3-16 図 調査区全体図（第 10 図）

間に東西 13 m × 南北 1 m の 2 トレンチ、小道東側の旧化血研境界に沿って東西 1 m × 南北 21 m の 3 トレンチ、北西隅に東西 10 m × 南北 1 m の 4 トレンチが設定された。d 地点は、東側境界に東西 4 ~ 1.5 m × 南北 22 m の 5 トレンチ、西側に残る建物跡南側空地に東西 6 トレンチが設定された。その他排水施設確認の目的で 6 トレンチ東側に 7 トレンチ、6 トレンチ南側延長線上に 8 トレンチが設定された。石垣北側と西側に排水施設の出口がみられたため、延長戦のために北側に 9 トレンチ、西側に 10 トレンチが設定された。

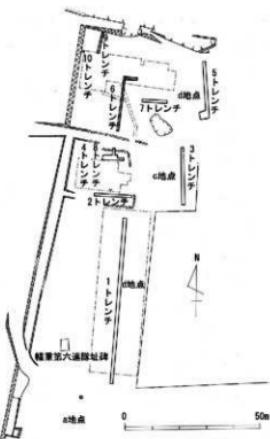
#### ・調査の概要

I 地区の最南端に位置する a 地点は、地点西側に幅約 4.9 m を測る大走りと、高さ約 1.29 m で 5 段積みの石垣が検出された。南西隅寄りでは、御屋形跡の通路が検出されている。間口 4.2 m、奥行 2.0 m、高さ 1.29 m を測る通路である。通路には階段あるいは痕跡は検出されていないが、わずかに安山岩の柱状割石が間口に並べられ 10 cm弱の高まりに整地した状態で検出されている。西側の大走り部分では、九曜紋軒丸瓦・棟瓦・軒平瓦が出土している。

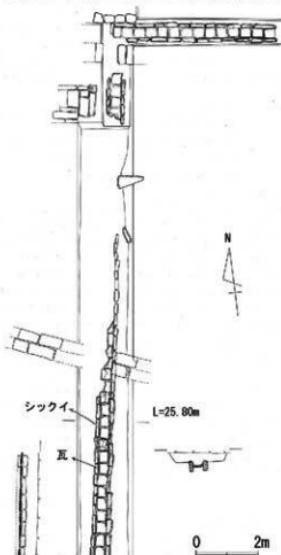
b 地点は a 地点の北側で、東側には旧化血研研究所敷地があった。a 地点との境界近くに「軽重第六聯隊址」碑が建立されている。コンクリート基礎跡内のトレンチ掘削の結果、コンクリート下には漆喰、瓦、砂利などが埋め込まれ、基礎部全体としては厚さ 1 m を掘り、厚いところではローム層まで達している。遺構は検出されていない。

c 地点は b 地点の北側で、コンクリート建物基礎部が全体に残っていたため、建物基礎部を避けてトレンチが設定された。調査の結果、2・3 トレンチは、現地表面下約 60 cm でローム層に達している。ローム層までは 2 層の堆積層が確認されているが、いずれも漆喰、瓦片、焼土などが混入する搅乱層であった。遺構は、3 トレンチにおいて幅約 1.5 m、東西方向に伸びる溝状遺構が確認されている。4 トレンチにおいては、地表面下約 15 cm ~ 30 cm で側溝蓋が検出されたが、大半が陥没し、散乱状態であり、溝の中にはコンクリート製の管が埋められたものも検出されている。

d 地点は c 地点の北側に位置し I 地区最北端に位置している。5 トレンチでは地表面下約 80 cm のところでローム層に達した。土層堆積状況は c 地点内とほぼ



4-3-3-17 図 I 地区トレンチ配置（第 11 図）



4-3-3-18 図 I 地区 d 地点 6 トレンチ内遺構  
(第 12 図)

同じ様相を呈している。遺構は検出されていない。6トレンチ内では地表面下60cmのところで排水遺構が検出された。建物基礎跡内で東側に屈曲しており、凝灰岩と瓦を用いて構築されている。側石の一部は、硬質明黄褐色ローム層に埋め込まれている。排水遺構の内側の幅は、約30cmである。石材及び瓦の縫ぎ目には漆喰が埋め込まれている。屈曲した先は、5mまで検出されたが、それより東は破壊されていた。6トレンチからは刻印瓦が出土している、刻印の種類は、「土山団介」「武兵衛」「平吉」「太右衛門」「土山重兵衛」「権平次」「左五右衛門」などの銘がみられた。

7トレンチと8トレンチでは遺構は検出されていない。9トレンチと10トレンチでは地表面下15cm前後のところで凝灰岩の蓋石が検出された。側石と底石には凝灰岩の切石が用いられていた。遺物の大半は、明治時代以降の瓦・日用品・雑器類である。

### <38 御腰掛跡>

#### ・調査方法

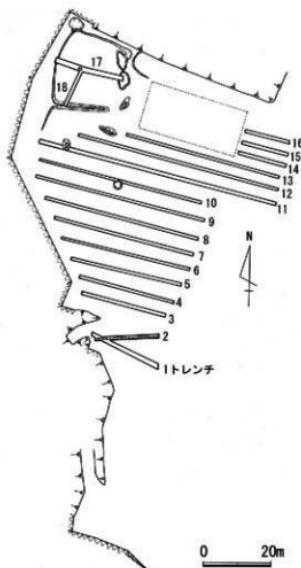
「御腰掛」は、II地区に該当し、I地区の下段に位置する。調査箇所は、「御腰掛」の北側約半分である。トレンチは、北から南へ3~2m間隔で合計16箇所に設定した。

#### ・調査の概要

3トレンチでは、土層堆積状況を知るためにローム層を掘り下げた。土層は第1層表土層、第2層暗褐色土層、第3層ローム層に大別できるが、第1・2層はほとんどコンクリート基礎、ゴミ穴により搅乱を受けており、トレンチ内東側に僅かではあるが搅乱を受けてない暗褐色土層の堆積が認められた。暗褐色土中にはかなりの量の土師質土器片や瓦片が含まれていた。

他のトレンチで検出された遺構は、排水施設と井戸状遺構である。排水施設は1トレンチ内西側一部と2トレンチ内で地表面下50~40cmのところでほぼ東西にのびる排水施設が確認されている。安山岩・凝灰岩の切石が用いられており、東端はコンクリートで造られた排水溝に直結している。西側は土手の方向にのびた状態で残存している。

井戸状遺構は9・10トレンチ間に搅乱層直下のローム層上面で確認されている。覆土は灰白色粘土が埋め込まれた状態で堆積し、掘込面より2.5~2.0mのところに井戸の上面を四角に枠取する時に用いる凝灰岩の切石が投げ込まれた状態で確認された。遺構の規模は、東西2.4m×南北2.6mを測るほぼ円形を呈している。深さは掘り込み面より2.5m以上である。遺構から出土した遺物は、青磁片と土師質土器の杯・小皿が出土している。



4-3-3-19図 II地区トレンチ配置図(第14図)

## < 39 森本橋 >

### ・調査方法

整備対象範囲が広大なため、現状地形を元にⅠ～Ⅲ地区に区分し、さらに地区により幾つかの地点に細分して調査を行なった。森本橋は調査区の中のⅡ地区に該当し、東西方向に南北1m×東西23.5mの17トレンチ、17トレンチに直交する形で東西1m×南北13.5mの18トレンチを設定し、調査された。

### ・調査の概要

森本橋はクスノキと盛土状の高まりにより区画されている。中央凹部にはコンクリート塊が散乱し、表土層直下に多量の石炭殻が堆積していたため、中央部の掘削は途中で中止した。四隅のうち東・西側と南側の一部をローム層まで掘り下げた。土層は第1層表土層、第2層暗褐色土層(焼土を混入し、遺物も多く含まれる)、第3層ローム層に大別できる。

17トレンチ内西側寄りに第3層を掘込む形で方形の遺構を確認した。凝灰岩の切石が一部遺構を囲む状態で確認され、その以下のローム層上面に土色の変化がみられた。遺構の規模は東西1.8m、南北1.9mであり、ローム面よりの深さは0.9mである。遺構には粉状になった炭が堆積していた。

## < 40 (藤崎台北側) >

### ・調査の方法

調査区内の土層堆積状況を知るために中央に南北1m×東西72mの1トレンチ、直交する形で東西1m×南北51mの2トレンチが設定された。調査区南東隅の西側と北側に検出された石列に沿うように3トレンチが設定された。3トレンチ北側に4トレンチが南北1.3m×東西13mで設定されている。

### ・調査の概要

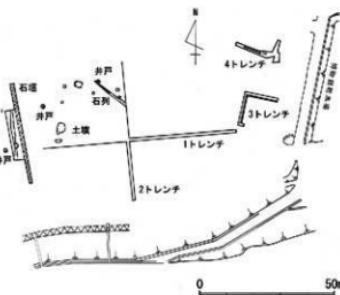
1トレンチの土層堆積状況は、コンクリート基礎部下が3層に分けられる。第1層：暗褐色土層、第2層：灰白色粘質土層(焼土を含む)、第3層：ローム層となる。1トレンチ内では東側の半分で第1層直下にローム層がみられ、西側の第1層はわずかしか堆積しておらず、第2層が厚く堆積している。

2トレンチ内では1トレンチと交差する付近で藤崎台側から続くカットした痕跡がみられた。藤崎台の土手は途中から垂直近くカットされた状態である。

3トレンチでは、当初検出されていた石列が2段積まれていることがわかった。石垣は下段がローム層にわずかに喰い込んでいる。石垣の屈曲付近では土管が埋設されており、石垣の一部は破壊されていた。石垣の規模は屈曲部から南側が10.4m、東側は8.5m以上、高さは約50cmである。

4トレンチでは、トレンチ上面から60cm掘り下げたところで凝灰岩製の排水施設が検出された。遺構は、既に大半が破壊されており、7.2mが残存する状態である。側石の一部はローム層に埋もれている。

調査区中央以西は第2層下面まで掘り下げた段階で西端寄りに南から北へのびる石垣が検出された。石垣上面からは焼土や炭化物が多く散乱している。石垣の規模は、南北36m以上、高さ1.7m～0.6mであり、ほぼ垂直に積まれている。石垣の南側端から北へ11mのところで段階が検出された。段階は間口1.7mであり、5段に積まれている。石垣は南端から北へ18.2



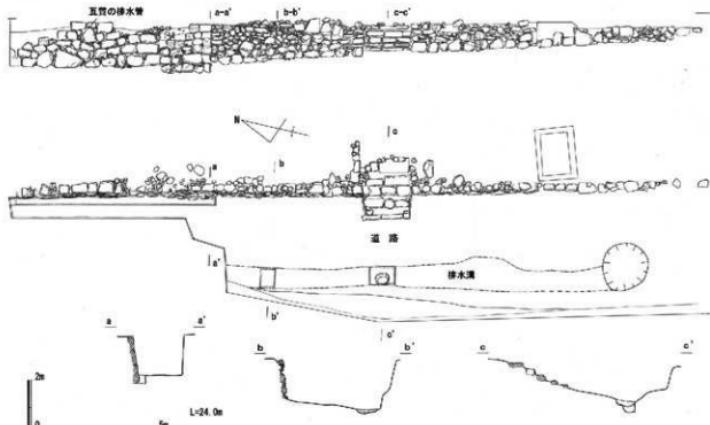
4-3-3-20 図 Ⅲ地区トレンチ配置図(第19図)

mの所で積み方が異なる。部分的に最下段がローム層中に埋め込まれている。石垣は南端から北へ 8.7 m の所で煉瓦で造られた建物の一部に破壊されている。

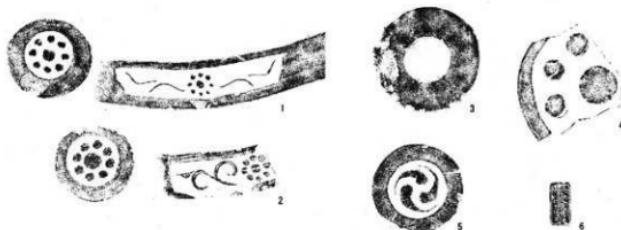
石垣検出面で道路が確認された。道路はローム面を固めた状態であり、石垣に沿いながら南北にのびている。道路面にはムシロ状の炭化物が一面に敷かれた状態で確認できた他、焼土も多くみられた。道路幅は 3.7 m ~ 3.3 m である。道路西側沿いには、溝状遺構が検出された。遺構は東西幅 70 cm、深さ 20 cm 前後を測り、U 字状を呈している。底部には砂粒がわずかに堆積している。南端は直径 1.2 m の穴が掘られている。

調査区中央北側境界付近では石列と井戸が検出された。石列は安山岩製で、ローム層を若干掘りくぼめた中に東西に並べられている。井戸は凝灰岩製であり、規模は直径 1.1 m である。石垣南西部でも井戸が 2 基検出されたが、上部観察のみで、直径は 1.7 m である。他には土坑が検出された。

遺物は、調査区西側土坑より青磁片や瓦器の擂鉢片、土師質土器の皿が出土した。



4-3-3-21 図 III 地区西側調査区石垣遺構図（第 22 図）



4-3-3-22 図 I 地区 a 地点出土瓦拓影図（第 28 図）

## 第4項 古城地区

### (1) 概要

本報告書でいう熊本城古城地区は、茶臼山台地の南西側に延びる丘陵部と、その南西の一段下った場所である（4-3-4-4 図参照）。現在は熊本県立第一高等学校（以下、第一高校）、国立病院機構熊本医療センター（以下、国立病院）、桜の馬場城彩苑、桜の馬場バス駐車場などが所在する。

現在の第一高校一帯は、グラウンドに面する崖面に古墳時代に構築された古城横穴群があり、古墳時代からこの一帯が利用されていたことが知られる。大永・享禄年中に鹿子木親員（寂心）が限本城に在城したが、この城は「今ノ古城也、千葉城分内狭少ナル故也」と『肥後国誌』にみえる<sup>1</sup>。その後、城親冬が限本城入り、以降3代にわたって城主をつとめた。天正15年（1587）3月、豊臣秀吉が島津氏攻略のため九州に出兵すると、城久基は限本城を明け渡した。この時の限本城は「数年相持たる名城也」と評され、肥後国の要所として認識されていた。その後に行なわれた九州国分では、肥後一国を佐々成政に与え、秀吉は兵糧・鉄砲の玉葉まで揃えて城に備え、普請まで命じたうえで限本城を成政に下したが、間もなく國衆一揆が発生し成政は切腹となつた。秀吉は肥後北半国を加藤清正に与え、限本在城を命じた。

加藤清正が入国した天正16年（1588）以降に築城が始まった限本城は、慶長4年（1599）頃から茶臼山台地東端に新しく居城が建設されていくことで、以後は「古城」と呼ばれることになる。天正18年（1590）に比定される清正書状では古城で石垣や堀の普請を指示しており、同年とされる史料では本丸に天守や小天守があり、「おうえ」（婦女子の部屋）や表門櫓などが建造され、本格的な織豊系城郭として築城が進められていたと考えられる。

その後、新城が築城され本丸が移ると、古城地区一帯は武家屋敷として利用された。寛永7年（1630）前後の「熊本屋舗割下絵図」（熊本県立図書館蔵）によれば現在の第一高校は下段と上段の2つの曲輪からなり、曲輪を東西に分断する南北道路があり、下段西側に前田庄大夫屋敷、同じく東側に天野民部屋敷、その上段西側は神田対馬屋敷、その東は「古城」と記載されるのみで屋敷地ではなく、道路突き当りが成田弥兵衛屋敷であった<sup>2</sup>。

「古城」と記載された箇所は白川の河道に面した本丸の端部で、この絵図では本丸東面には石垣の表現がないが、新城完成後に移築または廃棄が想定される古城時代の天守の位置を表している可能性がある。

また、現在の国立病院一帯も加藤時代より上級家臣の屋敷地として利用され、「熊本屋舗割下絵図」によると中央には南北に貫通する道路があり、道の東側に「並河志摩守屋敷」「小代下総守屋敷」「下津内記屋敷」と記される。

細川氏の入国直後の寛永11年（1634）の「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」（熊本県立図書館蔵）によれば、現第一高校の西側石垣上には加藤時代から存在した4棟の隅櫓が描かれている<sup>3</sup>。下段南西隅は二階櫓、北西隅は鉤状に折れた平櫓で、いずれも屋敷を拝領していた蔵家が預った。また、上段の南西隅・北西隅ともに平櫓で、これらの櫓も屋敷を拝領していた山名家や三削家の預った櫓である。その後、文政期の「御土居絵図」の写とみられる「従三瀬永次郎屋敷朽木内匠屋敷迄」（熊本県立図書館蔵）には蔵内匠屋敷の南西隅の二階櫓は平櫓となり<sup>4</sup>、屋敷地北東には新たに一棟の平櫓が描かれて、安政4年（1858）以降の「二ノ丸之絵図」（水青文庫蔵）も同様の描写である<sup>5</sup>。

また、現在の国立病院南東の石垣上には二階櫓が、その西の通路に面して平櫓が加藤時代より存在したことが「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」から分かる。これらの櫓は屋敷地を拝領した有吉家が預かつたが、このうち平櫓は安永8年（1779）以前に大破して解体したことが記録に残り、以降は再建されていない<sup>6</sup>。中央の道を挟んで西の高台（現在の看護学校校舎一帯）には松井家の下屋敷があり、庭に面した2階建ての瀟洒な建物は「一日亭」と呼ばれた。（第4-3-4-1図）



4-3-4-1図 松井家下屋敷「一日亭」(長崎大学附属図書館蔵)



4-3-4-2図 古城堀越しに見た熊本県庁(富重写真所蔵)

一方、桜馬場一帯は蛇行する白川の河道に位置していたが、加藤清正による茶臼山への熊本城築城に伴い、慶長年間に蛇行していた白川の流路を直線的に付け替え、それまでの白川流路などをを利用して坪井川を開削したと考えられている。加藤時代より武家屋敷地として利用され、「熊本屋舗割下絵図」によると道で区画された3つのエリアで構成されている。このうち備前堀の西側に位置する北東のエリアは加藤時代には4区画の屋敷地で、うち南東は加藤兵庫の屋敷である。17世紀末から18世紀初頭頃まで武家屋敷とみられるが、18世紀中頃には御用屋敷となり、19世紀中頃には掃除方御用屋敷となった。北西のエリアは周囲を道で囲まれた長方形の地区を屋敷地として複数に区画している。古い時代は小規模に区画された屋敷地だが、次第に広い敷地を持つようになるなど、区画の変遷がみられる。南部のエリアは東西に細長く伸びた坪井川沿いの地区で、北西部と同様に当初は小区域の屋敷地だが、18世紀中頃には大区域の屋敷地となる。坪井川沿いの石垣上には二棟の平櫓があり、江戸後期の絵図では「堀平太左衛門預櫓」と呼称された。なお、古城および桜の馬場一帯は「二ノ丸之絵図」(熊本県立図書館蔵)(4-3-2-1図)の描写範囲に含まれている。

明治3年(1870)に現在の第一高校には医学校が開校し、同4年(1871)には洋学校が開校した。下段の西側は医学校、東側は治療所で、上段の西側に洋学校と寄宿舎、東側に外国人教師マンスフェルトやジェーンズの官舎があった。なお、ジェーンズの官舎は2階建てで、古城から南千反畠、水前寺に移築され、県内に現存する最古の洋風建築として熊本県重要文化財に指定されている。明治4年に鎮西鎮台(のち熊本鎮台)が設置されると、桜馬場は砲兵営地として買収され、屋敷および北西部と南部を隔てていた道路がなくなり、明治9年(1876)には砲兵営が落成した。敷地には兵舎、厩、雪隠などの建物が建てられたほか、北東部には火薬庫が設けられたが、同年の神風連の変により敷地北側の兵舎など数棟を焼失している。西南戦争直後に坪井川左岸から撮影された写真には砲兵営の建物の屋根が確認できる。

明治7年(1874)頃には鎮台が現在の国立病院一帯の土地を取得し、衛戍病院が建築された。明治8年(1875)、古城医学校や古城病院が移転し、跡地には県庁が移転してきて同20年まで存続することになる(4-3-4-2図)。

明治10年(1877)の西南戦争では、古城(一日亭跡地)と県庁に古城附近守備隊が配置され、石垣上には堡籠(弾薬の工作物)が並べられ、砲台が築かれた。また、同時に衛戍病院の西に偕行社が建てられた。明治22年(1889)熊本地震では、古城南の樹形や衛戍病院西の崖で被害が生じた。その後、熊本市街地図などによれば、明治34年(1901)から38年(1905)の間に現在の第一高校の中央を南北に分けていた水堀が埋め立てられた。

明治31年(1898)には桜の馬場の野戦砲兵第六連隊の本部・第一・大二大隊が大江の新兵舎に移転し空地となった後、大正3年頃から煉瓦造りの兵器支廠倉庫(4-3-4-3図)が新築された。昭和初年の地図で倉庫は3棟だが、昭和20年代の地図および航空写真では4棟となっており、この間に増築されたとみられる。また、明治32年(1899)に桜橋が架橋され、同時に第一高校と熊本医療センターを区断する道路が鞍掛坂を部分的に削平・平坦化する形で整備された。

昭和8年(1933)、石垣と堀が史蹟に指定され、昭和15年(1940)に国立病院敷地西側が史蹟に追加指定されたが、昭和37年(1962)に指定解除された。なお、昭和30年(1955)に史蹟指定地は特別史蹟となつた。なお、昭和28年(1953)6月22日の白川大水害後には古城堤端の濠が廃土の捨て場として利用され、その後は公園緑地となつた。

戦後、熊本城一帯は米軍進駐に伴い接収され、古城はグリーン地区、桜馬場はレッド地区と呼ばれた。昭和31年(1956)に接収が解除され、グリーン地区には第一高校の建設が決定し、昭和35年(1960)には古城の中核部全体が第一高校の敷地となり現在に至つて。また、レッド地区には合同庁舎の建築



4-3-4-3図 桜馬場の兵器支廠倉庫(熊本日日新聞社)

が決定し、昭和 36 年(1961)に落成した。また、昭和 34 年(1959)には第 15 回国民体育大会夏季大会開催のため、北東部に県営熊本城プールが建設され、平成 13 年(2001)に閉鎖されるまで「城内プール」の名称で親しまれた。県営プール跡地は平成 20 年(2008)に発掘調査が実施され、平成 23 年(2011)に熊本城観光のエントランス部として桜の馬場城彩苑、湧々座がオープンした。また、合同庁舎は平成 27 年(2015)に新築移転し、平成 29 年(2017)2 月より庁舎を解体、跡地は平成 30 年(2018)10 月 15 日に特別史跡熊本城跡に追加指定された。

1 後藤是山編『肥後国志 上巻』青潮社 1971

2 『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編 絵図・地図・写真』熊本市 2019 5~10 頁

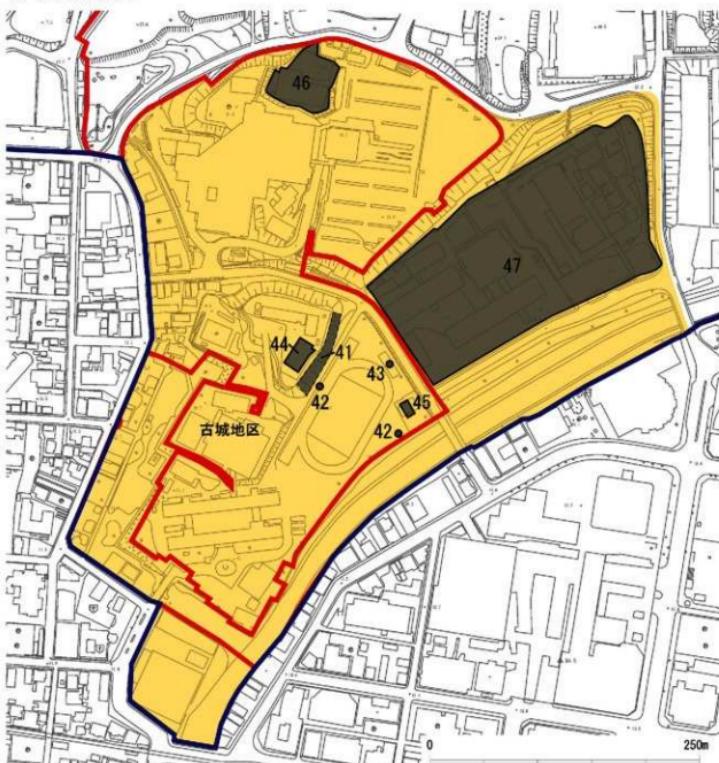
3 註 2 報告書 11 ~ 16 頁

4 註 2 報告書 110 頁

5 註 2 報告書 137 頁

6 『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編 史料・解説』熊本市 2019 181 号文書

(2) 発掘調査成果



41. 古城櫛穴群 42. (熊本県立第一高等学校校庭の石水路) 43. (熊本県立第一高等学校体育馆倉庫の旧軍施設)  
44. (熊本県立第一高等学校セミナーハウス) 45. (熊本県立第一高等学校校長官舎) 46. 古城上段(国立病院)  
47. 桜馬場

4-3-4-4 図古城地区範囲と発掘調査地点位置図

#### < 41 古城横穴群 >

報告書：熊本市教育委員会『熊本市北部地区文化財調査報告』1971

調査期間：昭和44年(1969) 8月24日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

##### ・調査に至る経緯

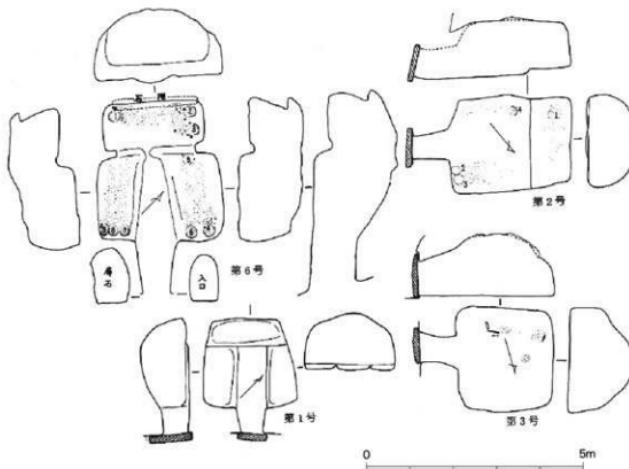
昭和33年秋、第一高校の運動場が拡張されるにあたって、敷地の北側、すなわち鹿子木寂心の築いた古城の本丸南側崖面が削られることになった。この地に横穴群があることは古くから知られ、熊本市史やその他一部の記録にもみえている。この地には明治以来陸軍の施設があったため、戦時中防空壕が掘られ、崖下にならぶ下段の横穴はすべて破壊されてしまった。

##### ・調査の方法

昭和33年(1958) 12月14日、本丸の南側崖面中腹に第1号横穴1基が発見された。ついで同月20日第2号横穴がさらに翌年2月25日その上段ステップの東端に第3号横穴が発見され、応急調査を行なった。さらに第3号横穴の西隣に第4号・第5号を発見。ついで同3月13日には第6号が発見され継続して調査を行なった。しかし第4号は内部に土砂が充満し、第5号も危険状態にあったので後日の再調査を期し埋没した。したがって調査したのは第1号・2号・3号および第6号だけである。

##### ・調査の概要

古城横穴群のある本丸の丘は、阿蘇4火碎流を母体に形成されているが一般に岩質が柔かく、崩壊しやすいけれど完好に残るもののが少ない。しかし副葬品が豊富で、この地方の横穴研究に相応な手がかりがえられた。



4-3-4-5 図 古城横穴群実測図 (第 80 図)

第1号横穴は総奥行2.65m、羨門部高さ60cm、幅50cm、羨道奥行55cmを有する。玄室の奥行2.10m、最大幅2.15m、天井までの高さ1.10mを有する。床の平面が奥へむかって梯形を呈し、奥壁下に1区、両側壁下に各1区、計3区の屍床を丸彫りにし、中央には羨道につづく通路を設ける。各屍床は浅く彫りくぼめ、おのの床には骨粉が残り、3人の遺体を葬った形跡を確認したが、副葬品はなかった。

第2号横穴は第1号の東隣に接して発見され、総奥行3.65m、羨門部の天井はすでに崩壊し阿蘇溶岩切石の屏石が立っていた。羨道奥行85cm、幅65cm、高さは復原すると約70cmを有したらしい。玄室は床の平面が長方形を呈し、奥行2.80m、幅2.20m、天井までの高さ1.25mを有する。奥壁にそって屍床1区を丸彫りにし、両側にはなかった。しかし人骨は奥壁下の屍床に1体分(第1号人)奥へむかって右側壁下(東側)にならんで二体分(第2号人・第3号人)が検出され、左側壁下にも1体分(第4号人)があった。第2号人と第3号人は頭を入口側にならべ、とくに内側に置かれた第2号人は顔を通路側にむけていた。そして第2・第3号人の間から銅製の帶先金具が検出されたほか、副葬品はなかった。おそらく身につけていたものであろう。この横穴の上段約3m上ったあたりにステップがあり、須恵器の甕提瓶・横瓶・はそう・皿・坪・土師器高杯・坏などが一括して発見された。中でも甕は意識的に底部を打ち抜いた形跡があり、繖片や金銅の薄片も検出された。おそらく上段ステップにはもう1基横穴があり、須恵器類はその前部庭にならべた墓前祭祀の形跡を物語るものであろう。

第3号横穴は上段ステップにならぶ横穴群中、最東端に位する。総奥行3.00m、羨道奥行90cm、幅60cm、高さ1mを有する。入口は阿蘇溶岩の屏石で塞ぎ、その周囲は彫りくぼめていた。玄室は床の平面が方形に近く、奥行2.10m、幅2.40m、天井までの高さ1.35mを有する。床には屍床なく、白紺化した人骨の痕跡を検出したが、何体に上るか明らかでない。奥壁下とむかって左側壁下に刀子を1本ずつ出土しているので、少なくとも2体以上を埋葬したことは明らかである。その他入口に近い右側壁下には馬具残欠らしい金銅製品破片や鐵鏃も出土した。

その西隣には第4号・5号・6号とならんで発見されたが、完全に調査したのは第6号横穴だけであった。第6号は古城横穴群中最大の規模を有し、遺物の量も豊富であった。総奥行4.20m、羨道奥行1.20m、幅1m、高さ約1mを有し、入口には大きな安山岩の屏石を設けていた。(長1.25m、幅85cm)玄室には中央通路をはさんで左右2区に床を丸彫りにあらわし、奥壁下には通常より約40cm高く舟形の屍床を丸彫りにする。玄室奥行3.00m、幅2.90m、天井までの高さ1.75mを有し、奥壁の床から約90cm上ったあたりに、奥壁いっぱいに段状の石檻を丸彫りにあらわす。

奥壁下の屍床には頭を西に置いた第1号人と、頭を東に置いた第2号人・第3号人の計3体があり、むかって東側、すなわち右屍床には頭を北にした第5号人と、頭を南にした第4号人・第6号人がならんで葬られていた。むかって左側(西側)の屍床には第7号人・第8号人・第9号人がいずれも頭を南にしてならんでいた。各人骨に伴った着想品や副葬品との関係は次の通りである。

第1号人金環小2個(2.0cm)管玉1個(長1.4cm)ガラス小玉16個

第2号人刀子片2口分、金環大2個(3.0cm)メノウ勾玉1個、水晶切子玉1個、その他ガラス小玉および破片。

第3号人金環小2個(2.0cm)その他ガラス玉、玉片。(ガラス玉21個とその破片22個は第2号人と第3号人のいずれに伴ったか不明。)

第4号人・第6号人、刀子2口、金環第2個(3.0cm)同小2個(2.0cm)ガラス玉20個、同破片10個

第5号人(齒のみ)首まわりに丹粉をまく。

第7号人(齒のみ)

第8号人 金環大2個(3.0cm)木の実1個

第9号人(齒のみ)ガラス玉破片1個

これらの出土遺物は第一高校社会科研究室に整理保存されている。

古城横穴群は玄室内に三区の屍床を設ける典型的な肥後型の横穴墓で、須恵器やその他の遺物を考慮して7世紀中葉の所産と考えられる。

#### (昭和 57 年(1982)～昭和 58 年(1983))

報告書：熊本県教育委員会『古城横穴墓群』(熊本県文化財調査報告 第 74 集) 1985

調査期間：昭和 57 年(1982) 11 月～昭和 58 年(1983) 6 月

調査面積：不明

調査主体：熊本県教育委員会

##### ・調査に至る経緯

昭和 30 年代に行われた調査の後、横穴墓はその存在さえも忘れ去られようとしていたが、昭和 57 年 8 月の集中豪雨に際して古城丸の南崖面 2 カ所が大きく崩壊し危険状態になった。その対策を第一高校と熊本県教育庁施設課・文化課の三者で協議し、横穴墓には学術調査を施したうえ、崖面に災害復旧の護岸工事をすることになった。

##### ・調査の方法

不明

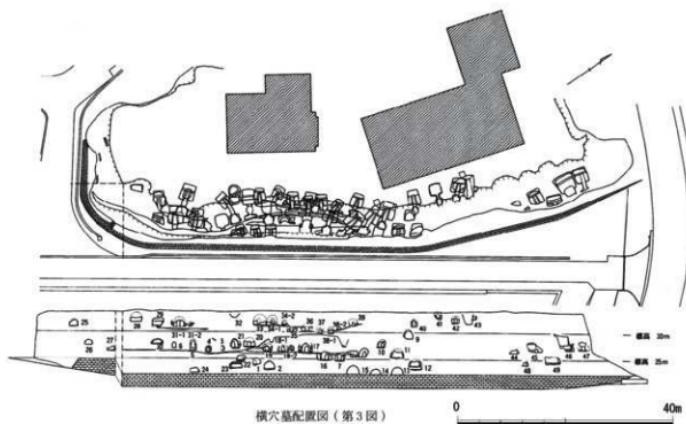
##### ・調査の概要

古城横穴墓群は高さ 15 m の崖面の幅 100 m の範囲に、大きく 3 段に造られている。上段はやや左寄りの一部に家形の天井をもつ大型の横穴墓(29 号・31 号墓)もあるが、ドーム形天井の普通の大きさないしやや小型化した横穴墓が多い。ほとんどどの天井が陥没している。最上部にある 1 基(32 号墓)は半地下式の構造となっている。未開口の横穴墓は 3 基(31 号・38 号・39 号墓)発見され、中央よりやや右寄りの 1 基(39 号墓)の閉塞石に「火守」または「火安」と読める文字が刻まれていた。また上段の横穴墓のうち 3 基(31 号・34 号・38 号墓)の右側に付随して小型の横穴墓が掘られていた。

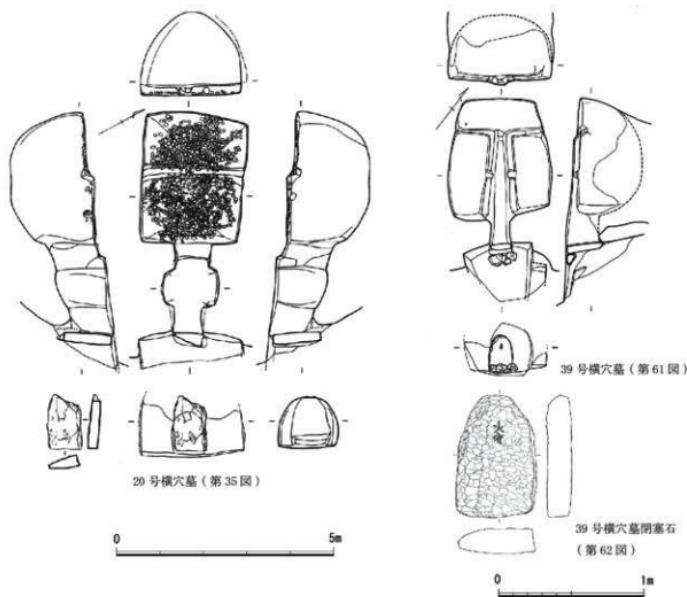
中段の横穴墓は最も保存が良く、玄室の構造もさまざまである。大型の横穴墓が多く、7 基(3 号・6 号・8 号・17 号・18-1 号・18-2 号・20 号墓)が未開口であった。このうち中央やや左寄りの 1 基(20 号墓)は複室であった。墓室の奥壁上方に棚状の抉り込みをもつ特異な横穴墓も数基みられた。また中央部の 18 号横穴墓の横には小型横穴墓 1 基が付随して掘られていた。そのほか中段の右端近くの大型の 46 号横穴墓からは線刻文、中央部の 16 号横穴墓の閉塞石には把手を表現したような陰刻、同じく 8 号横穴墓の閉塞石には赤色顔料の塗られた痕跡が確認された。

これらの横穴墓の構造は、澳門部がアーチ形で、玄室天井部がドーム形のものが多く、床面は平らなものもあるが、多くは通路をはさんで左右と奥に合計 3 区の屍床をもつ、いわゆる「コ」字形に屍床を配置している。なお中段と上段に墓道状の段があるが、横穴墓の前庭部や澳門部を破壊して造られている。

古城横穴墓群では、土器の残っていた横穴墓はあまり多くない。20 号墓が最初に造られ、19 号横穴墓と 3 号横穴墓が統いて造られた。閉塞石は安山岩を使用している。この 3 基を古城 I 期とし、出土した須恵器から 6 世紀後葉と考えられる。古城 II 期の横穴墓は割合大型で墓室壁面のやや上方に棚状の段をもつ。閉塞石は扁平で大型の凝灰岩切石が用いられる。時期は出土した須恵器から、6 世紀末ないし 7 世紀前葉と考えられる。古城 III 期の横穴墓は造りが丁寧で整った形をしており、すべて「コ」字形屍床で仕切りも高くはつきりしている。閉塞石は大型の凝灰岩切石が用いられる。表面仕上げも丁寧である。古城 IV 期の横穴墓は入口や内部が前代に比べてやや狭くなり、全体の仕上げも難になっている。屍床の仕切りも低く省略したものもある。閉塞石は凝灰岩切石を用いるが小型である。出土した須恵器から 7 世紀の後葉頃造られたものと考えられる。



横穴墓配置図（第3図）



4-3-4-6図 古城横穴群実測図(第3-35-61-62図)

(昭和 57年(1982)11月～昭和 58年(1983)6月)

報告書：熊本市『新熊本市史』通史第3巻中世 1998

調査期間：昭和 57年(1982)11月～昭和 58年(1983)6月

調査面積：不明

調査主体：熊本県教育委員会

・調査に至る経緯

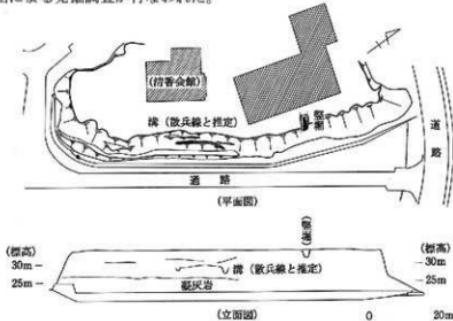
昭和 57年 8月の集中豪雨で、本丸の南崖面 2カ所が崩壊したことによる発掘調査である。熊本県文化課では、防災工事に先駆け、崖面に残る古城横穴群の全面調査を実施し、その際に中世とみられる遺構と遺物を確認したものである。

・調査の方法

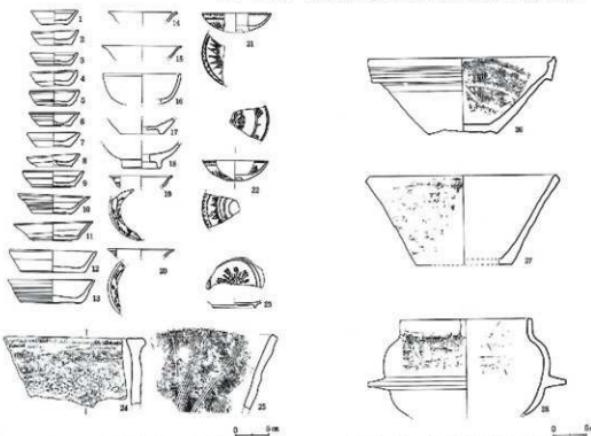
遺構が所在する斜面の全面露出による発掘調査が行なわれた。

・調査の概要

遺構は、凝灰岩を掘り出した溝を検出している。遺物は系切り土師器窯・白磁・青磁・染付・基筒底皿・拂り鉢・捕鉢・土釜である。磁器はいずれも中国からの輸入品で、時代は 16世紀中葉から後期のものである。



4-2-4-7 図 順本城本丸南崖面調査区測量図(第53図)



4-3-4-8 図 出土遺物実測図①(第54図)

4-3-4-9図 出土遺物実測図②(第55図)

#### <42 (熊本県立第一高等学校校庭の石水路)>

報告書：熊本県教育庁『隈本古城史』1984

調査期間：昭和 55・56 年（1980・1981）

調査面積：不明

調査主体：熊本県教育委員会

##### ・調査に至る経緯

昭和 55 年に第一高校の校庭北側排水溝の整理の工事中に、凝灰岩の切石を使用した水路が見つかった（A 地点）。また昭和 56 年（1981）にも校庭南側（B 地点）でもフェンスの付替え工事中に同様の水路が発見された。発見された遺構は、熊本県教育府文化課が記録した。

##### ・調査の方法

発見された遺構の平面と断面の実測が行なわれた。

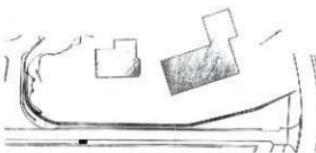
##### ・調査の概要

A 地点は、校庭と裏門からはいる通路の境に位置し、ブルーへ上がっていく坂道の手前にあたる。排水管の埋め込み中に、石水路が露出した。現地表面から約 1.5 m 下にあり、北東方向から南西方向へ続いている。石水路の中は粘土質の土が上部まで詰まっている。露出した水路は長さ約 4 m、幅約 0.6 m であるが、西の方向へ更に続いている。水路の断面をみると厚さ 0.2 m、奥行 0.3 ~ 0.6 m の凝灰岩の四角な切石を三段に積み、上に横幅約 1 m、長さ 1.5 m の扁平な凝灰岩の切石を用いて蓋としている。地山の凝灰岩の岩盤を削り取り、水路が造られている。

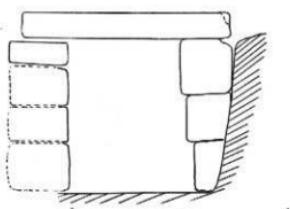
校庭南側の B 地点はフェンスの付け替え中に、石水路が露出した。A 地点のものと比較すると小規模である。底幅約 0.3 m で、底面に薄い凝灰岩を敷いている。側面は高さ 0.2 m、長さ約 1 m 前後の石を並べている。溝底および周辺から近世の瓦片が出土した。



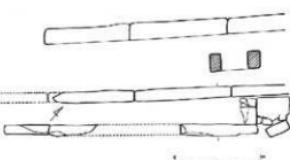
4-3-4-10図 石水路の所在地  
(A昭和55年調査 B昭和56年調査)(第1図)



4-3-4-11図 水路の位置(第2図)



4-3-4-12図 A地点の水路の断面図(第3図)



4-3-4-13図 B地点の水路の平面図・断面図(第4図)

< 43 (熊本県立第一高等学校体育倉庫の旧軍事施設) >

報告書：熊本県教育庁『限本古城史』1984

調査期間：昭和 56 年 (1981)7 月 28 日

調査面積：不明

調査主体：熊本県教育委員会

・調査に至る経緯

昭和 56 年 (1981) に第一高校校庭東側に体育倉庫新設の計画があり、工事着手と並行して立会調査が行なわれた。

・調査の方法

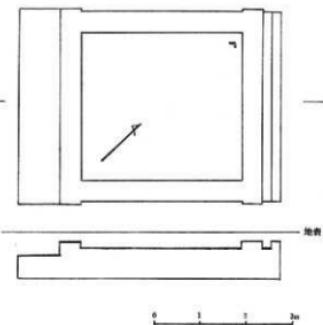
バックフォーによる表土除去中に行なわれた。

・調査の概要

バックフォーによる表土除去中に、数回にわたる校庭の客土下約 20cm の深さから、赤煉瓦の遺構が見つかった。遺構は幅 4.2m、長さ 2.9m の大きさで、校庭に面する部分が入口である。入口に奥行 90cm

の一段低いテラスがあり、その奥に幅 40cm の基礎に囲まれた長さ 3.5m、幅 3.2m の床面が認められる。床面は赤煉瓦の上にセメントをはり、東北の隅に「L」字の鉄骨油の一部が、ねじ切られた状態で見つかったほか、床面に機械油とみられる油痕が点在していた。壁については不明であるが、漆喰やセメントを使用した痕跡は認められない。覆屋の奥には深さ 15cm の溝が掘り込んである。

この遺構の構築はすべて赤煉瓦を使用し、中央部で厚さ 65cm、周囲の建物基礎部分では 80cm の厚さで、煉瓦 7 段を積み上げたものである。



4-3-4-14 図 大日本帝国陸軍施設の遺構

< 44 (熊本県立第一高等学校セミナーハウス建設予定地) >

(平成2年(1990))

報告書：熊本市『新熊本市史』通史編 第二巻 中世

1998

調査期間：平成2年(1990)9月

調査面積：377 m<sup>2</sup>

調査主体：熊本県教育委員会

・調査に至る経緯

清香会館を解体して、セミナーハウスとして建て替える工事の計画に伴い発掘調査が行なわれた。

・調査の方法

建築予定地の全面発掘調査である。

・調査の概要

調査区の全面に広がりを持つ凝灰岩の岩盤を掘り産めた大型の掘立柱建物が、1棟検出された。縦に長い建物で、間口3間奥行き18間の縦柱建物である。規模は梁行8.1m、桁行27m、柱間は、梁行で2.7m、桁行1.5m。一边が30cm程の柱穴は方形を呈しており、加工材の角柱が使用されていることがわかる。

さらに、この建物に付随する地下室が検出された。岩盤を長円状に掘り下げたもので、入り口は北東側にあり、4段からなる「く」の字形の階段が下がっていた。地下室の規模は、南北の長さ10.6m、東西の幅3m、深さは2.6m、床は二段掘りで、南側が段下がりの状態であった。

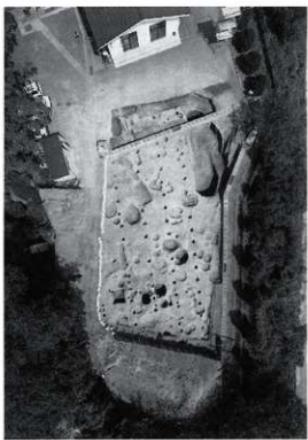
地下室は廃棄されるときに、土砂で完全に塞がれた状態にあった。埋土から、多量の遺物が出土しており、埋土の上位からは、陸軍時代の大型石碑が掘り出された。

この他に、小型の掘り抜き井戸も検出された。時代は推定できなかったが、検出状況から、建物が建てられる以前の遺構と考えられる。直徑は1.7m程で、凝灰岩をじかに深く掘り込んでいた。深さ8mまで掘り進んだが、危険なため、その深さで作業を中止した。

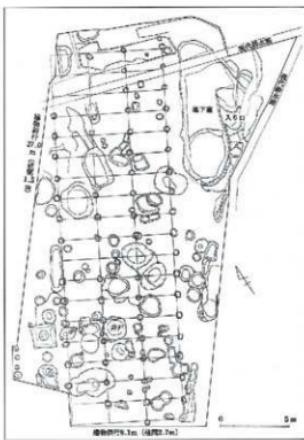
出土遺物から、この建物と地下室は、17世紀後半から18世紀前半にかけて建造されたことがわかる。これらが廃棄されたのは明治の初期である。青磁(15世紀中葉～16世紀初期)が出土している他は、青磁・白磁・染付・陶器・土師器・小銭などが出土した。



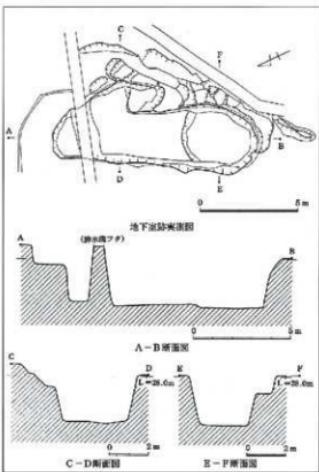
4-3-4-15図 熊本県立第一高校敷地内における調査箇所(第56図)



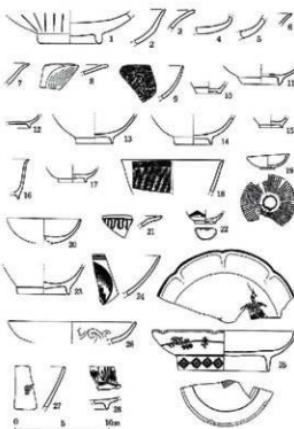
4-3-4-16 図 平成 2 年度調査区航空写真



4-3-4-17 図 平成 2 年度調査区（第 57 図）



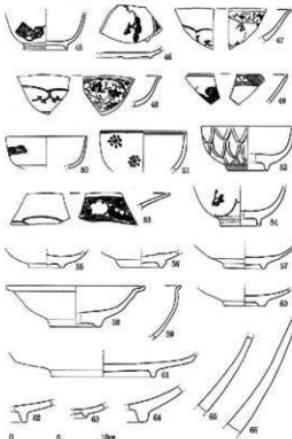
4-3-4-18 図 地下室跡実測図



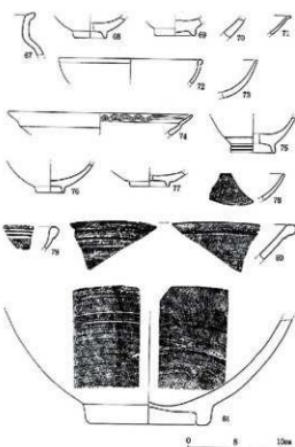
4-3-4-19 図 出土遺物実測図③(第 58 図)



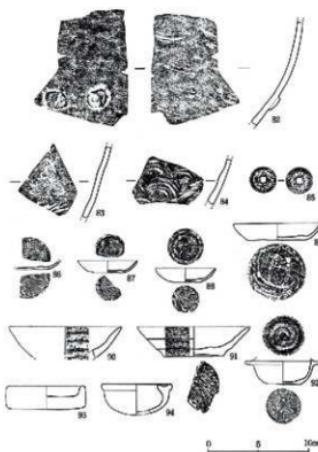
4-3-4-20 図 出土遺物実測図④(第 59 図)



4-3-4-21 図 出土遺物実測図⑤(第 60 図)



4-2-4-22 図 出土遺物実測図⑥(第 61 図)



4-2-4-23 図 出土遺物実測図⑦(第 62 図)

< 45 (校長官舎建設予定地の調査) >

報告書:『新熊本市史』通史編 第二巻 中世

調査期間: 平成4年(1992) 8月～同年9月

調査面積: 不明

調査主体: 熊本県教育委員会

・調査に至る経緯

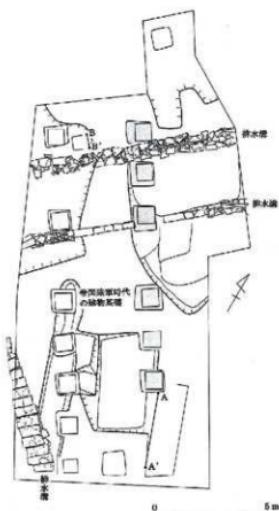
第一高校校長官舎の建設計画に伴う発掘調査が行なわれた。

・調査の方法

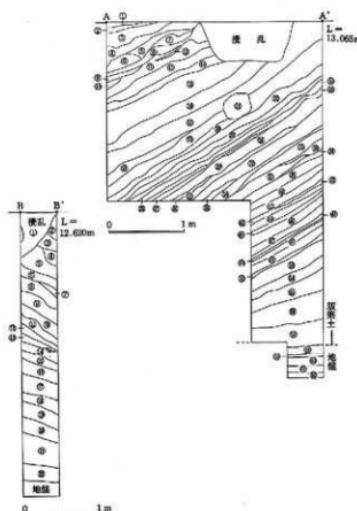
建設予定地の全面発掘調査が行なわれた。

・調査の概要

調査区の北側から幅6m近い版築土塁が検出された。石列に先行する遺構で、最高で厚さ5m、合計60枚近い版築が積み重なっている。版築土塁の基礎は砂地で、その上に暗褐色土黄褐色土が積み上げられている。



4-3-4-24図 平成4年度調査区実測図(第63図)



(第19図の観察図では左側がA、右側がA'であるが、  
実際は逆である)

4-3-4-25図 版築土塁観察図(第64図)

## < 46 古城上段（国立熊本病院）>

報告書：熊本県教育委員会『熊本城遺跡群古城上段』2012

調査期間：平成14年（2002）8月1日～平成15年（2003）3月31日

調査面積：2200 m<sup>2</sup>

調査主体：熊本県教育委員会

### ・調査に至る経緯

平成13年度から国立熊本病院の増改築及び更新築工事に係る事業開始が予定され、工事対象となる土地が熊本城遺跡群に含まれているので着工時期及び工事工程に沿って埋蔵文化財発掘調査の実施を依頼したい旨の申し入れがあり、協議が行なわれた。熊本県文化課では、周知の埋蔵文化財包蔵地「熊本城遺跡群」の範囲ではあるが、本来、特別史跡熊本城跡の範囲に含まれるべき地域であること、また、これに先立ち同年8月20日に熊本市文化財課において国立熊本病院駐車場の確認調査が実施され、遺構の存在が確認されていることなどを勘案して、熊本市が策定している「熊本城整備計画（案）」との整合性を確保する必要があると判断された。そこで熊本県文化課、熊本市経済振興局熊本城総合事務所、熊本市教育委員会文化財課との協議が行なわれた。既に熊本市教育委員会文化財課において、平成12年（2000）8月30日に確認調査を実施しており、その結果、西区高台では旧地形がよく残り、井戸跡、石垣、土坑、柱穴などが確認されている。また、古城上段は、近世熊本城築城以前の「隈本城」の本丸及び外郭の付帯施設が存在した。近世熊本城築城後、長岡帶刀（のちの長岡主水）の下屋敷となり、後に松井家屋敷の庭園にあたることがわかつており、昭和15年（1940）までは指定範囲に含まれ、昭和57年（1982）に策定された「熊本城跡管理計画」では特別史跡指定範囲に準ずる「第Ⅰ種地域」に位置づけられている。平成13年（2001）3月13日県文化課へ概要報告がなされた。提示された設計では、「西区の高台」の削平を含んでおり、熊本市の都市景観条例にも抵触するため、このままの設計では容認は困難であること、市文化財課の調査方針として「現状では建て替え事業は止むを得ない」が、歴史的変遷が明瞭に残される「西区の高台」の削平を行わない基本設計とし、周囲の景観との調和を図る建物設計とすべきであること、「但し、設計変更ができず発掘調査を実施した際に重要な遺構が検出された場合、再度協議が必要となる」との考え方が示された。

同年10月30日、増築部分に係る確認調査依頼が提出され、同年11月8日に現地調査を実施した。同年11月、次年度予算に熊本病院看護学校・体育館の埋蔵文化財調査費を計上し、同年12月26日九州厚生局・熊本病院から当該地の埋蔵文化財に係る調査依頼が提出された。平成14年（2002）1月22日、看護学校・体育館建設工事に係る文化財保護法第57条の3の通知を受理した。平成14年8月5日から発掘調査を開始した。

### ・調査の方法

発掘調査は、熊本市での調査体制が取れない平成14年度に限って熊本県で対応することとし、実施にあたっては「熊本城遺跡群古城上段調査検討委員会」の指導助言を受けることとした。また調査工程上の出土置き場関係より、2回に分けて表土剥ぎを行なっており、最初に着手をした概ね5～8グリッドを調査I区、概ね3～4グリッドを調査II区と呼ぶ。なお、調査検討委員会で遺構の保存が決まった後、調査I区の一部と調査II区は、遺構プランの確認のみに留め、完掘は行なっていない。

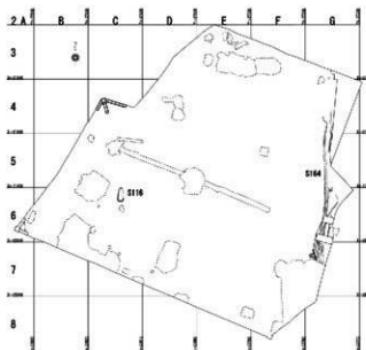
### ・調査の概要

調査の結果、後世の削平を多く受けていることが土坑などの掘削の深い遺構は良好な状態が残っており、上限は中世前期にまで遡る遺構が残っていることが判明した。発掘調査の結果から、遺構の時期は下記の6期に分類された。

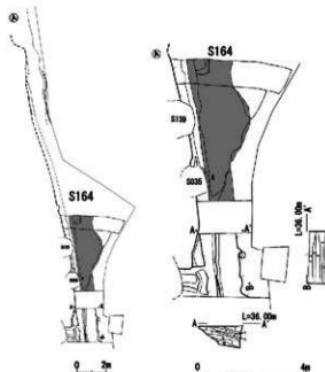
- I期 13世紀～  
 II期 16世紀前葉～後葉  
 III期 16世後葉～17世紀前葉  
 IV期 17世紀前葉～後葉  
 V期 18世紀前葉～後葉  
 VI期 19世紀前葉～中葉  
 VII期 19世紀中葉～20世紀中葉

古城上段については、記載内容に倣い、以下各時期について調査成果を述べる。

I期の遺構は、調査区東側に道路遺構が1条検出された。強い硬化面が2面あり、1面と2面の間には龍泉窯青磁碗IIb類と土師皿が出土したため13世紀半ばより存在するものと考えられる。硬化面2面の上層は16世紀代の遺物も混じり、隈本城の築城までは塹地状に残ったものと思われる。



4-3-4-26図 I期造構配置図(第4図)



- 1層 喬潤色土  
 粘性を持つかな土層で、2mm大の細かなロームの粒が凝り、固くなっている。  
 2層 喬潤色土+培養色土  
 塗色のロームを基本に喬潤色土が信じる。  
 3層 喬潤色土  
 1に似る  
 4層 喬潤色土+培養色土  
 2に似る  
 5層 黒潤色土  
 1に似る  
 6層 喬潤色土+黄潤色土  
 黄潤色土は、2cm大のブロックで喬潤色土と重じり合う。  
 7層 黄潤色土  
 黄潤色土を基本に喬潤色土が少額附じる。  
 8層 喬潤色土+黄潤色土  
 喬潤色土のブロックは、大きく5~10cm大で喬潤色土に覆する。  
 上層は、硬泥地がある。  
 9層 黄潤色土  
 ほぼ純粹な黄潤色土で、上面には、硬化面あり。  
 10層 喬潤色土  
 粘性を持ち、純粹、しまりがある。

4-3-4-27図 I期造構実測図(第5図)

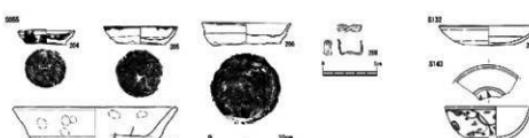
II期は、北側では削平を受け、南側では盛土が行なわれているが、中世後期の限本城の遺構は調査区西側、南側より検出されている。遺構を埋める埋土は灰味がかった砂質の暗褐色土であった。検出した遺構は、掘立柱建物7棟、柱列3列、堀が1基、土坑は全部で10基である。南北に設けられた掘は西側斜面に面しており、その内側に柵が並行して設けてある。柵から西側へは柵が続き、鍵曲がり状になっている。柵の東側では5棟の掘立柱建物が検出されている。少なくとも2つの時期の建物が検出されており、長屋状の建物であるS240とS240が検出された。S240は東西に桁行きをとる7×2間の建物で、S238は南北の桁行きをとる5×2間の建物である。S240からは凝灰岩製の火輪が出土した。他の遺物は、16世紀に比定される景徳鎮の染付碗、土師小皿・壺、瓦質土器が出土した。



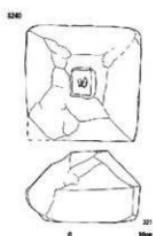
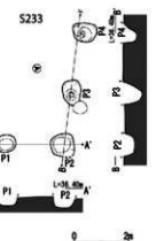
4-3-4-28図 II期遺構配置図(第6図)



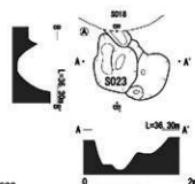
4-3-4-29図 II期遺構実測図(第16-24図)



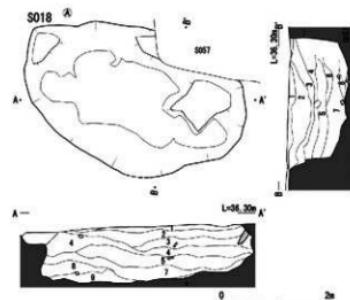
4-3-4-30図 II期出土遺物実測図(第25図)



III期の遺構は、道路が検出された。古代の官道遺構でも見られる波板状の産みが入れられている。南側から緩やかな傾斜で北側に登っている。他の遺構では、土坑が16基検出されている。遺物は1590～1610年代の肥前陶器の皿や瓶、土師器の灯明皿が出土している。また、産地不明だが残存率が比較的高い茶器が出土した。

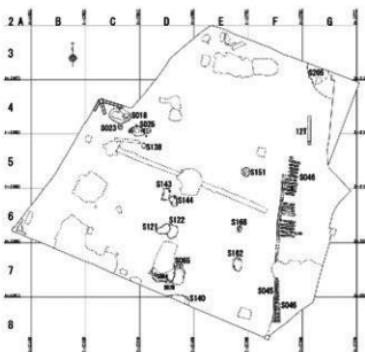


S023  
1層 布面色土  
1-2mmほどの砂利の塊混色土で、カーボンが混じりボロボロともいひ。  
2層 布面色土+表面色土ブロック  
黄褐色のブロックが均等に並び、しまっている。

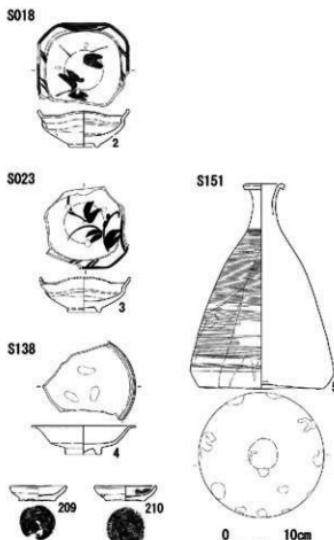


S018  
1層 布面色土  
細かな砂利の塊混色土に5-10mm大の砂利が混じる。  
2層 灰白色土  
灰白色的土中に多い密度で、5-30mm大の砂利が混じる。  
3層 棕色土  
棕色の粘質土が10-100mm大のブロックでバラバラと並ぶ。  
4層 布面色土+棕色土  
粒度の布面色土に3層が混じる。  
5層 布面色土  
5-10mm大の砂質土でかたくまとまる。カーボンが混じる。  
6層 布面色土  
5層よりまとまりがなく、ボロボロしている。  
7層 布面色土  
粘性がありやわらかい。  
8層 布面色土  
7層より色が黒く、まとまりがある。  
9層 黄褐色土  
黄褐色ロームを中心で布面色土が封じる。

4-3-4-32 図 III期遺構実測図（第 27・28 図）

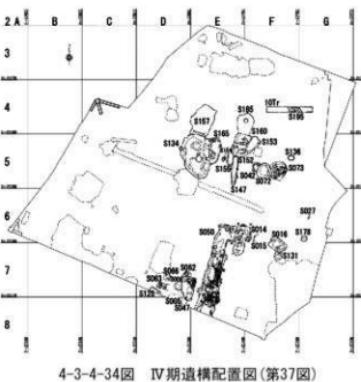


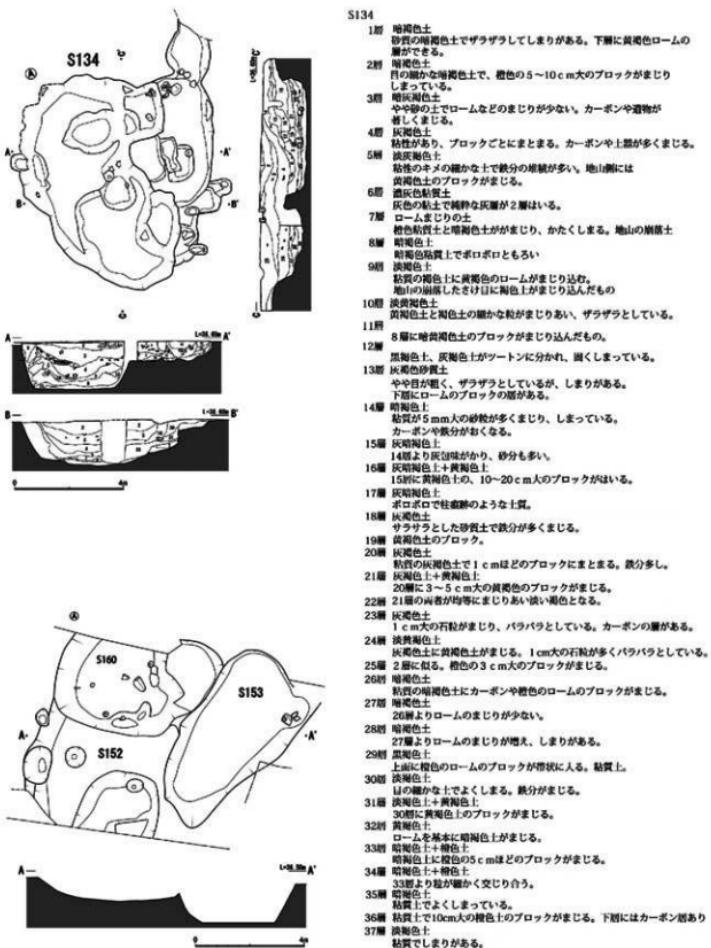
4-3-4-31 図 III期遺構配置図（第 26 図）

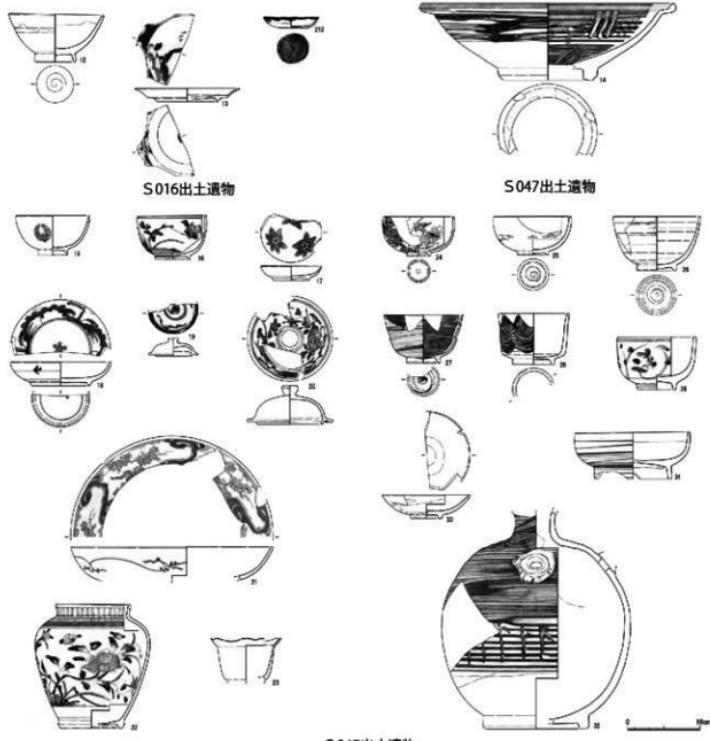


4-3-4-33 図 III期出土遺物実測図（第 36 図）

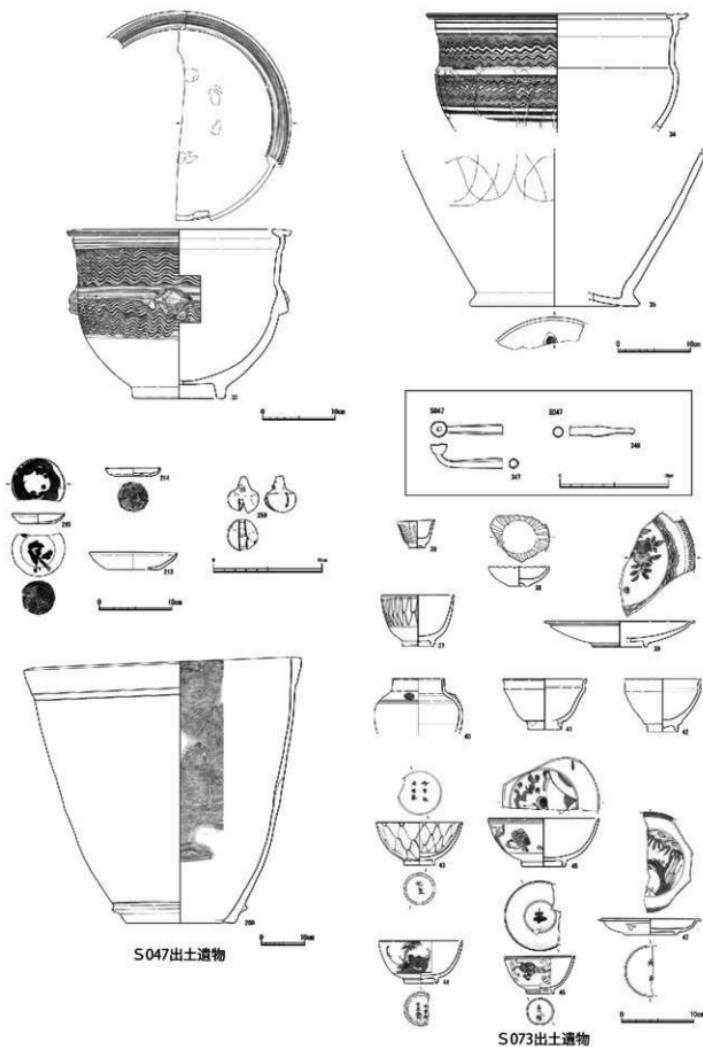
IV期の遺構は、道路遺構と大型の土坑が検出された。道路遺構は、南から北へ延び、E-6区で東へ直角に折れ曲がり、中央部には強い硬面が残る。屈曲部の東側には石垣も残り、道路の南側には瓦溜りがある。大型土坑は、陶磁器の破片とともに、貝殻や魚骨、獸骨使用済み食材も廃棄されたようである。数枚、厚い炭の層が確認された。特に大型のS 134からは、抹茶碗や菓子盆、合子、花瓶など、茶の湯の道具の破片が大量に廃棄してあった。調査地中央より西側にかけて空白地がある。遺物は、肥前産陶器・染付・青磁が多く、他には瓦質土器の鍋・甕や土師器の皿、焼塩壺、基石、煙管の吸口、青銅製の杓子、錢貨、三巴文が施された軒丸瓦が出土している。また、前述のIII期と同様に残存率が比較的高い茶器が出土している。



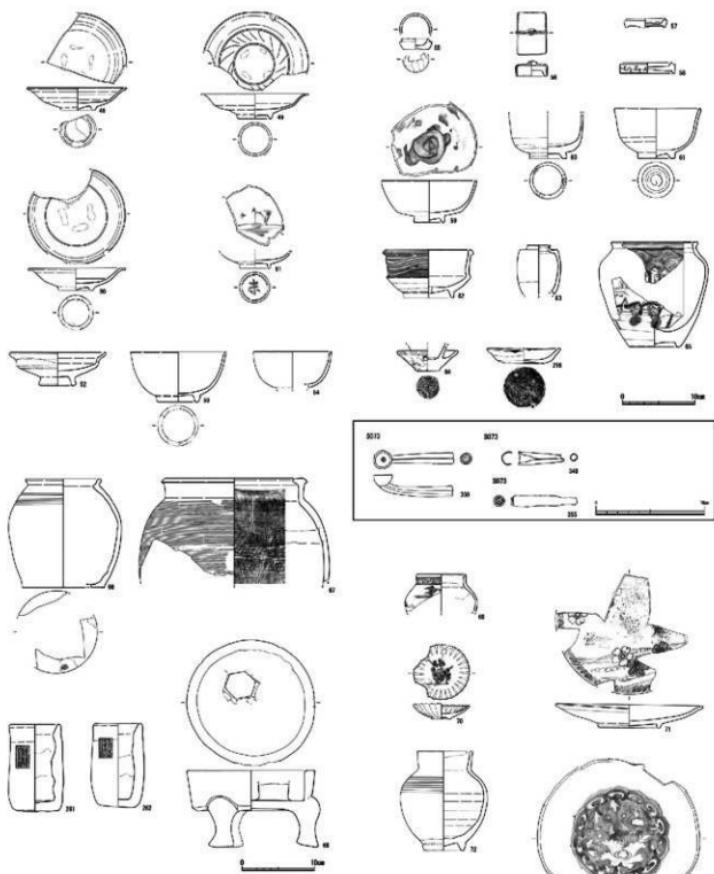




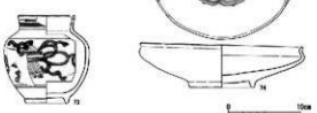
4-3-4-37 図 出土遺物実測図 1(54 ~ 57 図)



4-3-4-38図 出土遺物実測図2(第58~61・144図)



S073出土遺物



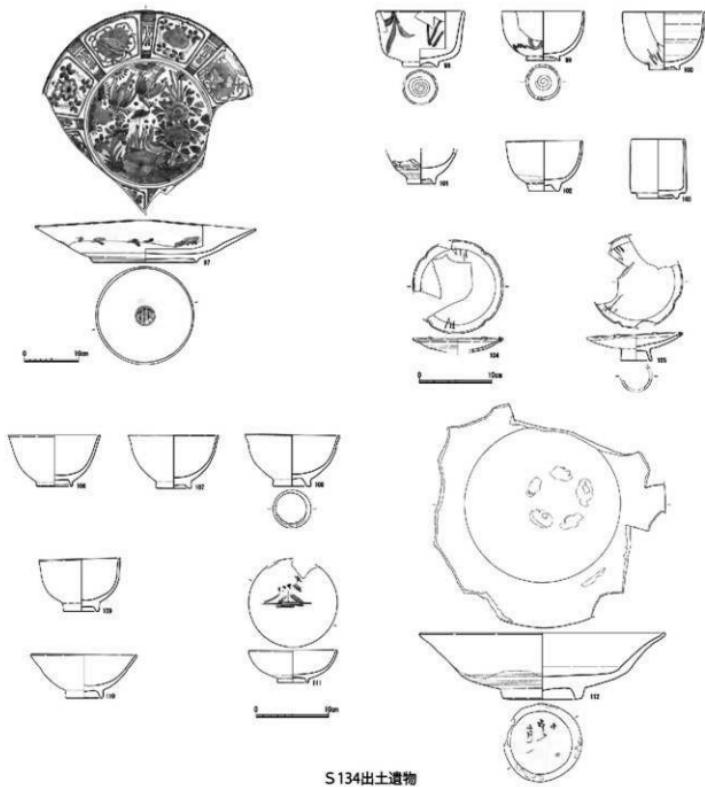
S134出土遺物

4-3-4-39図 出土遺物実測図3(第62~65・144図)



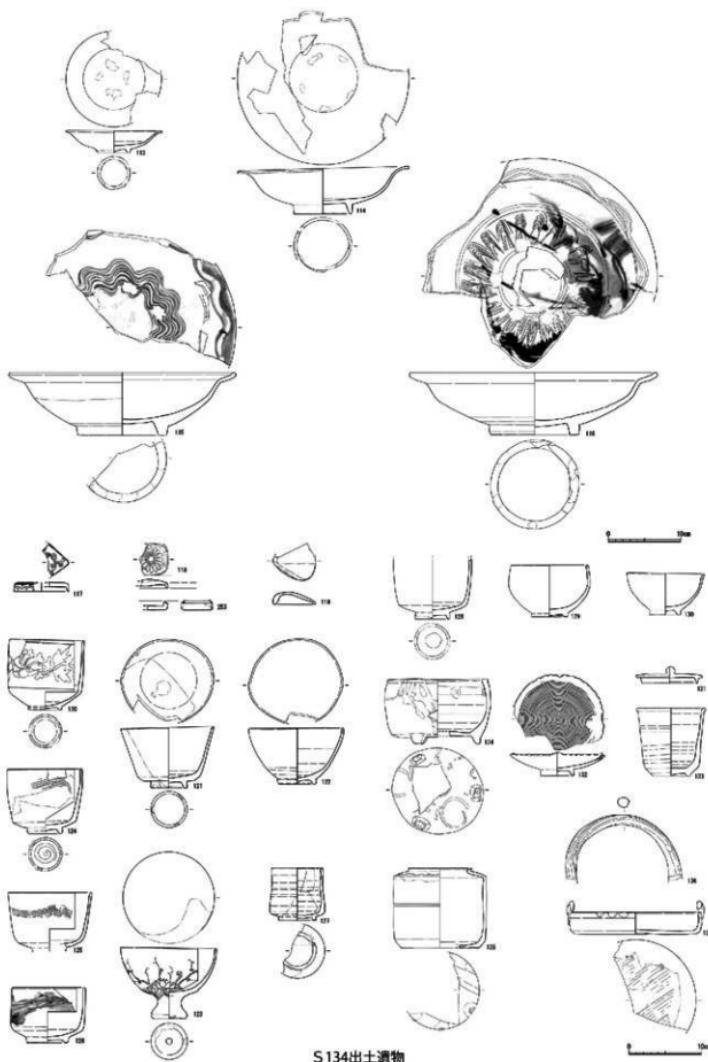
S 134出土遺物

4-3-4-40図 出土遺物実測図 4 (66~69図)



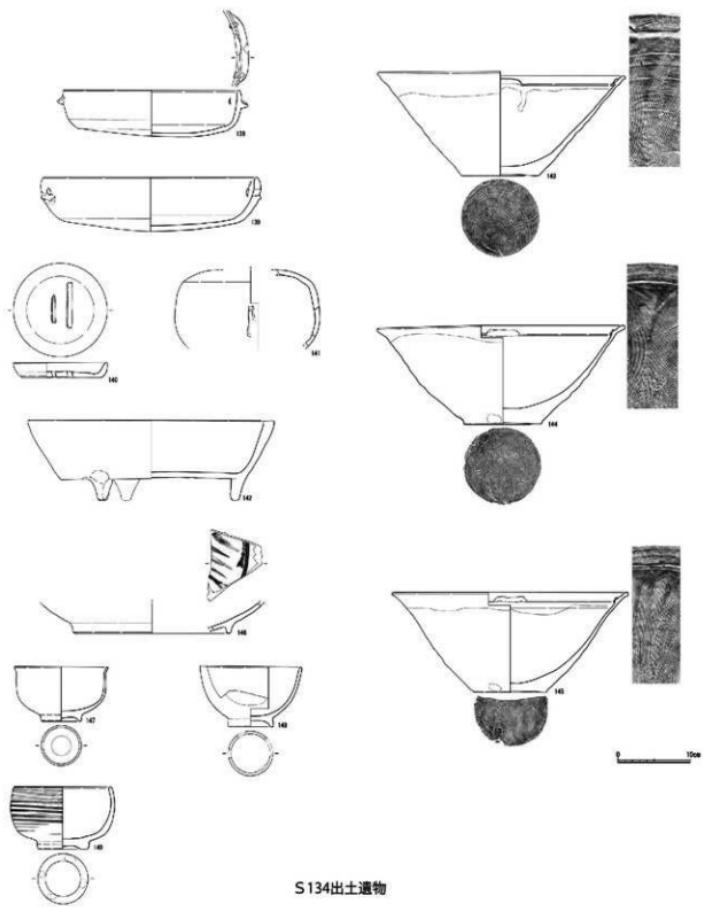
S134出土遺物

4-3-4-41図 出土遺物実測図5(第70~73図)



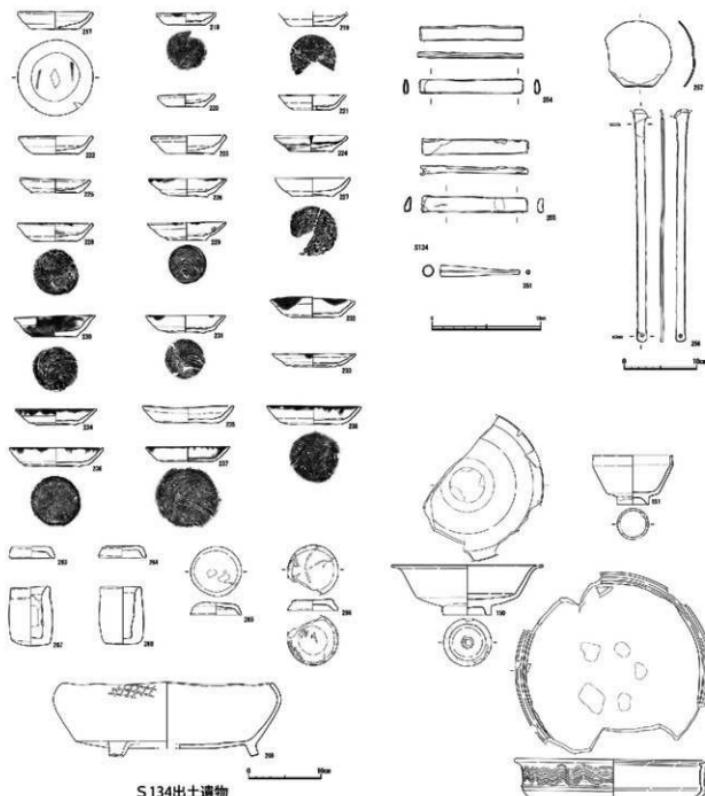
S134出土遺物

4-3-4-42図 出土遺物実測図6(第74~77図)



S134出土遺物

4-3-4-43図 出土遺物実測図7(第78~81図)



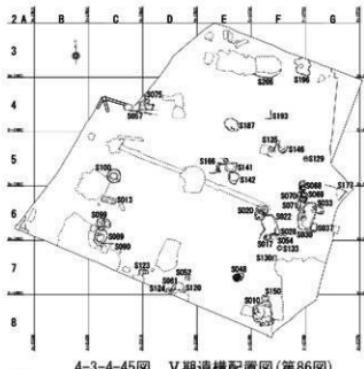
S134出土遺物



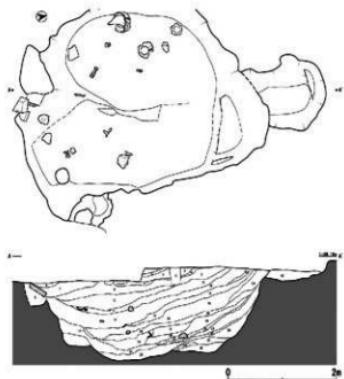
S153出土遺物

4-3-4-44図 出土遺物実測図8(第82~85図)

V期の遺構は、小規模な土坑が東側と西側に縦に並ぶ。土坑からは陶器の破片や使用済みの食材が出土する。大型土坑のS20には東方向より地山を削り出した階段が設けてある。調査地中央より北側は、空白地となっている。遺物は主に陶器の碗・鉢・染付の碗・土器器の灯明皿、在地の陶器、錢貨が出土した。



4-3-4-45図 V期遺構配置図(第86図)



- 1層 黒褐色土  
黒褐色粘土に砂粒や暗褐色土の粒が少し混じる。
- 2層 暗褐色土  
目の細かな暗褐色土(暗褐色土と黄褐色土が均等に混じったもの)に2~5mmの大さの灰褐色土のロームのブロックやカーボンの粒がまじる。
- 3層 暗褐色土  
2層の上に灰色の砂質土が解状に重なる。
- 4層 淡灰褐色土  
目の細かなサラサラとした上に1cmの大の黄褐色、灰白色のロームの粒が混じる。
- 5層 明褐色土  
柱直、ボロボロとした粘質の土。
- 6層 黑褐色土+褐色土  
黒褐色粘土に褐色粘土の5cm大のブロックが混じる。
- 7層 喀褐色土  
喀褐色 粘土をベースに2cm大の褐色 粘質土、灰白色 粘質土、礫が混じる。
- 8層 黑褐色土  
砂質土+暗褐色土が混じり合い、ボロボロとやわらかい。
- 9層 淡灰褐色土  
粘質の灰褐色土にロームのブロックやカーボンが著しく混じり、全体に固めている。
- 10層 淡黃褐色土  
目的の粘土質で、ザラザラとしている。中に2cm大の黄褐色ロームが混じる。
- 11層 黄褐色土  
黄褐色の粘質に1cmの小の石の粒や、5cmの大のロームなどが混じり、ボロボロとしている。
- 12層 黄褐色土  
粘質土を基本上に10cmの大の軽石や1cmの大の小石が多く混じり、バラバラしている。
- 13層 黄褐色土  
黄褐色 粘土が白く剥離している。
- 14層 淡灰褐色土  
砂質土が細くザラザラしている。
- 15層 黄褐色土  
砂質土でサラサラしている。
- 16層 暗褐色土+灰褐色土  
粘質の灰褐色土を中心になまり、隙をつくっている。両脇に暗褐色が入る。
- 17層 灰褐色土  
純粹の灰褐色土のブロックが入る。
- 18層 灰褐色土  
粘質の灰褐色土+暗褐色土+灰褐色土が均等に混じたものにカーボンが大量に混じる。
- 19層 淡褐色土  
粘質土+カーボンを含み、密でしまりがある。
- 20層 淡褐色土  
砂質でザラザラしている。1cmの大のロームの粒やカーボンが混じる。
- 21層 黄褐色土  
目の細かな砂質土。
- 22層 喀褐色土  
目の細かなシルト質の砂質土でやわらかい。
- 23層 海褐色土+黄褐色土  
粘質の褐色土に3cm人の黄褐色土のブロックがある。砂粒も多くザラザラしている。
- 24層 喀褐色土  
砂質土で1cm人の黄褐色ロームのブロックや、軽石の粒があり、バラバラとしている。
- 25層 淡褐色土  
目の細かな砂質でじりがない、やわらか。
- 26層 淡灰褐色土  
粘質土で5mm大の黄褐色ロームの粒や軽石の粒、カーボンが混じり、密である。
- 27層 橙色土  
橙色 粘質土を基本に黄褐色土がブロックで混じる。
- 28層 喀褐色土+黄褐色土  
喀褐色土と黄褐色土がブロックで混じる。
- 29層 橙色土  
ほんの純粋なローム。
- 30層 喀褐色土+黄褐色土  
喀褐色土 粘質土に5cm大のロームのブロックが混じる。

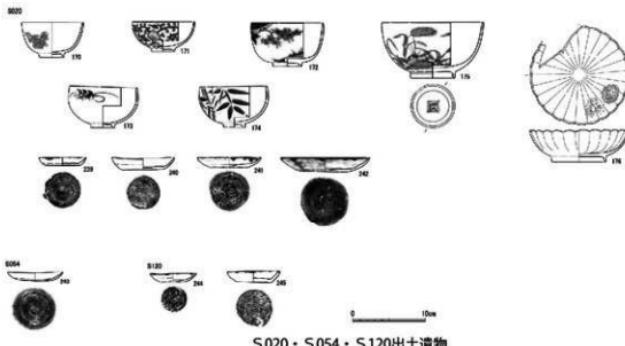
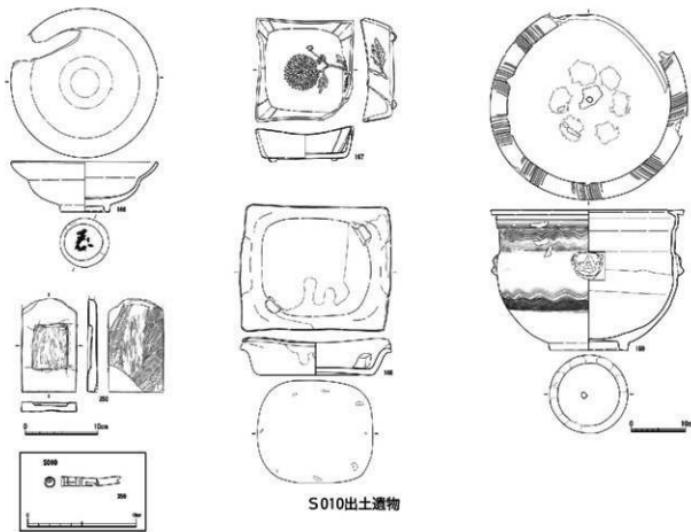
4-3-4-46図 S010構造実測図(第87図)



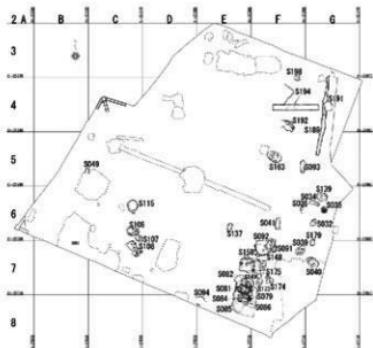
4-3-4-47図 S020遺構実測図(第90図)



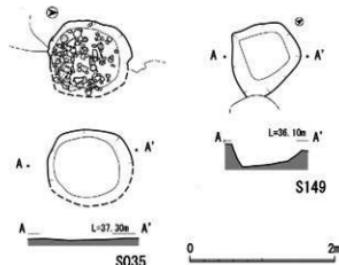
4-3-4-48 出土遺物実測図1(第105・106図)



4-3-4-49図 出土遺物実測図2(第107~109・144図)

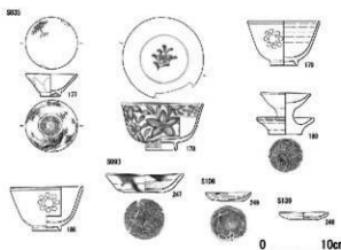


4-3-4-50 図 VI期遺構配置図(第 110 図)



4-3-4-51 図 S035・S149 遺構実測図  
(第 112・123 図)

VII期の遺構は、小規模な土坑が東側と西側に縦に並ぶ。縦に並ぶ土坑列は若干東側へ移動する。南側の大型土坑からは大量の瓦が出土した。土坑の多くは、陶磁器の破片や使用済み食材が出士する廃棄用土坑である。調査地中央より北側にかけて空白地があり、そこに建物があったことが推測される。調査地中央より北側にかけては空白地がある。他の遺物は、粘板岩製の硯が出土している。



4-3-4-52 図 S035・S093・S139・S149 出土  
遺物実測図(第 124 図)

VII期の遺構は、遺構検出面の上面より長屋状の建物基礎や排水溝、土坑が検出された。建物遺構の基礎部分は 40 cmほど掘り込みを施し、円礫と黒砂で埋められており、一部劣化したコンクリートが残存する。



4-3-4-53 図 VII期遺構配置図(第 129 図)

< 47 桜馬場 >

(平成 20 年 (2008) ~ 平成 21 年 (2009))

報告書：熊本市教育委員会『熊本城跡 桜馬場地区』2011

調査期間：平成 20 年 10 月 2 日～平成 21 年 10 月 15 日

調査面積：15200 m<sup>2</sup>

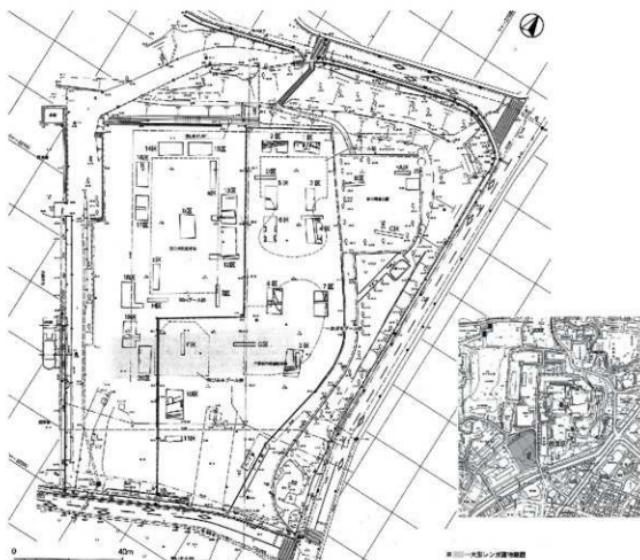
調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

熊本城跡桜馬場地区における観光サービス施設の建設が計画され、存在状況確認調査が行なわれた。

・調査の方法

熊本県営プール跡地を東西に分け、平成 20 年度に東側半分、平成 21 年度西側半分にトレーニングを設定して調査を実施した。トレーニングは計 32 カ所設けられている。I 層は重機により掘削し、II 層以下と道構は手掘りで掘削している。道構・道構面については、保護するため、手掘り作業で生じた廃土のうちキメ細かい軟質の土をもって被覆しており、場合によっては山砂を用いている。



4-3-4-54図 調査地点全体図(第9図)

### ・調査の概要

基本層序はⅠ層からⅣ層に大別されている。

Ⅰ層：現代の整地・搅乱層。

Ⅱ層：近代以降の堆積土層。今回の調査で検出された遺構は、いずれもⅡ層を掘り込んでいる。

Ⅲ層：凝灰岩粒を基質とする二次堆積土層である。

Ⅳ層：凝灰岩基盤層。

整地層は2層に分類されている。Ⅱ層は調査地点の南側(坪井川に近くなるほど)厚く堆積する。近代の整地に伴うもので、敷数所のトレンチにおいて近代瓦の集中がみられた。Ⅲ層の整地層は凝灰岩粒の二次堆積土で、部分的な検出状況である。遺物は少量であるが、16世紀代末から17世紀初頭の中国青花を下限としている。

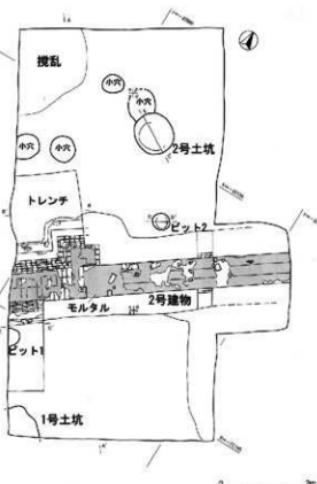
遺構については建物跡8基、溝15条、井戸2基、土坑4基、不明遺構を検出している。いずれも近代の整地層を掘り込んで構築されており、その後の熊本県営プール建設工事などにより破壊されている。建物は5形態みられ、石基礎、据え付け穴に転覆を充填する基礎、安山岩・凝灰岩などをまとめて根石としたもの、煉瓦建物、鉄筋コンクリート建物の遺構が検出されている。溝は、建物に伴う雨落ち溝、間知石を組んだ水路が検出されている。井戸は、石組のものと木組みのものが検出されている。土坑は基底に漆喰を敷き、底・側面に板を組んだものが検出されている。

調査地点中央には東西に伸びる煉瓦建物の基礎を確認している。9区は東側壁面基礎、19区は北側壁面基礎、20区は建物内部柱基礎部分を検出している。平面規模は、幅約14m、長さ約80~90mと長大である。煉瓦建物北側では、鉄筋コンクリート造建物跡を検出している。

出土遺物の大半は近代の瓦が多く、近代軍用品に関する遺物が目立つ。瓦は「元禄八年」銘や「仁平次」など江戸時代の刻印を持つ瓦が出土しているが、搅乱土からの出土など原位置を保っていない。軍用品については、規格にあった工業品であり大きさに差異はない。また煉瓦建物跡の関係から煉瓦が大量に出土したが、こちらも刻印を有するもののみ回収している。



4-3-4-55図 9区遺構平面図(第31図)



4-3-4-56図 19区遺構平面図(第57図)



4-3-4-57 図 出土遺物実測図

(平成 27 年 (2015) ~ 平成 28 年 (2016))

報告書：熊本城調査研究センター『熊本城調査研究センター年報 2 平成 27 年度』2016

調査期間：平成 27 年 7 月 21 日～平成 28 年 2 月 29 日

調査面積：127.93 m<sup>2</sup>

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

旧合同庁舎解体前に敷地内の埋蔵文化財の確認調査を実施した。

・調査の方法

江戸時代の絵図や近代作成の地図などを参考に、遺構が想定される箇所にトレンチを設定して検出・確認を行なった。基本的に必要最小限度で調査を実施し、遺構が検出された段階で掘り下げは部分確認までとした。

・調査の概要

基本的な土層は以下のとおりである。

I 層 表土層：現在地表面。アスファルト + 碎石で構成。

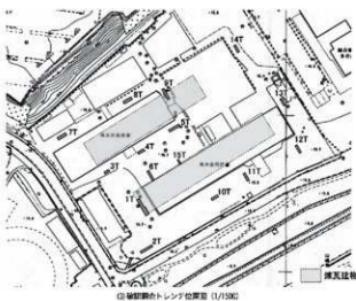
II 層 整地土層：現代の整地土層。煉瓦片やコンクリート片などを含む。まれに安山岩割石層が確認される箇所もある。

III 層 整地土層：火碎流堆積物（褐灰色）を中心とした近代の二次堆積土層。

IV 層 整地土層：火碎流堆積物（赤褐色、褐色）を中心とした二次堆積土層。

V 層 整地土層：凝灰岩を中心とした二次堆積土層。

遺物は、III層からは江戸時代後期～明治時代初期の遺物が混在する。IV層からは主に江戸時代の遺物が出土しているが、一部中世の瓦器碗片も出土している。



4-3-4-58 図 調査地点位置図

遺構については、1・9・15 トレンチにおいて近代煉瓦建物の一部を検出している。7・8 トレンチにおいて間知石の溝を検出している。他、9 トレンチにて建物基礎、4・5 トレンチにおいて土坑を検出している。間知石溝・建物基礎・土坑については明確な出土遺物はなかったが、Ⅲ層を掘り込んで確認されたので、近代以降に属するものと想定される。なお、江戸時代に関連する遺構は確認されていない。最浅部分で現地表面下約 40 cm から近代の遺構が存在する。確認された遺構の主要なものは、明治政府が熊本城を接收した後、大正頃に陸軍兵器庫として建設した建物基礎である。



4-3-4-59 図 調査地点写真図版

## 第5項 千葉城地区

### (1) 概要

本報告書でいう熊本城千葉城地区は磐根橋から瓶橋に通じる県道四方寄熊本線と旧坪井川河川敷と坪井川に挟まれた地区である(4-5-5-3図参照)。一部に民有地はあるものの、熊本家庭裁判所、旧九州財務局分室、熊本県伝統工芸館以下、県伝統工芸館、旧熊本国税局千葉城分室、熊本県立美術館分館、旧NHK熊本放送局などが所在する。

千葉城地区では、昭和38年(1963)のNHK熊本放送局の建築にあたり、古墳時代の横穴墓10基が確認された<sup>1</sup>。また、同様のものが磐根橋付近でも確認されており(磐根橋際横穴群)、旧白川・坪井川で侵食された崖面は、古墳時代の墓地として利用されていたようである。

その後、応仁・文明の頃に出田秀信が構えたとされる限本城は、『肥後国誌』によると千葉城にあったとされる<sup>2</sup>。加藤清正の熊本城築城に伴って城郭に取り込まれた。寛永7年(1630)前後の「熊本屋鋪割下絵図」(熊本県立図書館蔵)によると千葉城地区一帯は武家屋敷として利用されており、旧NHK熊本放送会館の高台は3区画に分かれ中央が長尾左衛門尉、東が富田内膳屋敷であった<sup>3</sup>。また、棒庵坂下の現熊本家庭裁判所付近は下津棒庵屋敷、熊本県伝統工芸館付近は野尻久左衛門屋敷と、東側は「明屋敷」となっている。

なお、寛永2年(1625)6月17日には熊本を震源とする地震が発生し、天守のほか、城中の建物に被害があり、50人ほどが亡くなったという。この時、震動の影響で煙硝蔵が爆発し周囲の家屋敷に被害があり、現監物台木森園にあった斎藤伊豆の屋敷やその東隣の防庵(下津棒庵)の屋敷が損傷したという。

寛永11年(1634)の「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」(熊本県立図書館蔵)<sup>4</sup>では、地区北東の坪井川右岸に桥形と櫓の構築が申請され、実施された。また、棒庵坂下から南東に向かって長さ221間、幅3間、両脇を石垣で護岸した水道が造られた。この水道は「玉川」と呼ばれている。

細川家入国後も一帯は武家屋敷として利用され、細川家入国後間もないとみえる「熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)によると、NHK跡地は長尾伊織屋敷、JT跡地は古木小屋、棒庵屋敷は大木織部の屋敷となり、県伝統工芸館敷地西側が「大工小屋」、東側は「朝山斎助」の屋敷となる<sup>5</sup>。この絵図までは朝山斎助屋敷南の道路境は、まだカギ型の折れが確認できるが、正保3年(1646)頃に完成した正保城絵図と推定される「平山城肥後国熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)では、屋敷境は表示されず「侍屋敷」とだけあるものの、南側の道路境は直線化し以後これが踏襲される<sup>6</sup>。

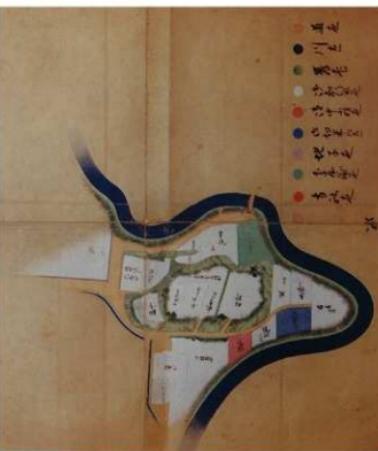
明暦3年(1657)以降とされる屋敷割絵図の「二ノ丸之絵図」(4-3-2-1図)では、旧NHK熊本放送会館の高台は2区画の屋敷地で西が吉田庄右衛門尉、東が松野善右衛門尉の屋敷である。高台の北側は3区画に分かれ、上林次郎左衛門尉屋敷と伊藤太左衛門尉後家屋敷である。また、地区の東端の坪井川に面する一帯は「えんしやう小や」となっている。JT跡地は御仕置所となり、県立美術館分館敷地は福岡市郎屋敷、県伝統工芸館敷地西側は大工小屋を前身とする「御作会所」、東側が「長岡左京亮殿」(右京家2代目細川忠春)、すなわち細川右京(通称、内膳)家が上屋敷として拝領している<sup>7</sup>。また、現在の熊本家庭裁判所付近は大木織部屋敷、沼田半之助屋敷である。

その後、元禄(1688~1703)前後の絵図ではNHK跡地の2区画は変わらず屋敷の所有者が変遷し、現熊本市教育センター付近にあった屋敷地が御掃除方会所となっている。県伝統工芸館敷地西側は役割所、東側が「長岡半左衛門殿」屋敷である。JT跡地は御貯物所となっているが、宝暦年間に仕置所に戻り、天明期には再び貯物所となった。

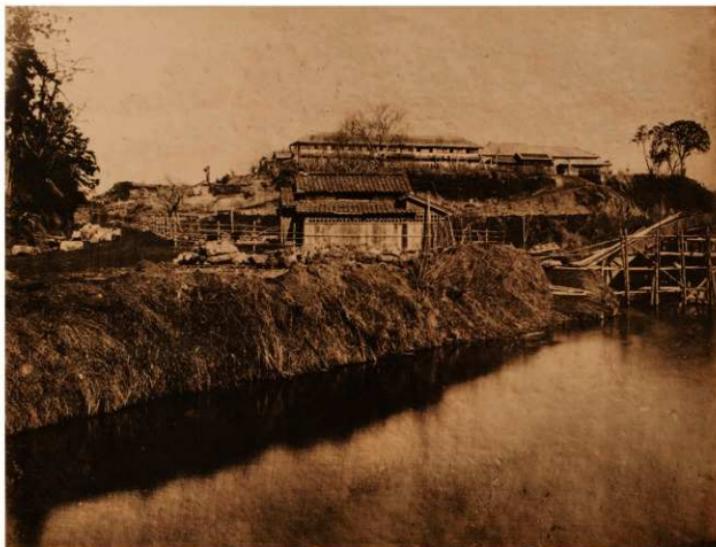
享保元年(1716)9月23日、右京家4代目の長岡内膳(細川忠英)屋敷から出火し、高田原まで火が広がる大火となった。そのためか宝暦(1751~1763)頃の絵図では西側は「役所」とあるが東側の長岡屋

敷部分には記載がなく無住の屋敷の期間が続いているらしい<sup>10</sup>。

天明7年(1787)迄成立の「二ノ丸絵図」(熊本県立図書館蔵)<sup>11</sup>や文政10年(1827)3月の「御土居絵図」(熊本県立図書館蔵)<sup>12</sup>では地区東端にあった煙硝藏は区画が細分化された屋敷地となり、県伝統工芸館敷地は3区画に分かれ、区域中央の道路側が「穿鑿所」用地となっている。また、穿鑿所の西側は役割所、東側と北側は「長岡内膳揚屋敷割残」の付箋があって、まだ長岡内膳家の屋敷扱いとなっていたが、文政の絵図では、穿鑿所の東が「御掃除方御用屋敷」に使用されている。貯物所の敷地に沿って流れている玉川は、文政年間に西寄りに流路が改変され、旧流路には藏が新設された(4-3-5-1図)。また、この頃千葉城地区には藩の機関が増加しており、前述した通り県伝統工芸館敷地には穿鑿所のほか、



4-3-5-1図 ニノ丸之内千葉城段山(熊本県立図書館蔵)  
千葉城部分



4-3-5-2図 南から見た熊本中学校(熊本城顕彰会蔵)

役割所と御掃除方御用屋敷が置かれた。また、安政4年(1857)以降とされる「二ノ丸之絵図」(永青文庫蔵)<sup>1)</sup>ではNHK跡地の西端は掃除方用屋敷、県立美術館分館付近には櫛方用屋敷、飽田託摩人馬所、役割所が置かれた。棒庵坂下の役割所は新たに蔵(東御蔵)となり、県伝統工芸館敷地には「新牢」が新設されている。なお、東御蔵は明治5年に撮影された写真に壁を漆喰と下見板とする南北棟の蔵の一部が写っている。

明治時代になって陸軍が置かれると、明治9年に棒庵坂下に工兵第六小隊が花畠から棒庵坂下に仮営した。また、同年にNHK跡地の高台には熊本中学校が置かれたが(4-3-5-2図)、明治10年(1877)の西南戦争で焼失した。戦中は千葉城附近守備隊が厩橋・千葉城・棒庵坂・本丸に置かれ、砲台が築かれた。その後、明治12年(1879)の「熊本城郭及市街之図」(国立国会図書館蔵)の市街図によるとNHK跡地一帯は工兵営、KKRホテル熊本一帯は陸軍倉庫となり、熊本家庭裁判所一帯は輜重兵営となった<sup>2)</sup>。その後、輜重兵は古京町に移転し、跡地は明治22年(1889)当時には「調場」とある<sup>3)</sup>。明治23年(1890)、NHK跡地には憲兵本部が設置され、J T跡地には大正中期以降に軍の官舎が置かれた。その後、NHK跡地には昭和4年(1929)に偕行社が設置されるのに伴って、坂道の整備が行なわれた。昭和6年(1931)11月に行なわれた陸軍特別大演習では偕行社に大本營と行在所が置かれた。

昭和12年(1937)、坪井川の流路が現在のように変更され、昭和28年(1953)・同36年(1961)の市街図では、千葉城地区に済生会病院、農地事務局が置かれた<sup>4)</sup>。済生会病院は昭和26年(1951)に花畠町から移転してきたもので、段山本町に移転する昭和33年(1958)まで存続した。昭和33年には熊本県立図書館が開館し、その後、国税局施設、国家公務員共済組合連合会のホテル五峯閣(のちKKRホテル熊本)が建築された。昭和38年(1963)にNHK熊本放送局が落成、昭和46年(1971)には日本専売公社(日本たばこ産業株式会社)が落成した。昭和55年(1980)、区域内中央の当該地に県伝統工芸館の開設計画があがり同年夏に事前の発掘調査が実施され、昭和57年に開館した。

また、日本たばこ産業株式会社が平成27年(2015)に移転し平成29年(2017)に建物が解体され、N HKも平成29年に花畠へ新築移転した。両敷地は令和元年(2019)10月16日に特別史跡熊本城跡へ追加指定された

1)『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会 1971

2)後藤は山編『肥後国誌 上巻』青潮社 1971

3)『特別史跡熊本城跡総括報告書歴史資料編 結図・地図・写真』熊本市 2019 5~10頁

4)永青文庫所蔵熊本大学附属図書館寄託「万覚書」寛永二年七月二十一日条

5)註3報告書 11~16頁

6)註3報告書 99頁

7)註3報告書 33~38頁

8)菅 芳生編『細川右京家資料集』右京家細川事務所 2013

9)熊本県立図書館蔵

10)熊本県立図書館蔵

11)註3報告書 99頁

12)註3報告書 102~103頁

13)註3報告書 137頁

14)註3報告書 150~151頁

15)宮内公文書館蔵「震災ニ闇スル諸報告」註3報告書 158~159頁

16)熊本都市政策研究所編『熊本都市形成史図集一覧後編』2016

(2) 発掘調査成果



48. 千葉城横穴群 49. 千葉城抜け穴 50. 旧坪井川畔遺跡

4-3-5-3図 千葉城地区範囲と発掘調査地点位置図

## <48 千葉城横穴群>

報告書：熊本市教育委員会『熊本市北部地区文化財調査報告』1971

調査期間：昭和37年(1962)3月

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

### ・調査に至る経緯

昭和36年(1961)2月10日、この地にNHK熊本中央放送局が設置されることになり、国とNHKとの間に敷地譲渡の契約が行なわれた。こうして同年6月測量、引き続き整地作業に移った。昭和37年3月5日、建物の基礎作業に併行して、敷地の拡張中横穴の発見を報ぜられ、調査が行なわれた。

### ・調査の方法

横穴群は千葉城跡の東南側、放送局への進入路を上りつめた現在の駐車場付近に6基、同じく西南側にある通用連絡口を上りつめた発電室の一带に4基、合計10基発見された。各横穴の個有番号は発見された順に名付けたものである。

### ・調査の概要

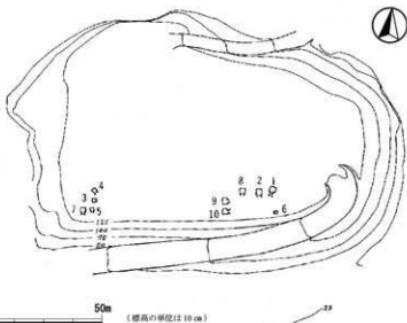
駐車場地区の6基について、各横穴は一定の標高上有る約100平方mの広場に、入口をそろえてならぶように発見された。

第1号横穴は玄室奥行1.95m、幅1.90m、を有し床の平面が隅丸の方形を呈する。玄室奥壁にそって長さ1.90m、幅55cmの屍床を丸彫りにし、副葬品は検出されなかつた。羨道部は長さ1.25m、その床は入口から玄室へむかって約20度の傾きで、斜めにつくられていた。入口には横穴の母岩と同様なア蘇溶岩の厚さ22cm、高さ75cmの切石をもって閉塞していた。天井部はブルドーザーによって削り取られ、旧状を明らかにしないが、おそらく玄室では高さ約1.50m、羨道部では高さ70cmを有したであろう。羨道部の床には細粉化した成人骨があつた。

第2号横穴は第1号横穴の西隣約3mに発見され、全体の構造や寸法とともに第1号に似る。とくに第2号では玄室の周壁上部に段状の軒まわりを彫りめぐらす。副葬品はなく、入口付近はブルドーザーに切られていたが、入口の前方約2mの位置に須恵器の台付壺1点が検出された。第8号横穴も第2号の西隣5mに発見され、だがすでにブルドーザーのため玄室の約1/3と羨道部を失っていた。副葬品はなく、第2号に似るが、玄室の軒まわりや屍床はなかつた。

第1・2・8号が南面して開口するのに対して、第9・10号横穴はともに入口が東面する。これらはともに重機搬入のため、入口が破壊されていたので、玄室の床の残存部分を実測した。ともに副葬品なく、人骨片は確認できなかつた。

第6号は同じ中央広場に面しながら1個だけ入口が西面し、第9号・第10号と対向する。この横穴は後にのべる発電室地区の第3号横穴とともに、異例の小型に属する。すなわち、玄室の平面形が馬蹄形に近



4-3-5-4図 千葉城横穴群の配置図(第73図)

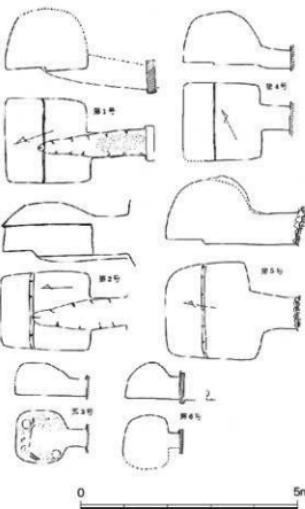
く、奥行1m、復原幅約1.10m、天井までの高さ80cm、羨道長25cm、復原幅約40cm、天井までの高さ50cmを有し、それでも入口には高さ68cm、厚さ10cmの阿蘇溶岩切石で扉を設けていた玄室の一部と羨道の位置側をブルドーザーのため切り取られていたが、副葬品はなく、わずかに人骨の細片を検出した。発電室地区の4個のうち第7号横穴だけはブルドーザーによって破壊されたが、他の3個は完掘し実測された。まず第7号とともに最南端に発見された第5号は、玄室の奥壁にそって床を一区丸彫りにした単調なもので、入口を10数個の阿蘇溶岩塊石で積み上げ閉塞していた。副葬品は、成人骨細片1体分が確認された。

千葉城横穴群ではいずれの横穴にも副葬品を伴わなかったが、第5号横穴の前庭部付近だけに須恵器の甕1個と高杯5、坪2、蓋2、台壠壺1、土師器の高杯1、坪3がまとまって発見されたというが、ブルドーザーの開削作業中に出土したため、配置や組合せの関係などはわからない。

第3号横穴は第4号の北隣のやや高い所に発見された。この横穴も第6号と同様な異例の小型に属し、

玄室の奥行約1.10m、幅1.20m天井までの高さ70cmを有し、羨道部は奥行約45cm、幅38cm、指頭大にそろった粒石を敷きつめ、頭を西北に置いた人骨1体と、頭を東南隅に置いた人骨1体が屈葬されており、ともに細片化していたが成人骨であった。人骨を片付けた後で試みに同じ位置に頭を置き、横臥してみたが非常に窮屈であるが、たとえ成人といえども収容できることが判明した。一般に玄室の面積が1m<sup>2</sup>前後の小型横穴については、子供を葬るかまたは火葬骨をおさめたのではないかと見るむきもあるが、本例が示す通り成人を追葬した場合もあることがわかった。

千葉城横穴群では個々に横穴に副葬品を伴うものがなかったので、年代決定の手がかりに乏しい。しかし全体に内部構造が均一化され、共通的な特色を有することは時間的に隔差のない頃の所産であることを示している。とくに第5号横穴の前庭部一帯から出土した須恵器の有蓋付壺形土器をはじめ一括遺物は、7世紀代の所産と考えられ、他の類例から考えてもこれらの横穴は7世紀中葉頃の所産であろう。その他にも千葉城の周囲には崖縁をめぐって数個の横基があるらしいが、現状では発見困難である。



4-3-5-5 図 千葉城横穴群実測図（第74図）

#### < 49 千葉城の抜け穴 >

報告書：熊本市教育委員会『熊本市北部地区文化財調査報告』1971

調査期間：昭和37年(1962) 3月5日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

##### ・調査に至る経緯

昭和36年(1961) 2月10日、この地にNHK熊本中央放送局が設置されることになり、国とNHKとの間に敷地譲渡の契約が行なわれた。こうして同年6月測量、引き続き整地作業に移った。たまたま昭和37年3月5日、建物の基礎作業に併行して、敷地の拡張中横穴の発見を報ぜられ、調査が行なわれた。

昭和37年3月5日、千葉城横穴群の調査中工事関係者から新たに横穴古墳発見の連絡を受け、早速現場を踏査した。

##### ・調査の方法

不明

##### ・調査の概要

穴が発見されたのは放送局への進入路を上りつめた位置から西北方に約50m、現在スタジオの録音調整室の直下あたりに相当する。穴は平坦な地面に対して約20度の傾斜をもって開口していた。穴は地中を素掘りにしたもので高さ約1.70m、幅約70cmを有し、天井をアーチ形につくり、床には奥行約30cm、高さ約30cmの階段を彫り出し、所々に平坦部が設けられていた。穴の方向は開口地点より東北方の藤園中学側に延々と続き、その出口は旧坪井川の沿岸にあるらしいが、約20m進んだあたりで崩壊し、確認できなかった。そして床の階段は崖線に近くに伴ない、傾斜も強く段の刻みも細かくなる。

さらに同日午後、放送局の通用入口に近い第7号横穴の直下付近に大きな横穴が開口した。この穴も天井部をアーチ状につくり床は平坦であったが、幅は1.50m近く東北から西南方に走ることがわかった。しかしこれを探索するにはすでに整地のため重機で寄せた土の重みがかさみ、穴の天井が崩壊し危険な状態にあったのでそのまま埋没した。

これらの穴について、戦時中陸軍信行社の職員が防空壕をかねた外部との連絡用トンネルを掘ったのではないかという説もあった。それにしてはあまりにも工事が入念で、たとえそうであったとしても信行社から東北方の丘麓に出るには幅約3mの道路があり、こんな幅70cmにみたない連絡用壕を50m近い距離にわたって掘ることもない。防空壕は千葉城の丘麓に幾つも掘られていたが、それらとつながる可能性はなかった。またこれらの穴は長い間、それも掘削以前人の通った形跡が認められなかつた。

## < 50 旧坪井川畔遺跡 >

調査期間：昭和 50 年(1975) 1 月 8 日～同年(1975) 1 月 21 日

調査面積：不明

調査主体：熊本城調査委員会

報告書：熊本城調査委員会『旧坪井川畔遺跡調査報告書』1976

### ・調査に至る経緯

昭和 46 年 10 月に開館した社会保険会館は、昭和 49 年に厚生年金会館と改称された。さらに昭和 49 年に増築を計画した。計画では昭和 8 年以降国指定史跡に編入されていた旧坪井川河川敷に職員宿舎が建築される。協議の結果、発掘調査を実施して記録に残すことになった。

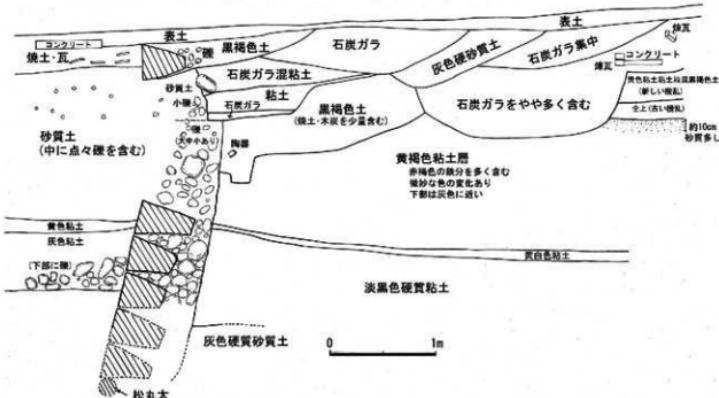
### ・調査の方法

文献調査では、調査地を含む内坪井最西端の一郭は、南側が大木氏の下屋敷となっており、北側には小栗九十郎と中嶋四郎右衛門の屋敷が東向きに並んでいた。大木氏はもともと佐々成政の家臣として肥後に下り、佐々氏滅亡の後加藤清正に仕えた弥助を祖先とする。小栗家は文政から嘉永頃は当主を五郎衛門と言い 35 人扶持である。

今回の工事は既設本館の北西部と東部とに増築を行なったものである。1 月 8 日西侧増築工事部分の立会を行なったが、擾乱が地下 2 m 程度まで達しており、埋蔵文化財に相当するものはみられなかった。次に 1 月 14 日より東側工事部分の立会を行なった。旧坪井川河川敷埋立地が含まれ、旧河川の遺構の存在が考えられた。予想通り下部に石垣が発見され、15 日より 17 日まで調査を行なった。さらに 21 日に補充調査を行ない、現地調査を終了した。



4-3-5-6 図 調査地位置図（第2図）



4-3-5-7 図 調査地石垣断面図（第3図）

### 3. 調査の概要

調査は石垣線の露出と断面観察に主力を置いた。調査地は湧水が激しく、加えて河川埋土が砂質土であるため、調査は著しく困難であった。石垣線下端は最初の掘削時の写真があるだけで、断面図を計測することはできなかった。石垣線は約 12 m にわたって露出した。その線は弧を描いている。この方向及び曲線は南側の河川対岸の張り出しに沿ったものである。上手(西側)では西方向に、下手(東側)では東南方向にそれぞれ伸びると推定される。東側では隣接する九電アパート南側石垣線がほぼ旧河川左岸の線を残しており、今回露出した部分の延長上に位置している。石垣構築に用いられた石材はほぼ縦 35 cm・横 40 cm・奥行 50 cm ほどの四角錐状を呈する割石である。熊本城等の近世遺構に用いられている石材と比較すれば、画一的に整形されたものである。また、背部が四角錐状につぼまっており、時代の新しいことが感じられる。おそらく明治以降の所産であろう。構築は前述の用石を布積にしている。作成した断面図によると、石垣内部の土層は上から石炭ガラの堆積層、三つの粘土層(上・中・下)、最下層が硬質砂質土となる。粘土層以下が自然堆積土と認められている。流水による堆積と考えられるが砂層がみられないことから、河川の大きな流れはなかったと調査者は考えている。また中位の白色粘土層が丘陵の鰐灰岩層に由来するとも考えている。結論として坪井川の自然流路が台地・丘陵間に沿って存在し、自然流路により形成された自然堤防を加工して石垣線またはその他の堤防線にしたとは考えられない。本来の流路は内坪井と外坪井の境界をなす水濠ではないだろうか。